
ロゼリア物語

(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロゼリア物語

【Nコード】

N22820

【作者名】

(仮)

【あらすじ】

大陸でも1・2を争う大きな国リンヴェル国…の超ド田舎に住む平凡な顔の少女、ロゼリア。

彼女の12歳の誕生日に父から衝撃の告白が。

「10になったら迎えに来るんだって」

「うち12だよ？」

迎えに来たのはロリコンのイケメンさん？

実は貴族で実家に帰るの？と思ったら後宮入り！？

後宮入りして数年。

大好きな王さまがなかなか来てくれない。

「あー！もう、家出してやるー！」

コメディ強の恋愛小説（を目指す）

ロゼリアのための物語。

（途中であらすじ付け足します）

あらすじも成長しました。

アンケート作ってみました。暇な方やってみてください

01 ロゼリアの始まり（前書き）

どうも、はじめましての方もそうじゃない方も（仮）といたします。
ネタ満載の（仮）に似合わず初の恋愛モノです。

多分コメディー色のほうが勝るでしょうけど頑張ります！

努力しますので広い御心でお付き合いくださいますようお願いしま
す（＾Ｏ＾）ノ

01 ロゼリアの始まり

金の髪に翡翠の瞳。

人並みの顔。

ちよつとドジでおバカ。

それがロゼリア・カシュー。

大陸でも1・2を争う大きな国リンヴェル王国。

…のドがつくほどの田舎に住む少女。

好奇心が旺盛で人みしりもせず、怖いもの知らずの図太い性格。

その性格ゆえ、3歳くらいで田舎（じい）に捨てられていたにもかかわらず皆に愛されて育った。

今日はそんなロゼリアの12のお誕生日だよ。

「はーぴばーでーロゼリーはぴばでえロゼリー」

「もつと真面目に歌ってよお」

この村は貧乏なので、山で採った果物で作った小さなケーキがいくつかに並んでいるだけだ。

ロゼリアにとっては祝ってもらっただけで十分嬉しいのだ。

文句を言えばそりやもつと贅沢なものを食べたいとは思うが。

「ロゼも今日で立派に12かーここまで育てるのに苦労したねえ」

「ひどいこと言わないでよ、母ちゃん」

「顔も、口も頭も悪いけど。15になれば結婚相手を探さなきゃねえ」

「ひどい！」

約10年前にロゼリアを拾って家族に入れてくれたのはこのカシューさん家。

顔も頭もいいねえちゃん。

ちよつとおなかに貫録がある母ちゃん。

いつも無口な父ちゃん。

この三人のお陰で私はここまで無事に育ってきた。

「大丈夫よ。このこ体だけは丈夫だから」

「ねえちゃん、だけは余分」

「あはは」

楽しい。

田舎だからそうそう面白いことなんてないけど、普通の日常が楽しくて幸せだった。

「ねえーあんだ。いつもより元気ないよ？」

いつもパーティーの時はにこにこしている父ちゃんの様子が変な感じ。母ちゃんも気がついたのか話しかけると父ちゃんは何も言わずに手紙を差し出した。

《ロゼリア》

そう書かれた手紙の封筒。

「うち？」

父ちゃんは頷いてうちにぐいっとすすめる。

それを受け取り、裏を見る。

《この子はロゼリア。どうかこの子を育ててください。》

「……」

封筒にこれだけ書いたら肝心な手紙の内容カスなんじゃ…？
そう思いつつも中の手紙を開く。

《10歳になったら迎えに行きます。それまでお世話をよろしくお願ひします。連絡先――。アンジェリ・ウェルセント。連絡くれれば報酬を授けますのでお気軽に連絡下さい》

どんな広告メールだよ。

それにしても、この手紙をよこした人はきつとお金持ちだろうなあ。
たぶん上質な紙だと思っし。

良くわからないけれど、茶色くないし端もきれいに切れているし。

……。

「つて、父ちゃん。これ10歳になったらって書いてない？」

いま12歳の誕生日会しているんだけど？？」

父ちゃんの表情はいつもの無表情で全く読めない。

もしかして…うちのことで手放すのが惜しくて…?!

「父ちゃ……!!」

「忘れておった」

「つておい!!」

「やだっ！ウエルセントつて、あのウエルセント公爵家の？」

うちからひったくった手紙をみてねえちゃんが叫んだ。

「なに…そのチーズみたいな名前」

「どの辺がよ！このポケチン！」

ねえちゃんがちよつとひどい突っ込みしてきた。

そんなになんかなくても…。ポケチンってなんだよお。

それにしてもうちってただの捨て子だと思ってたらすごい捨て子だったのね。

「でもうち、ずっとここにいるよね？」

「当たり前じゃない。どうせ2年も前に連絡しなきゃいけないのすっぽかしたんだから同じでしょ？」

そういつてにつこり笑うねえちゃん。

ねえちゃんに同意するように母ちゃんも大声で笑った。

「なあに、ばれなきゃいいのさ。それにあんたはうちの子だろ？」

それでいいのか？と突っ込みたいけどその気持ちは嬉しい。

「あんたがお嬢様なんて顔が平凡過ぎて浮くだけよ」

「それはひどい！」

ひどいこと言ってもやさしいこともたくさんいつてくれて、愛情をくれる。

母ちゃんもねえちゃんも大好き。

きつと、ずつとこつこつという時間が流れるんだ——と思ってた。

思ってたのに。

「すまん。昨日慌てて連絡した」

「父ちゃん!!」

なんてこつたい!!

だからそんなに暗かったの？父ちゃん！

てへって可愛くべるだしてもだめだよ!!？

「あんたって人は本当に変なところがあるわよねー!」

母ちゃんが怒って父ちゃんの首をぎりぎりと締める。

「ストップ母ちゃ！父ちゃんが死ぬ！死んじゃう!」

慌ててねえちゃんが止めに入る。

「うち、どうなっちゃうんだろっ」

ひひーん!

と馬の鳴き声が狭い家の隙間から聞こえる。

大きくて立派な黒毛の馬が、控えめながらも豪華で立派な馬車をひいている。

その周りに馬車を守るように4人の面の怖いおっさんたちもいる。

悲しいかな、このお家小さくてぼろいから窓を見なくても壁の木の隙間からちらちら見えるんだよね。

冬までにあそこの壁に木の板足さなくっちゃ。

「わあ。兵隊だー!軍隊だー!」

隣のうちの子どもが騒いでる。

「かっこいいー。サインしてもらおうぜー」

田舎の子って怖いものなしだね!

親が出てきて子供の頭をはたいて家へと早足で戻っていった。

どんどんどん!

ちよつと不機嫌気味のノックが家に振動を起こす。

おお、天井がみしみしいってるよ。ぱらぱらと砂ほこりが落ちてきているよ。

そして母ちゃんキレる。

「ちよつと、そんなに強く叩かないで！この間直したばかりなのに壊れるでしょ！」

「声掛けたら開けるわよ！穴開いてて聞こえるんだから！」

ねえちゃんがぷりぷり怒りながら扉をあける。

おお意外。若いイケメン。グレーの瞳が印象的。

「失礼」

イケメンは扉をあけたねえちゃんを見て一礼した。

「ロゼリアお嬢様。お迎えにあがりました」

その言葉にねえちゃんは「けっ」という感じの態度をとった。

「うち、ロゼリアじゃありません、マリーです！ロゼはあっち」

イケメン明らかに「えっ！？」という表情をしてすぐ取り繕った。

「失礼しましたロゼリアお嬢様」

うちの近くに寄ってきて作り笑顔を精一杯活用。

「うん。うち見て「このぶさいくのほukai！」って思ったでしょ？」

黒い帽子を深くかぶり直してにつこり微笑んだ。

「まさか」

ほお〜う。どうだか。

「お迎えにあがられたって、うち行かないから！」

「なぜ？」

男は心底不思議そうに尋ねた。

「田舎で育ったもん。田舎で死にたい」

たとえ、家が数えるくらいしかなくても！

村人が30人しかいなくても！

娯楽場も公園すらもなく、山と畑ぐらいしかなくても！

田舎で幸せに育ったんだもん！

当り前に首都とか都会とか興味あるけど、行かないもん！

「昔は王宮で育ったではありませんか」

「え？王宮？！うち、お姫様だったの？すごくない？」

「はい、世が世ならお姫様でした」

じゃあお姫様じゃないじゃん。なんだか一気にテンション下がっちゃったよー。

「とりあえず、うちは行かないから!」

強めに言って、後ろをふりかえる。

って、ちよつとちよつと。

家族の皆さん後ろの方でパーティのお菓子食べるのやめてもらえますか？

「仕方ないですね」

イケメンさんは少しも困ってないような顔で右手を挙げた。

ただただっ

ジャギンっ

馬に乗ってた面の怖いおっさんが家の中に入ってきて家族に武器を構える。

……こんな時に言うのもアレだけど、せまい!!

剣の柄が壁引っ掻いてる! 傷がつく! っていうか、壊れる!

「どうなってもいいんですか?」

「困る!!」

姉ちゃんが一番に叫ぶ。

父ちゃんも母ちゃんもおびえている。

多分、家が壊れてしまわないかどうかに。

うちも同じ心境。

壁が、天井が、みしみしと音をたてている。やばい、やばいよこりやあ。

「わかった、いくから! だから出て行って!」

家が壊れちゃうー!

「良いお返事です」

イケメンさんはっこり微笑んでもう一度合図すると入ってきた4

人が出ていった。

振動でまた家がみしみしいつてるー。

埃が落ちてきてるー。なんて迷惑な人たちなんだ。

「それではお世話になった方々に最後の言葉をどうぞ？」

腕を掴まれ家族の方を向かされる。

さっそく連れて行かれるのかよー。と思いつつも父ちゃんたちを見る。

「これから恩返しっていう時に居なくなっでごめんね。父ちゃん、ウエルゼンってところからお金いっぱいってね」

「ウエルセントよ。ばか」

姉ちゃんが控えめに突っ込んだ。

「寂しいのでしたら身分があれですがマリーさんを侍女として召し抱えてはいかがです？」

しよぼーんってしていたうちを見かねてか、イケメンさんがうちの肩をたたきながらそういった。

「あ、パス。うち、人の下に居る女じゃないのよね。この容姿ならこの村のひと誰でもオーケーだし」

ねえちゃんはイケメンさんが言い終わるや否やすぐさま否定。

「ねえちゃん……」

確かにそうだけどさー…。わかるけどさー。

「では参りましょうか」

腕をひかれ、いやいや馬車に乗せられる。

本当は若干乗れることに対して嬉しかったけど。

「父ちゃん母ちゃんねえちゃん！さよなら、今までありがとう！」
馬車が思ったよりもふかふかで気持ちいいのは秘密。

手をぶんぶん千切れそうになるくらい振った。

家族のみんなも見えなくなるまで手を振り返してくれた。

がたんがたと馬車の中。

揺れる自分の体と、流れていく窓の外の景色。

村の田圃と緑溢れる景色も見おさめかー。

本当にそれしかないところだったけども、やっぱり育ったところから離れるのは寂しい。

窓に張りつかんばかりにくつついていたけれど、一応一通り満足して座り込む。

足をブラブラしても正面に座るイケメンさんには当たらない。

うちの足が短いのか、馬車の中が広いのか。

「イケメンさん」

「光栄です」

ほめたわけじゃなかったんだけどなあ。

名前がわからなかったからだけど、まあいいやそのまま聞く。

「今からどこに行くの？ウエルセントさんち？」

「今から向かうのは首都センラウですよ」

「ふーん」

少しの間外を見つめる。

あ、友達の家だ。うちの家よりは少しだけ壁がきちんとできてる。

「ずっとこれで行くの？トイレとかどうしたらいいの？」

「ちゃんと途中で休憩しますよ。レディがそんなこと軽々しく口にしてはいけません」

「ふーん」

レディがそういうこと言っちゃいけないの？そういうことってトイレのこと？

じゃあレディはトイレの時なんて言えばいいのかな。

正直にちよつと出してくれます、とかかな？

また外を見つめる。

あ、友達にお別れしてない。

「そつえば首都のどこに行くの？ウエルセントさんち？」

「貴方は聞いていないようで聞いているんですね、すこし驚きまし

たよ。どこへ着くのかは着けばわかります」

「ふーん」

それってどういう意味？

ウエルセントさんち？って二回も聞いたのに二回も流された。

また、外を眺める。

結構この馬車早いなあ。

くうーっとなげにおなかの虫が鳴いた。

「おなかすいたなあ」

「馬車ですから何もありませんが、次の街にいたら何か買いますから」

「ふーん」

あ、この馬車足もともふかふかだ。

このイスの座り心地もうちの家のワラベットの5倍は気持ちいいわら、布つき破ったら痛いんだよね。

「うわっ」

がたんつと大きく揺れて道が野道から整備された道に変わる。

「若干舌かんだかも」

べろを出してほらほらと見せるとイケメンさんはチョップしてきた。

「ふむっ！！」

かんだ、噛んだよ？余計に舌かんだよ？

べろ出している人の頭をチョップする？

「不安じゃないのですか？知らないところに行くのに？」

「ん？不安だけど、不安がつてもしょうがないかなって」

「なるほど、バカなんですね」

「ヒド！それに何気に話すり替えたよね？」

チョップしたこと謝ってくれないの？

舌がじんじん痛む。

「すみません……お詫びに本当はどこに行くのか教えてあげましょ
う」

「？」

帽子を脱いでぐいつと手を引かれる。

「…おれの館だよ」

近距離で猫のような笑みをたたえて囁く。

「イケメンさんって……」

うちはイケメンさんの眼をじつと見つめた。

「ロリコン？」

うち、まだ12なんだけど。

「イケメンさんっていくつ？ねえねえ。いくつ？」

「くっ…そんなに攻めるように聞いてくん。16だよ！」

腕をぐいぐい引つ張るように問うてみると一応答えてくれた。

「意外と若いねー。金目的の誘拐？ロリコンゆえの拉致監禁？どっちー??」

「馬鹿のくせにそういうことばかり知ってるな！」

田舎って偏った知識しかないんだもん。

「それに。どうして口調変わったのー？格好いいと思ってるのー？」

イケメンさんのこめかみに青筋がぴつきいとでる。

「お前いい加減にしないと侮辱罪で痛い目見せるぞ」

「ふーん」

「ちよつとまで！どう解釈してからのふーんなんだ！ー！」

イケメンさんの帽子を奪ってちよとかぶってみる。

うーん。ぶかぶかだあ。

あ。いいにおいもする。

「で、そういえばイケメンさんのお名前ってなに？」

「……シュバルツ」

帽子を奪いとられる。

あー。気に入ってたのに。

「シュバルツ・リンヴェル」

分かったか、といわんばかりにシュバルツさんがふんぞり返った。

「ふーん」

「ってまたそれか！」

どうかで聞いたことのある名前だね！

01 ロゼリアの始まり（後書き）

ロ「ロゼリアです。がんばります」
何を？

ロ「今のところトイレをがまんする」
うん。それは大事。

頑張って恋愛させますのでゆったりとお待ちいただけると幸いです。

02 ロゼリアと奴隷（前書き）

まったり読んで楽しんでね

02 ロゼリアと奴隷

2つほど小さな（うちにとっては大きいけど）町をすぎ。船着場にきたよ。

小さな船から豪華な船まで水の上をぶかぶか浮いてる。春の明るい光に反射してキラキラしてとてもきれいだ。

「ねーシュバルツくん」

「様をつける」

「ねえーシュバルツくんさま」

「……」

あちこちから汽笛の甲高い音や人の雑音が聞こえてくる。

「船に乗るの？」

「乗る」

「ふーん」

大きな船に乗るのも初めてだ。

初めてづくしな旅だなあ。

船からいろんな人が乗り降りしたり、荷物を運んだり忙しそうだ。

「じゃあこれって海？小さいね」

船の隙間から見える水。噂では先が見えないくらい大きいって言うてたのにな。

「馬鹿か。川に決まってるだろ」

決まってるんだ？じゃあ海はどこにあるんだろう。

「ふーん」

いつものように返事したら今までまっすぐ歩いてたのに急に振り返った。

あ、不機嫌。

「そのふーんっていうのやめろ」

「なんで？…おっとと」

人ゴミに巻き込まれてはぐれそうになったので、お付きの人の服を

にぎる。

「俺がム力つくから」

うちの手を取ってシュバルツの服を掴まされる。

何これこだわり？

「なんだそんな理由か？ならやだ」

「やだじゃねえよ」

人と人の隙間でほとんど見えないけど、隙間から人も見える。

ん？言葉が変？

とりあえずいろんな人がいる。

綺麗な服を着ている人、うちみたいな服を着ている人。

もつとひどい恰好の人……。

ふと、端の方でテントを張っているところが目についた。

「ねえ。バルくん」

「なんだそのふざけた呼び方は」

「あの子うちよりも貧乏なのかな？」

テントの下に居る、うちが着ているものよりもぼろい服を着ている子。

真っ白の肌。真っ黒の瞳と髪の綺麗な顔のこ。

腕が鎖でつながれてて、とても痛そう。

「奴隷だろ」

「ドレイ？どれ？」

ドレイってなんだろう？でも嫌な感じ。

「召使よりも下のもんだよ、家畜と一緒に」

家畜かー。人間なのに家畜なのかー？

うちにも牛が一頭いた、先月売っちゃったけど。いっぱいお乳だして、いい子だったのになあ。

「……奴隷って家畜なの？ならお乳出す？」

「出さねえよ、いや、女なら出すか？」

「シュバルツ様、下品ですよ」

「ぶ。ぶ。ぶ」

お付きの人に怒られてやんの。

もう一人のお付きの人が出てきてバルくん近づくと。

「船が少し遅れているそうです、近くの店で待ちましょう」

「ああ、分かった」

その間ずっとあの子のことを見つめてた。

綺麗な子だ。

自然と視線があの子へ向かう。

結構近い距離なのに人が多くてあんまり声は聞こえない。

けれど、あの子が怒られているのはわかった。

「ねーあの子」

「ちよつと待つてろ」

話しかけたのに頭上で会話してて相手してくれない。

あの子に怒鳴っていたおっちゃんの手を高く振り上げた。

「わ！それはだめ！」

うちは走って人ゴミを避けて怒鳴っているおっちゃんのところへ走った。

でも、人が多くてうまいこと行かなくて間に合わなくて。

あの子の頬におっちゃんの手が当たった。

「あああゝ」

痛そう。

うちの足がもう少し早ければー。

若干、坂道だったから勢いそのままおっちゃんのとこまで走った。

二回目のパンチあったら可哀想だもん。

よし、坂道利用して加速だ！

ただただ！

うまい具合に人通りが空く。ナイスです！

おっちゃんの目の前にまで来た。

「……あー！」

だけどピンチ！とまらない！とまらないよー！！

「わーやばば」

「ん？げっ！！」

「ごめんなさあーい！！」
「ばあいん！！」

「ぶあっ！」

ごろごろ。

ぶつかっただのはうちのなに転んだのはうちだけ。
どういうこと？

しかも顔直撃、ちよつと汗臭かったんだけど…おえー。

「このくそ餓鬼！」

「どうした？」

デブでどなり散らすおっちゃんとは別の頭悪そうなおっちゃんも出てきた。

デブと出っ歯だ！

「この汚い身なり、こいつも商品か？」

デブのおっちゃんがうちを見ながらそういった。

うち、そんなに汚いかなー。

ちよつと女の子的にシヨックだよ。

「逃げてきた商品か？」

なんか、おっちゃんたち言ってるけど、うちは気にしないでボロボロのこに近づく。

「ほっぺ大丈夫？ ごめんね、本当は助けたかったんだけど、人が多くて間に合わなかった」

頬をさすってあげる。

痛いところはさすつたら治るって母ちゃんが言ってた。

一番いいのは冷やすことだけど氷は高いからさすつとけて。

「……あんた、だれ？」

うつむいていた視線をまっすぐうちに向ける。

吸い込まれそうなほど、深い真っ黒の瞳。

やっぱりきれいな子だ。

「うちは口ゼリア。あんたは？」

その子は微かに笑った。

「名前…あんたが決めてよ」

「ロゼリア！こんの馬鹿女！勝手に居なくなるんじゃない！」

バルくんが走ってこちらにきてうちの腕を掴んで持ち上げる。

「おお、力持ち。ていうか腕痛いよ、バルくん」

「バルくんとよぶな！」

でも一応聞き届けてくれたのか降ろしてくれる。

持ち上げられるのはちよつと楽しかった。

「これはこれは貴方様でしたか。もしよろしければ、この奴隷な
どうです？綺麗な顔をしていますでしょ？」

おっちゃんがバルくんを見ていきなりへこへこしてる。

バルくん明らかに不機嫌そう。

「いらん」

明らかに不機嫌そうな声色で一刀両断！

「ねえねえバルくん、うちドレイだったの？」

「違う！さんざん馬車の中で説明しただろ！」

「ふーん」

「全部その返事^{ふーん}だったろうが！」

ドレイじゃないと聞いておっちゃん達が少し焦り出す。

バルくんが怒ってるからよけいに。

「そうとは知らず申し訳ありませんでした！」

みるみるうちに脂汗がぶあーって出てる。うわあ。

「かまわん」

バルくんはさつさと踵^{きびす}を返し船のほうに帰ろうとしたから靴^{かかと}の踵^{きびす}を
ふんで止めた。

「……こけるわっ！」

「バルくん、お願いがあるのお」

また怒鳴ってきそうだったから無視して続ける。

できるだけ、かわいいこぶりっこする。

ねえちゃん直伝。

「この子も連れて行ってあげてー」

鎖に繋がれた綺麗なおこ。

ドレイがなんだか知らないけどこのおっちゃんたちに叩かれるよりはうちのほうがましだと思う。

「シユバルツ様、船が到着しました」

お付きの人がやってきてバルくんを急かす。

「……っち。わかった」

バルくんは太っちょにお金を適当に払って綺麗なお鎖をはずしてくれた。

「よかったね、鎖の痕いたくない？」

「大丈夫」

「至急もう一人分のチケットを手配してくれ……はあ」

バルくんは頭を痛そうにしてからまたうちの手を引いて自分の服を掴ませた。

だから、うちも真似して綺麗なお手を手をうちの服に掴ませてあげた。

「ほら、これで迷子にならないよ」

「迷子にはならなくても急に行方不明になるけどな」

バルくんがなんかいつてるけど気にしなない。

「やっと、乗れるな」

船の入口近くにやってきてバルくんが疲れたようにうなだれた。

チケットを回収するまで少し待つんだって。

「あ」

うちの近くに、また同じようなこが目に入った。

うちと同じくらいの年のこかな？鎖がまた、首につながっている。

バルくんの視界にも入ったのか、うちの視線を隠そうとした。

ので、するつとよけて懇願モード！

「お願い」

来るとわかっていたのか、バルくんは怒鳴った。

「いい加減にしろ！奴隷だって高いんだ。そんなに使うと城までに金が尽きるわ！」

「あの子で最後にするからー!!」

じたばたと地団太踏んでみる。

「だめ」

「お願いっ!」

たまたま近くを通った知らないおじいさんにひつついた。

この人を巻き添えにして動かないぞ。という意味を伝えてみる。

「ここの全部の奴隷買うつもりか!」

「最後!最後にする!あの子がいい!!」

肌の所々が赤黒く汚れている。

きつと痛いことばかりされたんだ。

「この人の耳元でわめき続けた挙句、この人も巻き込んで船に乗らなくてもいいの?!」

「お前はともかく見知らぬ人を巻き込むのは止める!」

おじいさんは特に困った様子もなく孫にねだられた人のように、結構嬉しそうな顔をしている。

だけれど、うちがぎゃーぎゃーわめくものだから周りの人もなんと興味を持ち始めた。

「買ってやる、買ってやるから!」

「よし、勝った」

おじいさんから離れて謝罪してからガッツポーズ!

「そこはわーいって喜べよ」

周りの人が興味が失せたように再び歩き始めるのを確認して、バルくんは何度目かのため息をついた。

それからもう一人のお付きの人にチケット追加を告げた。

おねだりしまくった、もう一人のぼろぼろの女の子は、茶髪にクリクリの目が大きい可愛い子。

「うち、ロゼリア。よろしくね!」

「え…あの」

どちらが主か戸惑っているらしい。

鎖を除けてあげるととりあえず微笑んだ。

「ありがとうございます」

うん。女の子は笑顔のほうが可愛いよね。

その子の手を取ってうちの服を握らせる。

これで、迷子にならない！

数分後、お付きの人が頑張って手に入れたチケットのお陰でようやく船に乗った。

「俺は一生おまえを奴隷市に連れて行かないと心に誓った」

「ふーん」

「それをやめると言っている」

ちよつと高めの階段をカンカンならしながら上がる。

近くから見なくてもこの船は大きい。うちの村の家を全部合体したものよりもでかいかも。

真つ白で、窓もいっぱいいついてる。わぁ！ベランダ付きだ！

「船ってスゲー！」

「もう少し言葉づかいを何とかできんのか」

階段を登り切り、走り回ろうとしたら首根っこを掴まれたのでしづ大人しくする。

「地面が赤い！血の海だ！」

「カーペットだ。あほ」

ホントだ！ふかふかだ！！

ちよつと楽しんでいるとバルくんをチョップされた。

「こつちだ。来い」

「へーい」

廊下はせまいけど、部屋は広がった。

ソファにテーブル、ティーセットもあるし、寝室と居間が分かれている。

「すごーい！このベットうちの5倍はあるよ！？」

「そうか、よかったな」

なにその冷たい反応。またお付きのひとと会話始めたからつまんない。

「二人ともおいでよー！」

この感動を一緒に楽しもうと二人を呼ぶ。
ふかふか

二人は戸惑ってからのろのろと近寄ってきた。

「そう言えば、名前なんだっけ？」

「主は貴方と聞きました。貴方が決めてください」

「えー？んー」

うち、子供作ったことないから名前なんてわからないよ。

イメージでいいや。

「綺麗だから、マリア。可愛いから、キャラメル！」

……マリアが複雑そうな顔したけど、考えるの面倒だから良いや！

「ロゼリア」

バルくんが私を掴んで個室の中に放り投げた、残りの二人もあとからぽいっと。

「ドレスを近くに置く。着させてもらえ。あと、奴隷の服もないからお前の貸してやれ」

「貸すって、うちドレスなんて持ってないよー」

「町で買っておいた。大したもんじゃないから奴隷に貸しても構わないから」

ちゃんと体洗えよ、と最後につけたしてバルくんの影がなくなった。

「じゃあ、洗いましょうか」

「うん！」

ぱっぱっぱと脱いで服をその辺に投げ飛ばす。

「床も壁もつるつる」

「タイルですよ」

キャラメルが白い棒を手にとってお湯を出す。

「おおお！すげえ」

「シャワーはなかったのですか？」

「ないよ。川で洗ってた」

「冬は？」

「川で水汲んできて温めて使ってた」

冬は本当に辛かったなー。

生きるか死ぬかだったもんな。

そのあとキャラメルと一緒に洗いつこして体を綺麗にした。

「マリアは？」

「…後ほどお借りします」

「ふーん」

キャラメルに頭を拭いてもらってドレスを着せてもらう。

「キャラメル、傷は痛くない？」

「はい、ほとんど昔の傷でしたので」

肌の隙間からのぞく傷がなんか可哀想。

「はい、できましたよ」

うちはピンクのリボンのドレス。

キャラメルは水色のバルーンドレス。

「お姫様みたい！」

「いえ…そんな」

お風呂から上がったばかりだから頬も色づいてて可愛い！

ふかふかのソファにダイブ気味に座り込むと、ドレス姿のマリアも

出てきた。

碧色のすその長いドレスだ。

「うわぁ綺麗！…なんで複雑そうな顔してるの？」

マリアがちよっと考えてから呟くように言った。

「……一応男ですから」

「えええ！？本当ですか？」

キャラメルが驚いたように声を上げた。

「ふーん」

うちも一応驚きを示してみた。

ん？一番似合っていないの謙遜なしでうちじゃないの？

「って反応薄いですよ」

逆にマリアとキャラメルが驚いた顔でうちに突っ込んだ。

「だってー」

男でもマリアだし。

あ。

「マリアってつけてごめんね、変えるつもりないけど」
「ないんですか」

だって、うち名前つけるの苦手だもん。

イメージでつけたから今のぴったりだし。

《ぼおおおおお》

「！おお、びっくりしたー」

大きな音が響いて船がゆつくりと動き始めた。

移動して丸い内窓から外を眺めると、遠くの方に陸が見える。

「この川大きいね」

「大陸ー大きな川ですからね」

「ふーん」

うちの村ってそんなに遠かったんだな。

ちよっとしみじみと思っちゃった。

02 ロゼリアと奴隷（後書き）

まあ、なんとなく予想がつく流れでしたでしょうが。

それでも仕込んだネタで「ふふ」って笑ってくれば（仮）の勝ちです。

いや、勝ち負けじゃないんですけどね（V）（o¥o）（V）

03 ロゼリアは思う（前書き）

まだ船です。

でかい河なんですよ。

タイトル変わりましたが、なんらないように問題はございません。

コロコロ変えてすいません、やっとじっくりきたんでもう変えません（多分）

03 ロゼリアは思う

船って、意外と揺れないんだね。高級船だからかな。

小さな窓からのぞく景色は、水の色と陸の緑のコントラスト。

おお、コントラストって言葉知ってるうちってなんか賢い。

「着替えたか」

後ろを振り向くと真っ黒だった服から少し青みがかった服に着替えたバルくん。

なんだか、おっしゃれー

「どこ行ってたの？」

結構同じ風景ばかりで飽き飽きしてたからバルくんのもとへと近寄る。

「ちょっとな。それにしてもお前、服に着らされているというか」

「似合わない？」

こういうの初めて着るからよくわからないけど、キャラメルやマリアに比べたら全然可愛くないのは自分でもわかってる。

でも、バルくんに言われるとちょっとつらいかも。

また改めてバル君はうちの姿を見直す。

「んー。似合わないというか、着なれてない感じが出てる。ま、実際に着なれてないんだ。あとは慣れだ慣れ」

少し笑ってうちの頭をぐりぐりと強めに撫でる。

「可愛いぞ」

「……ふーん。やっぱりロリコン？」

「やっぱり可愛くない！」

本当はね。ちょっとうれしかったけど、恥ずかしかったからいつもの返事で誤魔化しておく。

バルくんって、たらしかロリコンで間違いないよね。

キャラメルがお茶を淹れてくれたので、バルくんと一緒にソファに座る。

「どうぞ」

「ありがとう、キャラメル」

受け取ったティーカップはなんか、高価そう。

ぱちって持って帰ったら、やっぱり泥棒さんだよな？

「そういえば、おつきの人たちは？」

「ダズか？あいつは隣の部屋で待機してる」

「ふーん」

ダズって誰だろう。

ちなみに、お付きの人は船に同乗したのは二人だけ。

後の人は馬車をなんたらかんたらとにかく、バルくんが護衛はいらないってお付きの人を二人だけ残してあとは返しちゃったんだって。

「ねえねえ」

お菓子がないのを少し残念に思いつつお茶に息を吹きかけてさます。

「うち、何で後宮に行くの？」

「今更！？」

さすがにお茶は吹き出さなかったけれど、思ったよりも驚かれちゃった。

そういえば、知らなかったなーって今さっき思ってたもん。

「ていうかさ、後宮って何？高級の塊？」

「なんじゃそりゃ……まあ、いうなれば後宮っていうのは俺の家だ」

「ふーん」

そっぴや俺の家に行く宣言してたしね。

ぶっちゃけよく分らないけど、ついたら分かるし、別に今ここで詳しく聞かなくていいか。

「いや、お前わかってないだろう」

いい加減慣れてわかってきたのか図星をつかれる。

「へへへ」

ごまかしついでに御向かいに座るバルくんのお茶に四角い砂糖を一つ余分に投入。

「あ、こら。いらねえよ」

自分のやつにも二つ投入。

……一口飲んで少し後悔。甘過ぎたかも。

でももったいないから飲む。

「いつくらいに着くの？」

「明後日この船はゼンノルズに着く。そこから一日かければもう着くだろうな」

うちの村ってそんなに遠かったのか……。

それにしても、船って意外と退屈。

危ないからベランダ出ちゃダメっていうし外の景色見てもほとんど変わらないから対して面白くないし。

部屋のなかじゃすること限られているし、っていうか、なにもしるなっって言われるし。

バルくんなんか、難しそうな書類出してきて仕事するみたい。

仕事するならお付きの人の部屋ですればいいのに！。

「ねー」

「んー？」

「ひまー」

「んー」

返事もおざなりだし。

つまんない。

「ねえねえ、暴れたりしないから、船の中歩いてまわってもいい？
他の人の部屋に入ったりもしないから」

許可してくれるように、バルくんが見ていた書類を奪い取る。

無言で手を差し出すけど、うちはそれを無視する。

「わかった。わかったよ……ただし10分だけな。大人数でいっても他の人に迷惑だから一人だけ連れて行け」

もうパターンが分かったのか、ため息をついて手を出してきたので

笑顔で返してあげる。

「よし。じゃあキャラメルいこ！」

「はい」

近くにキャラメルがいたので、キャラメルの手を取って部屋の外に出る。

細長い通路の所々に扉が生えている。

扉、扉、扉。規則的に扉が設置されている。

たまに風景画とかが飾られているけど、これって上手なのかなあ？
なんとなく目に留まった一枚の絵の前に止まってみる。

「キャラメル、これって上手なの？」

「私はあまり詳しくありませんが、上手いとおもいますよ」

「ふーん」

この絵は風景でも人物でもない。色がぐちゃぐちゃに混ざったみたいな絵。

芸術ってよくわからないや。

適当に歩きまわっていると、デッキに出た。

「うはあ」

風が結構強い。

だからなのかうちら以外人は誰もいない。

ちよつとラッキー。

上を見上げると小さな旗がぱたと風に吹かれている。

アレの意味はなんだろう？可愛いからとか？どうでもいいか。

手すりによつて、下を見る。

本当に大きな川だなあ。

そこ見えないし、深そうだし、何が海と違うんだろう？

海って本当にあるのかな。

みんな海から生まれてきたって誰かが言っていたけれど、それならお母さんのおなかの中に海があるのかなあ。

「おい、あいつとかいいんじゃないか？」

「そうか？でもどうせならあっちのほうが顔がいいぜ？」
ん？

先ほどまでなかった人の気配に振り向くと、ちょっと体格のいい三人組が入口に立っている。

じろじろというか、じとじとというか、あまり友好的じゃない視線をこちらに投げかけてくる。

「ロゼリア様、そこからお動きになりませんよう」

キャラメルが警戒心をむき出しにして守るようにうちの前に立った。それに気がついた男たちは口をにやりと歪める。

「まあ、そう身構えるなっ」

「そうそう、俺達はただの乗客だっ」

一人は入口に居るままあとの二人が近づいてくる。

「……」

キャラメルは答えない。

じりじりと近づいてくるやつらと距離を取ろうと下がってくる。

……うち、どうしたらいい？

あんまり押されると川に落ちそうなんだけど。

「あんたたちは黙って——売られりゃいいだけだっ！！」

急に男は体の大きさの割には俊敏な動きでキャラメルの腕を掴みあげる。

「きゃあ！」

「キャラメル！」

売られるだっ、冗談じゃない。

けど逃げようにもキャラメルが捕まってしまった。

「キャラメルを放せっ！」

「お前は、何か身分が高そうだから、交渉のネタにでもさせてもらおうか」

「うわっ！」

もう一人の男にうちも捕まる。

「まあ、田舎貴族程度だろうが、脅迫すりゃ少しは金が入るだろ」

人を捕まえておいてなんだか不服そうなのがム力つく。

あと、田舎つてところもあてられてム力つく！

「ロゼリア様を放せっ！」

キャラメルは足を延ばして男を蹴ろうと試みるが届かない。

「おお、元気だな。でも少し黙っててもらえるか？」

肌の色が濃い男はキャラメルのお腹を強く殴って気絶させる。

「あっ！」

「キャラメル！」

女の子に手を出すなんてなんて外道。なんて最低なんだ！

しかも大人数で卑怯だぞ！大声では言わないけど！

「あんたは大声出さねえよな？」

うちを掴んでいる男は厭らしい顔でにやにやと笑っている。

このままやられっぱなしのうちだと思ふなよ！

《ぽおおおおお！！》

船の汽笛が鳴る。

男がほんの少し気をそらした隙にうちはその手を噛む。

「つつ！このっ！」

また掴んでこようとした腕を素早く逆に掴んで、そのまま——投げ
る！！

「お、おおお！！」

男の体はうちの体を台にして宙に舞う。

どんっ！！

舞うつていつても落下は無様だけどね。

「……どんなもんだい！」

とか勝利宣言して、キャラメルを掴んでいる男にも襲いかかる。

「キャラメルを放せー！！」

色の黒い男はキャラメルを肩に担ぎあげる。

余裕の様子で楽しそうにうちを見下している。

「おおっと。放せと言われて離す奴がどこに居る？」

「大人しく渡さないと——！！」

「渡さないとどうだってんだ、ガキ」

後ろから影と、いらだちを隠そうともしない声。

「ひゃあ！」

首の後ろの服を掴まれぐいっと持ち上げられる。

しまってる！首しまってるって！

「このくそガキが……！よくもやりやがったな……！！！」

投げ飛ばした男が早くも復活してたらしい。

思っていたよりもだいたいダメージがなかったらしい。

そして、かなり怒ってる。……当たり前だけど。

「同じ痛み味わせてやろうか、ごら！」

どすの利いた声で耳元で叫ばれる。

必死で手を放させようと引つ掻いてもびくともしない。

地面、土じゃないから痛いだろうな。

「おいおい……死なない程度にしろよ」

キヤラメルを掴んでいる男が止めてくれるのかと思っただけ。
ただその忠告

「うぐぐ〜！」

もういいから、そろそろ叩きつけるなら叩きつけてほしい。

息のほうがくるぢい！！しまってるんだってば！

「おいっ！……！」

入口で見張り番をしていた男が叫び、何かをすべて伝える前にそれは途切れた。

ごっという嫌な音と一緒に。

「……！！バル君っ」

男の頭を地面にたたきつけているのは……超不機嫌な顔のバルくん
だ！！

「……何をしている？」

声からして怒りが発散されている。

「っち。見られたか……どうする？」

「構わねえ、やっちまえ！」

いかにもチンピラがいいそうなセリフを吐いて、黒い男がキャラメルを地面に置いてバルくん殴りかかる。

体格差がけっこうある。それでもバル君は逃げない。

「……！バルくんっ！！」

男の拳が、バルくんに襲いかかるうとしてうちは叫ぶ。

その一瞬、バルくんがうちを見て微笑んだ気がした。

体をひねり隙だらけの男の顎へとバルくんの見事な一発がたたき込まれた。

どがつ！

「！！」

完全に体格が自分よりも劣るバルくんに油断していた男は大きく後方へと体制を崩し、倒れる。

すごいっ！すごいよバルくん。

ただのロリコンナルシストじゃなかったんだね！

「てめえ！！」

「うわあっ！」

うちを掴んでいた男もうちを放り投げ、バルくんに向かっていく。

結局投げられた。叩きつけられないだけましかもしれないけど、痛い。

「おおおおあああ！！」

男はがむしゃらで、意味もない掛け声を叫びながら、懷に隠し持っていたナイフを取り出し、振りかざす。

バルくんはどうなったのか、それを考えると心臓の音が一層大きくなって吐き気が催し頭がぐらぐらする。

……でも心配はすぐにくぐもった声で終わりを告げた。

どさ、と体の倒れる音が波の音と一緒に響く。

吐き気とすこしの酸欠でくらくらしてて、その一部始終を見ていた訳じゃないけど、バルくんが勝ったというのは間違いない。

だってうちのほうに駆け寄ってきてくれてるもん。

「ロゼリア！」

心配そうな声色で、ぎゅうつと体を抱き締められる。

「大丈夫か？怪我は？」

先ほどまでのクールさはどこへやら。

熱いバルくんの体温と匂いがうちを包み込む。

「…うん、大丈夫」

……ドキドキしていた心臓が、いやに落ち着いて——なんだか、今度は別のドキドキで落ち着かない。

ふわふわするとうか、頭がぼーっとする。

落ち着けー深呼吸。すーはーすーはー。

「…あ……」

ぼろり。

悲しくないのに、目から涙があふれてきた。

「どこか、痛むのか？」

バルくんが気づいてうちの頭を優しくなでると、優しくされた分だけ余計に涙が溢れた。

うちへの優しさと気遣いだけがひたむきに感じられて。

「ううん、なんでもない……なんでもないよ」

顔がほんのりと熱くなってきた、赤くなってるのを自覚した。

——ああ、うち、今この人に恋をした。

と思う。

……思ってたよりも恋って、結構しょっぱいんだね。

「バルくん……」

「ん？」

ドレスも汚れているけど、気にせず涙をぬぐう。

「…しょっぱい」

「そりや涙の味だ。もしくは汗」

バルくんはいつものように少し小馬鹿にした顔で笑って、うちの頭を強くなでた。

その後、部屋にもどり休息をとった。

「ドレスの首もと、のびちゃった」

「そんな安物くらい、また買ってやるから気にするな」

船が着くまでの間中、バルくんはやさしくうちを撫でてくれた。

……お陰でドキドキが止まらなかった…。

お付きの人がキャラメルを介抱してくれたんだって、それほどの大怪我はないみたいでよかった。

おなかにうつすら痣はできたらしいけど「すぐ直ります」ってキャラメルは笑ってた。

あの賊くずれの3人組は船の警備員さんに捕まってどこかに閉じ込められたらしい。

着いた先の土地で裁くんだったって、ざまあ。

《ぼおおおお》

船の汽笛がまた、大きな音を響かせる。

船の行先はセンノルズ。

うちの行き先は首都にある後宮。

田舎にずっと居たいと思っていただけ。

父ちゃん母ちゃんたちには割るけれど。

バルくんがいるなら、後宮も悪いとこじゃないのかもしれない。

なんて思っちゃう恋の力ってすごいね。

03 ロゼリアは思う（後書き）

ロゼリアの淡い初恋。

つり橋効果か？？

しょっぱいのは涙か汗だby作者

本当は甘酸っぱいはずww

恋したことないから分かんがねww

04 ロゼリアとウェルセント家 前編（前書き）

早くもサブタイトル考えるのに煮詰まっているという……。
難しいね

04 ロゼリアとウェルセント家 前編

いろいろなアクシデントがありながらも、船内で一泊し、その後も河を登り続けること約半日。
やっとセンノルズに到着！

「ふおおおおお！！」

船の階段を下りて、目の前の光景にもう一度目を見張る。

大きな商業の街！センノルズ！

真っ白い綺麗な建物が、所狭しと並び、「ようこそ、いらっしやい」と綺麗な店がうちこそ一番と胸を張って主張している。

あの船着き場にいた人よりも倍の人数の人が道を行き来しているのに狭くない。

ここにいる人の数だけでも、うちの村人の何倍もの人がいる。

「すごいすごい！」

地面も綺麗に整備されているし、車もたくさん通っている。

電灯が数本建っていて、もう夕暮れだというのに、薄暗さを感じないくらい明るい。

「なんていうことでしょう！！」

街から楽しそうな音楽すら聞こえてくる。

この感動をこめてもう一度叫ぶとバルくんがいい加減頭を叩かれた。

「超田舎娘だからそれくらいの反応仕方ない、と、しばらくは黙って見ていたが」

ついでに口もふさがれる。

「うるさすぎだ！恥ずかしい！」

私に言わせたら、今のバルくんの声のほうがうるさいよ。

そういいたかったけどどうせ口動かせないし黙って頷く。

「シユバルツ様、車のご用意が整いました」

「ああ、わかった」

村に来ていた馬車よりももっと大きくて立派な車が目の前にとまる。赤に銀の装飾がされた、高そうだけど派手な車だ。

派手だけど、悪趣味というほどでもないのはやっぱりお金をかけている証拠か。

「これに乗るの？」

「なんだその嫌そうな声は」

嫌だよ、派手だし。」

肯定の言葉は口にできなかったけれど、明らかに顔に出ていのだろう。
「乗れよ」

とバル君につつかれた。

ふと、目が合ったとたんに白くて高慢そうな馬が「ふんっ」と鼻を鳴らした。

「嫌だよ、この馬うざそうだし」

「いいから乗れ」

首根っこを掴まれ車の中に引き込まれる。

首もとつかんで運ぶのは猫の子だけですよー。

とはいえ、いつまでも意地を張るわけにもいかなないので結局は乗る。おお、村で乗ったのに負けず劣らず気持ちいいな。

「お嬢様、服が崩れております」

そういつて、マリアがバルくんにつ張られたせいでほどけたリボンをくくり直してくれた。

「ありがとう」

それにしても、窓の外をみたいのにバルくんのせいで右キヤラメル左マリアで挟まれたからよく見えない。うちが外をみて叫ぶのを考慮して先手を打ったみたい。

つまんなーい。

仕返ししてやろうと目の前に座るバルくんの足を蹴る……つもりだったけれど、ちょっと届かなくて空を蹴った。

……まあいいか。

「もうそろそろ後宮？」

「それなんだが、このまま城に戻ってもいいが夜遅くに着くことになる。だからこのままいくか、泊まるか考えている」

「ふーん」

この辺のホテルなら、かなり広くてきれいなところあることだろう。料理もおいしんだろうな、楽しみ。

「でだ」

ん？ちよつと違うのかバルくんは言葉をつづけた。

「お前はどっちがいい？城に行くのと、ウエルセント家に行くのと興味深そうにうちの顔を見ている。」

ウエルセント家って…。

「…ウエルセントってだれ？」

「いい加減覚えろ！お前の家族だ！」

お……おお！そうだそうだ、そうでした。

「じゃあそこで」

「随分適当に決めましたね」

となりでマリアがちよつと苦笑いしてる。

だってー。どうせどちらを選んでも初めて訪れるところなんだし、なんだったらうちの本当の家族？に逢つてみたい。

「まあいい、そうしよう。約束をしていなくて不躰だが……なんとかなるだろう」

窓から少しお付きの人に声をかけ、行き先を変更する。

「ウエルセント公爵邸はセンノルズの隣町、アルフィにある」

「ふーん」

名前聞かされてもこの辺の地理まったくわからないから分らないよ。

隣って言われても右とか左とかあるしね。

「そんなことよりもおなかすいた」

昼ごはんが、やけに細々としたものが少しずつ出てきて食べた気がしなかったし。

「我慢しろ」

どこかに寄ってくれるのかと思ったのに、全然違う言葉が出てきた。
「えー！キャラメル、何か持っていないの？キャラメルとか」

キャラメルの、その名の元となった髪の毛を見て涎が出る。

「すみません」

若干うちの眼を隠しながら謝られても。

ちえ、お金持ちなんだからバルくんもキャラメルやチョコの一つくらい持つてよね。

育ち盛りのうちのおなが切なそうにないているよー。

……まあ、キャラメルもチョコもうちの村じゃ1年に一個食べれたらしい方だったけど。

「もうすぐつくから、奴隷にねだるな」

「ドレイって言わないで、キャラメルって言うの。こっちはマリアだよ」

もう一度足をあげると、今度は足を組んでいたバルくんの右足に命中。

「……分かった分かったから大人しくしてくれ」

たいしていたくなかったみたいでうちを持ち上げて膝の上にのせられる。

もうそんなに小さな子じゃないんだけどな……。

でも、まあ、いいか。

「ウェルセント家ではなるべく黙っているよ？聞かれたことにだけ答えるんだ、いいな」

「えー」

「そしたら何でも買つてやるから」

「仕方ないなー」

そのまま少し車に揺られていると「着きました」とお付きの人の声がする。

全然景色見えなかった。

「着いたか」

マリアが素早く下りて扉を開いておいてくれる。

「ありがと」

バルクンの膝から降りて、外に出る。

あたりはすっかり夜になっていたけど、街灯などの光でなんとか物が見える。

後ろを振り向くと、随分先に門が見える。

ん？ということは、庭付きのお家なんだ？すっげー。

見上げるその建物は、白亜の豪邸。

二階建てで玄関でかい。

庭も凝っているみたいだけど、暗くてよく見えない。

「おいで、ロゼリア」

不自然に優しい声色。

猫を被ったバルクんがうちの手を優しくひいてくれる。

「ucci、まずったな。もっと上物のドレスを街で買って着させておくべきだった」

途中気がついたのか、後悔したように小さく呟く。

「……仕方ないか」

少しの間、扉の前で考えてから、ノックをした。

「はい。どちらさまで？」

少し警戒気味なおばさんの声がすぐに返ってきた。その声にバル君は猫を被った声であいさつをする。

「こんな時間に急な訪問すいません。私です」

バルくんが微笑むと、ちよっと運動不足そうなおばさんが驚いたように目を見開いた。

「まあ、坊ちゃま。こんな時間に」

坊ちゃまといわれ、少し苦笑いをもらすバルくん、猫はかぶってるけど、随分親しい相手みたい。

「さあさ、中へどうぞ。今旦那さまをお呼びしてきますね」

「悪いな、サマンサ」

おばさんがせかせかと忙しそうに中に入っていくのをみてバルくん

が続いてはいる。

「ねえ、今のおばちゃんがお母さん？」

バルくんの服の裾を引っ張って尋ねてみるとバル君は首をふった。

「アレはこの家のメイドだよ。公爵夫人はもつと美しい淑女だ」

「ふーん」

中は外の外観に負けず美しいものだった。

モノはあまり置かない主義なのか、別の所に置いているのか、とりあえずホールは綺麗にかたづけられている。

「お坊ちゃま、いらっしやいませ」

恭しく頭を下げたまま、こんどはあのおばさんと同じ服装の若い女性が出てきた。

落ち着いた雰囲気のお姉さんだ。

「久しぶりだね、リナ」

「はい、お久しぶりでございますお坊ちゃま。お元気そうでなによりでございます」

「ありがとう、いつものところで待ってればいいかな？」

「はい、もちろんでございます。そちらの方に何か飲み物でも？」

そちらの方、というのはうちのことみたいで、飲み物も欲しいが、お菓子も欲しいとバルくんに目で訴えてみた。

「ああ、彼女にはジュースと何か軽いお菓子でも出してもらえるかい？」

「はい。かしこまりました、少々お待ちください」

気持ちよく返事をする、メイドさんは早速行動に出た。

メイドさんがいなくなり、バルくんが勝手知ったる顔で迷わず一つの部屋に行き、入室。

この屋敷にだいぶん慣れているのだろうか。

ここもまた、多くのものがなくソファとテーブル、窓に観葉植物がある。

壁に絵がかけられているのも、ひとつだけ。

モノがないという訳ではなく、多くの物を置かないのがこだわりの

ようだ。

「ねえ、みんなうちのこと聞いてこないね」

ソファに座る。おお、なんだかあんまり跳ねないぞ。

「よくできたメイドなんだ。それに、淑女^{レディ}はむやみに人を詮索してはいけない」

「ふーん」

「……ウエルセント卿の前でその口癖は慎めよ？」

あ、一瞬だけ素にもどった。

「わかったよー」

——コンコン。

「どうぞ」

扉がノックされ、外から初老のおじさんと、まだ若い金髪のお兄さんが出てくる。

どちらもうれしそうにバルくんへと近づく。

「これはこれは殿下、いや、もう陛下ですね」

「止めてください、ウエルセント卿。前のようにシュバルツで構いません」

バルくんは席を立ち、ウエルセント卿と軽いハグと挨拶を交わす。

「こんな時間にすいません」

「いや、何気にはしませんよ」

「そうそう、お前は兄妹みたいなものじゃないか」

お兄さんの方が軽く笑ってウエルセント卿ダブルも同じようにソファに座り、バルくんも座った。

あ、今更だけど、うちも立てるべきだったかな？

後から入ってきたあの若いメイドさんが皆の分のお茶とうちの分のお菓子を用意してくれた。

お菓子は花の形をまねたもので、かわいい。

紅茶もいいにおいしそう。

「二人とも本当にお久しぶりですね」

「そうだな、もう1年以上にはなりますかな？」

そのまま身の上話になりそうなのを若いお兄さんが切り出す。

「それで？もちろん多忙の身のお前のことだ、ただ会いに来ただけではあるまい？それに、その幼女の説明も聞きたい。新しい趣味にでも目覚めたか？」

「エドリック。口が過ぎるぞ」

とがめられてたのに気にもせず、にやにやと面白いことを見つけた、みたいな顔でバルくんを見つめている。

若い人はエドリックと言うらしい。

レディじゃなかったらあれこれ詮索してもいいのかなあ？

それにしてもよくしゃべる人だな。

「ええ、この子のことで今回はこんな時間ですが寄らせていただいたのです」

バル君がまじめな顔で言う。

「……まさか、その子が？」

ウエルセント卿は何かに気がついたかのように眉毛をあげた。

……ねえ、目の前のお菓子とかお茶とか手付たらまだ駄目？

バルくんのほうに視線を向けたけど、バルくんはまっすぐ相手を見ている。

あう、お菓子、食べちゃだめですか？

「ええ、そのまさかです。彼女こそ、このウエルセント家の口ゼリア嬢です」

「似ているとは思ったが！この子が！」

エドリックさんが一気に目を輝かせて席を立ち、うちのほうに来て脇の下に手をいれ、一気に持ち上げた。

「ふあっ！」

「ははあ、たしかに目や髪の色は我がウエルセントの血が色濃く出てるな、まったく同じだ！」

あんまりにも急に抱きあげられるから驚いた。

なるほど、エドリックさんの言うとおり、髪の色や目の色はうちと全く同じ。

同じ金色の髪に、同じ碧色の瞳。

じゃあ、この人が本当のお兄ちゃんなんだろうか。

ねえちゃんはいたけど兄ちゃんはいなかったからなんだか新鮮だ。

「でも、なぜ殿下が娘を？^{ロゼリア}彼女の連絡先は妻が自分のもとに、と書き記していたと思ったのですか？」

「ええ、夫人に連絡があつたと報告をつけ、ぜひ自分に迎えに行つてほしいとお願いされまして」

へえ、それはうちも初耳だ。

「妻が？」

父親だと思われる人も寝耳に水なのか、少し首をひねっている。

ちよ、こら。

「すべすべだ」

お兄さんがうちのほっぺに頬ずりしてくる。

「まあ、あれもサプライズが大好きなはずら者。そのようなお願いをしても不思議じゃありませんが、私にまで黙っておくとは人が悪い。それに恐れ多くも陛下にそのような我儘を申すとは」

苦虫をかみつぶしたような顔だ。

「いえ、それは幼いころの借りを返したということで。それに、僕も行きたい気持ちはありましたし」

「俺には話しておいて欲しかったね」

少し恨めしそうにそういつてお兄さんがうちのほっぺをもむ。

よっぽど気に入ったのかもむもむ。

「そんなに責めないでくれ。たまにはこういうサプライズもいいだろう？」

ちよつといたずらがばれた子供みたいな顔でバル君が笑った。

「嫌いではないが、妹のことだから早く知りたかったな」

……なんか、話に花が咲いてるみたいだけど、三つイイですか？

一つもうそろそろしゃべってもいい？

二つもうそろそろおろしてくれない？

三つもうそろそろ食べてもいいかな？
え？どれもダメなの？？

04 ロゼリアとウェルセント家 前編（後書き）

街並みのイメージは19世紀くらいのイギリス……かその辺。
イメージだけだね。

05 ロゼリアとウェルセント家 後編

それからしばらくしてお菓子を食べる許可を得たけど、本当に少ししかなくて全然足りない。

かわいいし、おいしいけど、もの足りない。

それを言いたくても皆懐かしい話で盛り上がってるからいいだしづらい。

つまらない。

あしをぶらぶらとさせてみても暇をつぶせるわけもないし。

——こんにちは。

しばらくして、部屋の外からノック音。

みんないつたん会話を中断。

「なんだ？」

ウェルセントさんが尋ねると、初めて見るメイドさんが入室し、頭を下げる。

彼女もきれいだ。メイドさんは美人ばかりだなあ。

「奥さまがお戻りになりました」

「やっとか？」

父親さんが腕の時計に視線を落とす。

「今は何時だ——ああ、もう8時じゃないか」

八時！どおりでうちのお腹もぐうぐう切なくなってくわけだ。

全く、と小さくつぶやいてから表情を変えてバル君を見た。

「こんな時間ですが、陛下も一緒に食事などいかがですか？」

「ええ、ぜひお願いします」

食事！うちも心の中で、ぜひ！と叫んだ。

みんな自然と席をたち始める。

うちもバル君についていこうと立てったとたんに、うちはお兄ちゃんに抱きあげられる。

「んーロゼリア」

覗き込むようにうちの眼をじっと見つめた。

「あんまりしゃべらないな、このこ。人見知りか？ウエルセント家には珍しいなあ」

違うよ、バルくんにはしゃべるなつていわれたんだよ。

とは言えないので首を横に振っておく。

「どういうことだ？」

「ロゼリア、別にしゃべっても構わないよ」

忘れていたんだろうか、バルくんがにこにこ気持ち悪い顔で許可を出してくれた。

どこまで喋ってもいいのかなあ。

バル君の言葉にお兄さんが反応する。

「無口なわけじゃないんだな？」

「うんー」

今別にいいいたいことないから短く返事した。

ご飯食べれるんでしょう？それなら満足！

早く行きたいけれど、抱っこされてるから動けない。

扉を開けて外に出るとぱたぱたと軽い足音が聞こえる。

「ああ——私の可愛いロゼリアちゃん！！」

「！！！！」

名前を呼ばれた？と思って声のする方向に顔を向けたとたんにむっぎゅうううううう！！

と、お兄さんごと柔らかい何かに抱き締められる。

「むぐう」

少し苦しくてへんな声がでちゃった。

甘くて、すこし強い香水の香りの向こうに、どこか懐かしさを感じる。

「母上、俺は離してはくれないか？」

「あ、あらやだ。ごめんなさいね？エドリック」

少し照れたように離れた女性は、まだ30代というよりは20代と
いってもいいほど若く美しい女性だ。それに少女のように天真爛漫
な性格のようだ。

姉ちゃんよりも綺麗な女性を初めて見た。

太陽のようなオレンジの髪に真っ白い肌。うちをまっすぐ見つめる
青い瞳。

……うちと全然似てないよ？

「私の若い頃にそっくり！」

とっても嬉しそうにウエルセント夫人はくるくるとうちの周りにひ
つついてくる。

「マリエツタ、陛下の前だぞ」

ウエルセント卿がそうとがめても、夫人……いや、母さんはバルくん
を見て微笑むだけ。

「ありがとう、シユー。忙しいのにごめんなさいね」

「いいえ、毎日の執務の息抜きにはなりました」

バルくとウエルセント家って仲がいいんだな。

とくに母さんと仲がいいみたい。シユーっていう愛称もなかなか新
しいね。

「それじゃあ、食事にしましょうか」

年配のメイドさんが、いつまでも廊下に居続けるうち達に笑顔でそ
ういった。

皆も笑顔でうなづいて、食道へと移動することになった。
うちもやっ和下してもらって久しぶりに自分の足で歩く。

「はあゝ満腹満腹！」

食事は本当においしいものだった。

ありふれた言葉だけど、本当においしいものだった。

うちには名前も知らないものばかりだったけど、濃厚なスープもパ
ンも肉も何もかもが十分満足できた。

やっぱり細かく小さいのが少しずつ出てくるのよりどーんとでばーんって食べるのが一番だね！

ワインをバルくんたちは飲んでいたけど、うちはだめって飲ませてもらえなかった。

未成年だからって何さー！

それにしても、ご飯は本当においしかった夢にまで出てきそうだし、きらりと輝く濃厚スープ。ちいさいけど、絶品のソースがかかった柔らかいお肉。

ほかほか温かくてさつくさくのパイ。どれも本当においしかった。父ちゃんや母ちゃん、姉ちゃんにも食べさせてあげたかったな。

「今何してるかなあー」

なんとなく思い出したらさみしくなっちゃった。

部屋を一室うちに借りて、そこに MARIA とキャラメルもよびいれ、食事の余韻をじんわりとかみしめる。

「MARIA たちもちゃんとご飯食べた？」

そう言えば、一緒に食事をしていないのを思い出し尋ねるとキャラメルが笑顔で答えた。

「はい、いただきました」

血色も良さそうだから、本当に何か食べたみたい。

うちだけ食べてるのだとしたら何か悪いしね。

借りた部屋のベットに寝転がる。

そうそう。

一室を借りるというよりここは、もともとうちの部屋だったらしい。

ピンクのフリルたっぷりのカーテンと、低めの小さな丸テーブル。

ソファも可愛いからのカバーが掛けられていて。

ベットは天井付きのプリンセスベット。

枕もふともラブリー系。

「クッションまでふりふりだあー」

大きな熊のぬいぐるみや兎の小物。

好みかと言われればそうではないのだけれど。

桃色のハートのクッションを抱きしめてゴロゴロ寝転がる。

ここまでそろえるとある意味別の執念を感じてしまう。

「……」

ふと、いままでの疑問が頭に浮かぶ。

「どうかしましたか？」

キャラメルが隣に来てうちの頭を撫でてくれる。

それがやさしくて気持ちいい。

口に出してもいいのだろうか、一瞬悩んだながらも口にした。

「うち、何で捨てられてたのか聞いてもいいのかな……？」

正確に言えば捨てられていたというよりは田舎に預けられていたということらしいけど。

戻ってきて祝福モードしかないし。別に悪い理由じゃないみたいだ。

その点は大丈夫だろうけど、実はハードな理由があったらどうしよう。

「聞いても大丈夫だと思いますよ」

キャラメルがちよつと考えてそういった。

「そうかな」

「はい。この部屋のもの一つ一つに思いやりが感じられますから

……あと、すごいこだわりが」

こだわりは、女の子らしさの追求……かな？

確実にあの人の趣味だろうなあ。

でも、嫌われてなさそうだし、おもいきって聞いてみようかな。

うじうじしても仕方ないしね。

明日にでも聞いてみようかとたんにちょうど扉がノックされた。

——こんにちは。

「？はい」

うちが返事して、マリアが扉をあけると、ウェルセント婦人……母

さんが笑顔で立っていた。

噂すると何とやら、ってやつだね。

満面の笑顔だ。

「お母様よ、ロゼリア。一緒に今からお風呂に入りましょう」

お母様って呼ぶもののかな？

まあ、そういうアピールなのだと受け取って、とりあえずお風呂のお誘いをうける。

「うん。はいー」

キヤラメルたちに留守番してもらって、うちはお母様の手を握って一緒に風呂へと向かう。

なんかすごくうれしそうだ。

うちも胸のあたりがぽかぽかして嬉しい。

バスタブは泡だらけでぶくぶくしていた。

「おお！」

「さ、洗いましょ」

シャワーで一氣に頭からお湯をかぶり、タオルで体を丁寧にこすってくれる。

はやくあの泡の中に飛び込みたいけど、洗わないとダメみたいだから我慢する。

「せっかくロゼと久しぶりに再会できたというのに、お母様とまたすぐにはなれなきゃいけないから寂しいわね」

背中を洗ってもらっている時にお母様はそう呟いた。

「どうして？」

「かなり早いけれど、ロゼは後宮に入ってシユーのお嫁さんになってもらわなきゃいけないからよ」

「ふーん」

よくわかんないやあ。

「目を閉じて」

洗い終わったのか、言われたとおりにすると頭からお湯が掛けられ

すつきり泡が流れる。

それから、持ち上げられてバスタブの中へとゆっくりつかる。

お母様も体を洗ってから一緒に入ってきた。

「ねえ、お母様」

「なあに？」

お母様の胸にもたれて座ると、肌の暖かさがお湯の温かさと重なってとても気持ちいい。

「うち、なんで捨てられたの？」

「捨てた……確かにそう捉えられてもしかたないわね。そのことに対しては本当に悪かったと思ってるの。ごめんなさいね」

「うん」

「理由はそうね、うーん。今のロゼリアに言ってもわからないかもしれないけど、シユーのお嫁さんになるためだよ」

「ふーん」

やっぱり良くわからないよ。

鼻がつかるくらいまで湯船に体を沈める。

「私のわがままで貴方を一瞬でも手放したのは悪いと思ってるわ。」

でもね、お母様もお兄様もお父様もみんなあなたのことを愛しているのを忘れないでね」

そういつてうちの頭に頭をのせてきた。

「うん。わかってるよ」

皆の眼はとても温かくて、優しくて。

こっちの家族も好きになれると思う。

「よくわからないけど、うち、この人たちも好きだと思う」

お母様のほうにさらにすり寄る。

「でも、すぐに後宮にいくから離れちゃうんだね」

「そうね。……一番上の息子もいなくなつて、貴方もいなくなつたらエドはまた寂しがるわね」

……ん？一番上のお兄ちゃん？？

なんか家族が一人増えたような気がする。

「そろそろ上がりましょうか」

持ち上げられてお風呂からあがる。

「明日はとうとう後宮に上がるけど、これだけは忘れちゃだめよ？」
うちのパジャマを着させてくれながら、お母様はうちの眼をみてし
っかりいった。

「私似なんだから、あなたは美人になるのよ！」

「ふーん」

本当に似てるんだろうか。

うちは母ちゃんとかに普通普通って言われてたから、こんなに美人
なお母さんに似ているって言われてもピンとこない。

んーお母様ってよくわからないや。

でも、やわらかくていいにおいがして、安心する。

次の日、朝ごはんをそこそこにいただいて、いつまでも渋る兄をな
だめつつやつと城へと向かうことにした。
出発にみんなが見送ってくれている。

「決めた、俺、城勤めする！」

急に、何を根拠に覚悟したのかお兄さんが叫んだ。

それに対してお父様が苦笑い。

「妹で将来の仕事を決めるんじゃない」

涙涙のお兄さんの頭を撫でてあげると再び抱きつかれる。

「あーロゼ！兄さんは悲しい！」

「うあー。兄さん、苦しいよー」

「エドリック、そろそろ出発したいのだが」

バルくんがじんわりとした怒り口調でうちを引きはがす。
もうちょつと丁寧にはがしてくれないかなあ。

「それでは、ウェルセント卿。お世話になりました」

バル君はうちを隣において丁寧にお辞儀した。

「お世話になりました」

うちもそれなるべく真似てお辞儀をする。

「いえ、大したお構いもできませんでしたが……娘を頼みます」
「ええ。では」

最後にもう一度お母様がうちをぎゅうって抱きしめて、お父様が頭を優しく撫でてくれた。

白くて、大きくて精巧な作りの綺麗な館。

うちの生家。

ただ数年ぶりの帰宅だというのに滞在期間1日。

なんだが複雑。

でも、まあそんなに悪い人たちでもないし、嫌われてないというのはわかったからよかったかな。

「じゃあね、シュー。ロゼリア。お幸せにね」

「……」

お母様はレースのハンカチで涙を拭く真似をしながら惜しそうに手を振った。

「それでは、ごきげんよう」

いつまでも帰れないので苦笑いしてバルくんはうちを連れて馬車の中へと戻っていった。

馬車の中からのぞく庭園は、コテージガーデンでお母様が好きそうだな、なんて心の中で思った。

「出してくれ」

やっと動き出した馬車の外からお兄さんの声が聞こえた。

「また、逢いに行くからなあ〜！」

馬車はすでに動き出したというのに、兄さんはまだ手を振り続けながら声を張り上げている。

その姿をみてバル君は苦笑いをこぼした。

「あいつはシスコンだったのか」

「バルくんはロリコン」

「違うわっ！」

すぐに言うтусぐに突っ込みが返ってきた。

そろそろ突っ込みのクオリティが高くなって来たね、バルくん！

そのやりとりがちょっと受けたのか、隣に座るキャラメルが揺れる。

「うちは幸せ者だなあ」

「……そうだな」

最後にふといメイドさんがくれたチョコレートを一口に含む。うん。めっちゃくちゃうまい。

甘くてとろけるミルクチョコレート。

思わずほほが緩む。

「ロゼリアを今以上に幸せにしないと、エドが怖いな」
そういつてうちの髪を撫でる。

「……大事にしてやるから、心配するな」

「……」

グレーの瞳に映るのは、チョコを頬張るうちの姿。

「……ふーん」

「結局それか」

ちよつと顔が火照ったのは、グレーの瞳には映らないでほしいな。もうひとつ、チョコを口に放りこんだ。

チョコって本当に甘くておいしいね。

05 ロゼリアとウェルセント家 後編（後書き）

お母さんってよくわからない。

by 作者っていうね。

チヨコ食べたくなってきたなあー。

イギリス料理ってまずいんですかね？？

06 ロゼリア、後宮へ！（前書き）

後宮って、どんなのだろうねー。
イメージ遊郭の欧米番？

06 ロゼリア、後宮へ！

あっちいたりこっちいたり。

遠い田舎から数日かけましたがやっと目的地につきました。

首都センラウ

地面は石畳で整備されていて、そこから生えるように上品なレンガ造りの家がちらほらと見える。

落ち着いた雰囲気で、適度に自然も残されており、落ち着いた雰囲気だ。

街の中心部に近づくと、クラシックのゆったりとした控えめのメロディが流れてきていて、華やかな感じだ。

でも、田舎町出身のうちのにはすましているような感じすらする。それ言ったら多分怒られるから黙っておこう。

うん、きれいなのはきれいだしね。

父ちゃん母ちゃん、ねえちゃん、うち、憧れの首都デビューだよ。

うちは、住宅街を超える前に馬車のなかで寝てしまったからお城の全体図や玄関を見れなかったけど。
起きたら広くて上質な部屋だった。

……父ちゃん母ちゃんねえちゃん、うち、首都デビュー失敗だよ。

「おはようございます、ロード」

「おはよお……キラメル……うちロードじゃないよ」

「主人という意味ですよ？」

体を起こしてもらい、髪を整えてもらう。

「ふああ」

よく見たら、二人ともスカート丈の長いメイド服に着替えている。まるでお人形さんみたいでとても似合っている。

「その格好似合ってるよ、かわいい」

「ありがとうございます」

スカートの皺も直してもらってベットから降り、改めて部屋を見渡す。

「おお、広いなあ」

東の窓を開けると、中庭の景色が見える。

……なんで木をあんな風によくわからない形にするんだろう？あれは鳥？あちらのは……わたあめ？あ、羊かな。

上質そうなテーブルとチェア。

小さな本だなと小さな鏡台。

ただし、本は難しそうなおもしろくなさそうなもの。

この部屋に扉が3つある。

ひとつずつ開こうとしたら、「そこは私たちの待機するところですよ」とマリアが言った。

ぶう。見る楽しみがなくなっちゃった。

それでもまあいいかと入ろうとしたら、「だめです」って止められた。

「じゃあ、これは？」

「バスルームです」

「ここは？」

「出入り口です。なるべく出歩かないようにしろ、と陛下がおっしゃってましたよ」

「ふーん」

陛下って誰？

なんかどこかで聞いた気がするなあ。

出歩いちゃだめなら扉なんかつくるなっていうーの。

ん？そういうことじゃない？？

「そろそろ先生がいらっしゃいます。その格好では少し華やか過ぎるので着替えましょうね」

先生？

ちなみにうちが今着ている服は、お母様が用意してくれた薔薇のモチーフの布がフリルとリボンがたっぷり使われた真っ赤なドレスだ。

……これ、うちあんまり好きじゃない。

着替えるのなら大賛成だ。

頷くとマリアが隣の部屋からシンプルなドレスを用意してくれた。
なるほど、クローゼットがないとおもったらマリアたちの部屋にあるらしい。

「先生つて何を学ぶの？」

「たくさんのことですよ。レディとしての嗜みやこの国について様々なことを教えてくださいます」

「ふーん」

うちの田舎の先生は、いや、先生なんてものもなくて、知らないことはみんな母ちゃんが教えてくれてたな。

「では着替えましょうね」

「私はいったん失礼します」

マリアが奥に引っ込んだのを確認して、キャラメルが服を脱がし始める。

うちは着替えを手伝ってもらいながら、ふと思う。

「キャラメルとマリアってそう言えば何歳？」

「私は14です。マリアは……たぶん、13くらいかと」
うちの一つ上、二つ上か。

じゃあ、お兄ちゃんお姉ちゃん？

「そういえばマリア男の子なのにメイド服着るの？燕尾服じゃないの？」

「マリアが女のほうが主人の傍にいられるから、と」

女装？でもいつかばれないのかな？

と思ったけど、13であの線の細さならまだまだ大丈夫だろうな。
と思いなおす。

紺色のシンプルなドレス。

シンプルっていても控えめにレースはついてるし、背中には大きめのリボンが尻尾みたいにつけられている。もちろん、お値段は田

舎娘が買えないくらい高いんだろうなあ。

鏡がないからよくわからないけれど、きっとまた服に着させられている感があるんだろうなあ。

「うち、この肩のもこもこのとこ嫌い」

「我慢してください」

口を尖らせてキャラメルに言つと、やんわりとたしなめられた。

ドレスの肩のところ、何でここだけ無意味に膨らんでいるんだろう。なんとなく、邪魔。

髪がたはサイドポニー。

頭を振つたら右に左に動いて面白い。

ぬあ、枝毛発見。

——こんにちは。

マリアが扉を開けるとまだ若そうな淑女がたっていた。

一礼して、うちを見て微笑む。

「初めまして、ロゼリア様——エルシナ・アルハザムです」

ちよつと勝気そうなの……というか怖そうな女性だ。

歳は20代後半くらいだろうか？

真っ黒の髪をお団子にしてまとめているが、どこことなく色気も漂つ。

「はじめまして」

「今日からあなたの教育を任されたわけですけども——」

なんだかうずうずとしている。

「……」

じーっと見つめていると思ったら、うちのほっぺを撫でてからきゅうにガバツと抱きついてきた。

「ふぉ！」

「貴方がわいすぎ！！あーもー我慢できないわあ！！」

すりすりすりすり。

最近こんなの多いなー。

「……ごほんっ」

マリアが白々しく咳をすると、エルシナは八つとしてうちを放した。
「失礼しました。ご無礼をお許しください」

「え？あーうん、別にいいですけどー」

わざわざ頭まで下げなくてもいいのに。

「ありがとうございます……それじゃあ、さっそくお勉強しましょうね」

彼女は貴族の中では随一の子供好きで有名ならしい。

だからこそうちの先生に選ばれのだろうけど——結構性格が愉快すぎる気がする。

まあ、厳しいだけの先生よりいいかな！

席についてペンや紙を広げる。

「ロゼリア様、字は書けます？」

「書けない」

「そうですね、ではこの紙に書かれたものを上からなぞってください」

うちは言われたとおりに握ったペンで字をなぞる。

「字は、読めますか？」

「読める」

読めないと、詐欺にあったりするかもしれないから字を読めるようにしないとだめだよって言われたので読むだけ是可以る。

「そうですね」

やんわりとペンの握り方を直される。

使いづらい。

「書き順はこうですよ」

「ん」

上から手を添えられ、字にそって誘導してもらえるものの、なかなかうまくいかない。

姉ちゃんに教えてあげようか？って言われた時に素直に習っておけばよかったかも。

——コンコン

部屋にノック音が響き、皆がうちのほうを見る。

「へ？なに？」

「貴方の部屋だから、扉を開けてもいいのか許可をもらいたいのよ」

「いいよ」

つて、先生が来た時は、うちの許可を取らずに開けたのに？

先生の前ではきちんとするのかなく？別に許可取らなくてもいいのに。

うちの許可を得てキャラメルが扉を開けると、そこに居たのはいつもよりもちよつとえらそうな服を着たバルくん。

「——陛下」

先生は席を立つて手を胸に当てて頭を下げる。

「ああ、勉強をしていたのか、随分と早いのだな」

「はい、ロゼリア様が大変愛らしい方だと聞いて、居てもったつても居られず、つい」

うちがここに来ることはしっかりと他の人にも知られていたらしい彼女の幼女好き……じゃなくて、子供好きな噂を知っているのかバルくんも少し苦笑い。

「勉強を進めるのは一向に構わない。だがすまないが彼女に話がある、少しはずつてくれ」

話？

「はい、かしこまりました。失礼いたします」

先生は一礼すると優雅な動きでそのまま出ていった。

あゝ。勉強道具とかどうしたらいいの？

「ロゼリア」

なんとなく出ていった先生の背中を目で追っていると、バルくんに呼ばれた。

「目が覚めた時に一緒に居なくてすまなかったな、さみしかったか？」

振り返るとバル君はベットに座り込んで微笑んでいる。

「べつにつ！」

うちはその胸に向かって飛びついた。

「ぐあっ……！」

あ、いい感じに肺あたりに頭が直撃したかも。
かなり苦しそうな悲鳴まで出されちゃったし。

「……ごめん」

「か……まわない」

だいぶ痛そうだよ？

気を利かせたのかマリアもキャラメルも隣の部屋に戻ったのかいない。

うちはバルくんの方にもたれるように座り込む。

「……で？うちに何か用？」

「ああ、ここの説明をしておこうと思ってな。馬車の中でもしたが、どうせうとうとして聞いてなかっただろうし」

よく分かったね。そのとおり！話したことすら覚えてないよ！

口にしたら怒られるだろうから、黙っとくけどね

「俺から言つたとしても、今までのように聞き流すだけだろうから質問に答えてやる、何かないか？」

と、いきなり言われてもね。

ここ3日程度でうちの扱いに慣れたね、バルくん。

それにしても質問かあ。

うちは首をかしげて指をあごにくつつけ少し考える。

あ、このポーズ少し格好いいかも。

「なにかないのか？」

「うーんとね、あっ！うちここで何したらいいの？」

「基本的にこの部屋に居て、俺が来るのを待ってればいい」

「ふーん」

バルくんはいりましたー……なんちて。

ん？いやー間違ってもないのかなあ。つまりどういうこと？

「その間、自由ってこと？」

「……あまり自由でもないが——そこは、召使にでも聞いて判断してもらえ」

なんでそんなにお茶を濁したような顔で言うの？

ちよつと上を向く感じで見上げていたらチョップされた。

「痛い」

そんなに痛くもないけれど、ちよつとだけ拗ねたように言うと目をそらしながら頭をなでてくれた。

「もうないのか？」

「え」と……ご飯は出る？」

「当たり前だろ、召使がちゃんと持ってくる」

当たり前なんだ。それはすごい！

ただでご飯が食べられて、衣食住保障。なんて素敵のところなんだろう。

今までの経験からして、きっとデザート付きですぜ！

「……いいねえ」

思わず口元と涎泉が緩まる。

「そこで心底うれしそうに頬を緩めるんじゃない、悲しくなるからどうして？ 嬉しいんだもん。」

今度は頭をぽんぽんと優しく叩かれ、ベットから立つ。

「もう行っちゃうの？」

ちよつとそれは寂しいかも。

つい無意識のうちに彼の長い服の袖を掴んで引き留めた。

「俺も執務の間をぬけ出してきただけだから……最後に何か質問はないか？」

本当に少し困ったように笑ったから、あんまり迷惑かけられないな。そう思うとつい手にこめる力が緩んだ。

「最後に……なにかー質問……んーあ！」

そういえば、ずっと聞きたかったことあったんだ。

「陛下って何？」

ずるうつー！！

バルくんはいきなり力が抜けたようにずっこけてどこか恨めしそうにうちをにらんでいる。

うち、なんか変なこと聞いた？

「陛下は俺だ！この国の王様の呼び名だ」

「えええ！バルくんって王様だったの？！……ん？どこかで聞いたような気がするなあ」

驚いては見たものの、どこかで誰かがそんなこと言っていたような気がしなくもない。

「最初に名乗っただろうが！シュバルツ・リンヴェルだと！」

「聞いたよ。それが何か関係するの？」

リンヴェルっていうのは覚えてなかったけど。

ちよっとーうちの足元で頭痛そうにするのやめてよく蹴っちゃうよ？

「この国の名前は？」

国の名前？

「えー……と、りんべる」

「何故一瞬悩む！それにリンヴェルだ！」

「あーバルくんと同じだね！」

あ、またガクつと力なく倒れた。あれ？間違ってた？

「気がつけ！」

何に？

「……あゝ分かった。バルとヴェルってなんか音似てるね」

「違う！！国の名前なんだから、王族しか名乗れないだろ！！？」

「ふーん」

そういうものなんだ。そうならそうと早くいつてくれればいいのに。うちの隣でベットに沈没しているバルくんの頭をなでる。

「バルくん」

「……」

気力が尽きたかのように倒れている。

「お仕事行かなくてもいいの？」

「そうだった！！」

一気に復活。

寂しいけど、お仕事しないと食べていけないもんね。
少し乱れた服装をととのえて、また冷静に戻る。

「じゃあ、暴れない程度にな」

「ん」

また優しく頭を撫でてくれるので、目を閉じてじつくりとその手の
感覚を味わう。

大きな手のひらから、心地よい熱が伝わる。

……って、うち暴れてないし!!

「また来るから」

「分かったーまたねー」

バル君が部屋から出て行っちゃうとでまたすることなくなっちゃっ
うな。

後宮って結局よく分んないけど、自由にしてもいいならいいか。

部屋から出ていくバルくんをちょっと寂しく見送ってベットに倒れ
込んだ。

「……あ」

そういえば、先生ってどこで待ってるんだろう??

もどってこないのかなあ。

ベットからまた体を起した。

「マリアあ、キャラメルー」

もう一度勉強の続きをしよう。

先生を呼び戻してもらうために二人の名前を叫んだ。

06 ロゼリア、後宮へ！（後書き）

先生のキャラがいいですね。

って自分でほめてみる。

敬語の勉強をし直さねばなるまい（*
| *
;

07 ロゼリアと仕立て屋

ここにきて、3日は経った。

ダンスだったりお勉強だったリマナーだったり、いろんな先生がきたけど。

……なかなかバルくんが来てくれない。

というか、いままで仕事で一日が終わるとかが通例だったからこういう風に過ごしていると一日が無駄に長く感じるよね。

バル君こないしね！（あえて二回言います）

「ロゼリア様はまだ幼いですし、初潮も来てませんから手を出せませんからね」

とエルシナ先生が言っていたけど、所長ってだれ？どこの人？

初潮くらいは知っているけど、あえてぼけてみただけ。

幼いとなにがどう、どうしてないとだめなのか聞きたかったけど。

マリアが気まずそうな顔をしたから「ふーん」で終わらせてあげた。初潮がないからバルくんは来てくれないのかな？

そうキャラメルに言ったら。

「きつと陛下もお忙しいのですわ。なにせ世代交代なされたばかりですもの」

とうちの頭を優しく撫でてくれた。

世代交代……大人の事情ってやつだね。

「うちにはわからない世界だね」

わかりたくないな。

口を尖らせてみたものの、キャラメルに言ってもだめだよな。

あ！おっとと、また、うちって言っちゃった。

ブリアン先生曰く……あ、作法の先生ね……レディたるもの一人称は私^{わたくし}じゃないといけないんだって。

うへえ。めんどくさい。

「もうすぐ、仕立て屋の方が来てくださいますよ」

いつものように変わらず綺麗な庭を窓から見つめていると、マリアがそう告げた。

あ。白い鳥が飛んでいる。

「ドレスと靴を新調なさるように陛下が呼んでくださったようですよ」

キャラメルが持ってきた紅茶を小さな机の上にのせ、うち……私をソファへ座るように促した。

「仕立て屋よりもバルくん呼びたい」

ソファに座って足をぶんぶんふりますと、やんわりとキャラメルに足をなでられ静止させられる。

靴なんかいらない。ドレスだっていらない。ただバル君とお話したい。

「お忙しいのに、陛下はきちんと毎晩この部屋へ訪れてきてくれておりますよ？ただ、時間が時間だけにロゼリア様がお休みになられていらっしやっているだけで」

優しくたしなめるように言われたけどバルくんが来てくれているとこのうのはうそだ。

うちは知ってる。

キャラメルはうちを気遣ってそういつてくれているけど、本当はバルくん3日前から来てくれないもん。

ちゃんと一晩徹夜してからの結論だから間違いない！

でもそれを伝えるとまたキャラメルが困るかもしれないからほっぺを膨らますだけでとどめておく。これを言うべき相手はキャラメルじゃなくて、バル君本人だ。覚えておけよ！

——コンコン

「ああ、来られたみたいですよ」

「どうぞ」

うちが扉をノックしている人に入室許可を出す。

その許可を得たマリアが扉に手をかけ、中へと誘う。

と、一瞬だけマリアの動きが止まった。

でも再びぎこちない動作で客人をうちの所まで案内する。

「お初にお目にかかります。ドリトル・ミラージュっていうものですわあ」

「うげ」

なんだろう。濃い人が来た。

「し、失礼ですよ、ロゼリア様」

キャラメルも声がどもってるよ。

それも仕方ないよ、だってこの人男だもん。

……男だよねえ？

明らかに女性にしては広すぎる肩幅、野太い声。彫り深い顔にちよつと色黒の肌に毛深い腕。

服装はフリルたっぷりの乙女思想な感じのドレスローブ。お母様が好きそうだ。

色は赤からオレンジのグラデーション。

顔はしっかりと化粧が施されている。

染めているのか髪の毛の色は桃色。でもある意味似合っているのかそんなに合わない、というわけでもない。

それでも思わず頬がひくひくしていると、マリアが補足情報を足してくれた。

「今、国で一番はやっているARUCANAブランドのデザイナーですよ」

ARUCANA？聞いたことがないなあ。まあ、うちの田舎は服のブランドどころか服屋もほとんどなかったしね。

この人じゃなくてもいいんじゃないの？なんてつい思ってしまふ。あ、でもよく見るとなれたかも。それになんか雰囲気は悪くないし。

「うち……じゃなくて、私はロゼリア・ウェルセント。お会いできて光栄です」

先生に習ったようにスカートのすそをつまんでお辞儀をする。するとドリトルは野太い……もとい、黄色い声をあげて手をたたいて

喜んだ。

「んまゝ可愛らしい！！私相手にそこまで丁寧にしなくてもいいんですよぉ〜」

語尾が甘ったるい感じなのはわざとなのだろうか。

腰のポーチからメジャーやらメモやら取り出してにーっこりと笑う。

「それじゃ、とりあえず採寸からしましょうね！」

ドリトルはいい人だと思う。

でも、少し香水臭いのがイヤかもしれない。

一旦先程まで着ていたドレスを脱いでいろんなところを採寸する。

胸囲の採寸の時、ふとキャラメル胸を見た。

……バルくんはおっぱい大きい方が好きかな〜。

でも父ちゃんは小さいほうが好きっていったしな〜。

うちの視線に気がついたのか、キャラメルが照れて胸を隠した。

「ドリトルってね」

「はあい？」

図るの結構時間がかかるからおしゃべりしてみた。

うちの問いかけに答えつつも手を休めないあたりプロなのだろう。

プロ意識、すっげ〜。

「初潮きた？」

「来たわよん」

「うそつけ！！」

おおう。キャラメルとマリアが声が被った。

そんなに全力で突っ込まなくてもいいんじゃない？

「ロゼリア様？初潮は男の方には来ませんよ？それにレディがむやみにそういう単語を口にしてはいけません」

先ほどの言動をごまかすようにキャラメルがうちに言った。

微妙に動揺が目映ってるよ。

「ふーん」

キャラメルたちの言葉に心外だと言わんばかりに言った。

「あらん？私が男だともいいたいのかしら？」

「「違うの?!」」

またマリアとキャラメルが突っ込んだ。

いや、今度は突っ込んだというか、驚いたみたいだけど。

「まあ、男ですけどね」

ドリトルがしれっとした顔で言い切るとマリアたちは少しガクッと肩を落とした。

確かに、姿はがっちり男の人だしね。

「だよ〜」

うちはあんまり興味がなかったからそう呟くだけにしておく。

「意外と肝が太いというか、なんというかね。大物になりそうねロゼリア様」

ドリトルがおもしろそうに喉をくくつと鳴らした。

腰回りをきゅつと図ると終わったのかしゆるしゆるとメジャーをひとまとめにしていく。

「だいたい図ったわ。あとは……デザインね。どういうドレスにします？」

なんか分厚い紙束を取り出し、数枚めくって考えている。

「あ、そうそう。ロゼリア様？私のことはドリトルではなく、ドリーちゃんと呼んでくださいな」

「うん、分かった。ドリーちゃん」

「はい」

うちが名前を呼ぶと、嬉しそうに腰をくねらせた。

190程度の巨体がくねくねと腰を動かす光景は、なかなかいろんな意味で見られないと思う。

後ろでマリアとキャラメルが引いている。

「デザインって言われても、良くわからないよー」

「それじゃあ、服の方は私の自由にさせてもらってもいいわね？」

「うん、それでいいよー」

なんか、紙にさらさらと書きこんでいる。

すでにいくつかアイデアが浮かんだのか細かく簡単なイメージだけ書いている。

それから、あの分厚い紙束を再び持つてばらばらとめくってうちのほうに見せてくれた。

「この色と、この色。後この色。どれが好き？」

その紙にはいろんな色が小さく塗られており、微妙に違うくらいしかわからない。

「色もどれでもいい。完璧ドリーちゃん任せでよろしく」

なんとなく目が痛くなったので、紙を押しつけドリーちゃんに敬礼する。

「了解。任せておいて」

ドリーちゃんは紙にまた何かメモをしながら、うちにウィンクを返してきた。

うしろでまた、マリアたちが引く気配がした。

うちはまだ慣れたけどなあ。

「それじゃあ、私はそろそろお暇しますわね」

「もう帰っちゃうの？お茶でも飲んでいけばいいのに」

「そうしたいのはやまやまですけど。私一応超売れっ子だから多忙なのね？」

残念そうに肩をすくませたドリーちゃんを下から見上げる。

おお、こうして見てみると、微妙に腹筋があるのがわかる。

「そっかあ。なら仕方ないね」

ドリーちゃんならもっとおもしろい話とか聞けそうだと思ったのにな。

「ごめんなさいね、それじゃあ2週間くらいで出来上がると思うから楽しみにしておいてちょうだい」

「うん、お願いします」

マリアたちが固まって動かないのでうちが代わりに扉を開けてあげて別れ際に手を振った。

「ばいばい、またね」

「さようなら」

巨体が部屋から居なくなると、なんだか部屋が広く感じられる。いや、もともと広いんだけどね。

「なんというか」

ぽつり。

マリアが放心しているように呟いた。

「すごい方でしたね」

「ドリーちゃんまた来ないかなあ」

うちがそう呟くと、キャラメルが疲れたように「そうですね」とため息とともに吐き出した。

ドリーちゃん。

今度ドリーちゃんが来た時にうちの相談に乗ってもらおう。

どうしたらバルくんが来てくれるか一緒に考えてもらうんだ。

後宮暮らしはおいしいものが食べられるし、綺麗な服も身につけるし。

温かいし贅沢だけど、なんだか寂しいのはなんでだろう。

うちはキャラメルになんとなく抱きついた。

「ドリーちゃんにこんど同じ香水もらおうかな」

「え！それは……ええと、私が何か探してきますから」

ちよつと必至なのが可愛くて「うそだよ」っていったらほつとしたように微笑んだ。

ごめん、そんなにドリーちゃん嫌？

あ、でもキャラメルが選ぶ香水ってなんだろう。ちよつと興味あるなあ。

それに、きつとキャラメルならいいにおいを見つけてくるんだろうな。

——コンコン

また誰かが来たのかノックがしたのでマリアが扉を開く。

暇よりはいいけれど、珍しいこともあるなあ。

「――元氣か？ロゼリア」

「バルくん！！」

扉から出てきたのは、大好きな大好きなバルくん。

うちは走って飛びつくと、ちゃんと受け止めてくれた。

「ひどいよ、3日も放置しておくなんて！」

うちは怒ってほっぺを膨らますと笑って指で潰された。

ぷしゅーっと頬に入れた空気が抜けていく。

「ごめんごめん。ちよつと執務が立て込んで……これやるから元氣出せよ」

「何これ？」

そう言えば片手にさつきから何かを持っている。
受け取ると、それは大きな兎の抱き枕だった。

「うほお」

「だからそこは素直にやったーっていえよ」

兎をむぎゅーっと抱きしめると、ほのかにバルくんの匂いがした。

兎の顔がゆるくて可愛いし、抱き心地すごくいい！

……でも、うちはやっぱり。

ぎゅーうう、っとバルくんを抱きしめる。

うさぎさんはいったんマリアにパスしておいて、今のうちにいっぱいバルくんになれる。

「次はもつと早く来てね！」

「頑張る」

こら、目を合わせていつてよ！

ソファに座ってうちを膝の上にのせてくれる。驚きの安定感。素敵。

「今日はこれから暇だから、ずっと一緒に居てやれる」

上を向いてバルくんを見上げる。……角度的に顔が見えない。

だから横に移動して腕を掴む。

「本当に！？やっぱり、バルくんはうちと一緒にが一番いいんだあ！」
一緒にいてくれるのがうれしくて声も弾む。

「誰もそこまで言っていない」

「うそうそ、だってバルくんロリコンだもんね！」
ばこん。

とまた一撃叩かれた。

「いたい」

「まったく。ロリコンじゃないというに」

てれ隠しだからって叩かなくてもいいのに」。

耳、ちよっと赤いよ？言ったらまた叩かれそうだから秘密にしておけど。

なんだか口元が自然とにやけてしまう。

マリアからうさぎさんをもう一度受けとって、腕に抱いて隣にすり寄る。

「それで、今日は何をしていたんだ？」

「あのね！！」

バルくんがいないとあんなに寂しいのに、バルくんがいるだけで全然寂しく感じなくなるのはどうしてかな？

忘れないうちにドリーちゃんの話をしたら、知っているのか命一杯渋い顔をした。

まあ、ドリーちゃんを呼んだのはバルくんみたいなものだしね。

「……まあ、ドリトルはあれだな。腕はいいけどな」

「えゝ？面白いと思わない？」

「……まあ、その……そういう言い方もあるな」

面白い人なのにな？」

ドリーちゃんが今度来たら言うこと変更。

バル君との話を聞かせちゃおうと。

「バルくん！」

とりあえず今まで来てくれなかった分を補充するためにバルくんに思いっきり甘える。

「あ」

バルくんに聞きたいことがあるのを忘れてた。

「バルくん！」

「どうした？」

「バルくんはおっぱい大きい方と小さい方とどっちがすき？」

「どちらかといえばそりゃ大きい方が……って何を言わせるんだっ
！！」

07 ロゼリアと仕立て屋（後書き）

おかまじゃない、おとめなんだ。
とかいい張ってみる。

おかまキヤラっていい人多いよね。

08 ロゼリアとブリアン先生

光陰矢の如し、とはよく言ったものだ。

後宮に上がり、月日は流れ四季は流れ、冬が来た。

つまり、田舎育ちのロゼリアが来てもはや半年以上は過ごした。

ここまで過ごすのは早いようで、すごく長かった。

昨日の夜は、たくさんの量の雪が積もった。

それをみたうちは、その行動に出るのを抑えられなかった。

「ロ、ロゼリア様っつー!!」

年配の女性の、いやに甲高くて、微妙に震えが入っている声が後宮の庭に広がった。

「……」

ロゼリアがその声の主のほうを向くと、そこには今までの人生を物語る深い皺が刻まれた、厳格そうな婦人がたっている。

もちろんその表情は楽しいとかそういう愉快的表情ではない。

「げげ」

——そう、ロゼリアのマナー担当、チェリア・ブリアン先生だ。信じられないものを見たという顔で、ロゼリアを一身に見つめている。

白銀の庭の中から金の髪が太陽の光に反射してキラキラと輝いた。

「見つかったちゃった! どうしよう!」

その髪の毛にも少しばかりの雪が乗っている。

つまり、キャラメル、マリア、ロゼリアの三人で雪合戦をしていたのだ。

ついでに雪だるまも作った。

もちろん発案者はロゼリアで、一応とめた二人の従者は結局強制的に参加させたわけだが。

ブリアン先生は御歳の割にはパワフルで怒る時は某お宅の父親よりもすごい雷が落ちてくるのだ。

ただ、一気に燃え上がるような説教もできるし、じわじわと毒のようになしてくる説教もできるエキスパートだ。

ベテランのなせる技とでもいってもいい。

もちろんロゼリアはどちらも経験しているし、合わせ技も経験している。

雷が来たと思ったらぐちぐちと永遠に続き、それに慣れてきたら大きな一撃が落ちてくる。

必殺技とも言えるその合わせ技をすでにロゼリアはその説教を何度も受けているのだ。

その先生に淑女がするはずもない雪合戦を、あろうことが従者としていた。

怒られない要素がどこにあるのだろう。

——うち、終了のお知らせ。

なんてロゼリアは考えていた。

ブリアン先生の唇がふるふると震えている。もちろん寒いからじゃないですよ。

「どうしようって、ロゼリア様。ここはもう、素直に謝るしかないですよ」

マリアがうちの頭にのっている雪を払いながらそううちに耳打ちする。

「うん！ そうだね、じゃあ逃げよう！」

「へっ！？」

マリアとキャラメルが驚きの声を上げたのと同時に二人の手を掴んで白くなった地面をかける。

「あ！ くら！ お待ちなさい！ ロゼリア様っ！？」

ブリアン先生の怒号が聞こえてますますうちの足はスピードを上げる。

うひゃーこわいこわい。

迷路のような植木を右に左に曲がっては進んで曲がっては進んで。ここまで来たらもう大丈夫だろうと、二人の手を離して中庭でティ―パーティーをする様に置かれているイスに座る。

……しまった。雪が積もったからドレスが濡れちゃうかも。急いで立ってはいいてのける。

良かった。まだ解けてないからドレスはセーフ。

改めて深呼吸して雪を払ってから席に座る。

白いテーブルが雪にまぎれてどこが机なんだか分かりにくい。

「いやードキドキしたね」

体を伸ばしながら二人に話しかけた。

「ですから、雪なげは止めておきましょうと申し上げたのに」

キャラメルが口を尖らせたので、顔をそむける。

正論は耳にいたいなあ。

「だってしたかったんだもん。それに、キャラメルだって楽しんでたじゃない」

「それは、そうですね」

とはいっても、うちだけがもちろん怒られるわけじゃなく、止めなかったマリアたちのほうがもっとひどい説教や、ひどければ罰を受けるかもしれない。

とめたけれど、止められなかったら止めなかったのと同じ扱いだもんね。

そう思うとやっぱりなんだか申し訳ない感じがしてきた。

「……ごめん。やっぱり正直に謝ってくる」

「それがよろしゅうございます」

マリアがそういってうちにシヨールをドレスの上から着させてくれた。

「ありがとう」

体が冷えているから、とりあえず暖かい部屋を目指す。

風邪でも引いたりしたら、マリアたちに迷惑をかけるし、ブリアン

先生に余計に怒られちゃう。

歩いているときに口からでた息が白いことに気がついた。

「……本当、もうすっかり冬だねー」

「もうすぐクリスマスですよ」

また空からちらちらと白い雪が舞ってきたので、それを掌で受け取る。

「ここにきて、もうだいぶたったけど、うちは少しはレディに近づけたのかな？」

全然変わっていない気がする。

今も、レディあるまじきことをして怒られに行くところだし。

来る時につけてきた雪に残る足跡をなぞるように歩く。マリアたちのも混じってどれがどれだかわからない。

うちの言葉にキャラメルがやさしく保証してくれた。

「もちろんちゃんとレディに近づいていらっしやいますよ、まだ一人称のくせやおてんばさは残っていますが、少しずつマナーが身についてらっしやいます」

「ふーん……本当？」

「はい、もちろんです」

お世辞だとしてもその言葉はなんとなくありがたい。

二人も従者としてのマナーをうけたのか、マリアとキャラメルは一歩下がったところからついてくるようになった。

一緒に隣に歩けないのが寂しいと思うけど、こういうものらしい。知れば知るほど、大人の……貴族の都合ってやつが好きになれそうにない。

同じ足跡をたどるのも飽きたから、まだ誰も踏んでいない新しい雪を踏む。

ぎゅっぎゅっとしたこの感覚がたまりませんっ。

でも、誰も一切踏んでいない雪はきれいだから、踏んじやうことにちょっとだけ抵抗を感じる。でも楽しいっ！ああ、悩んじやう！

もうお昼だけど、雪雲のせいでおひさまがすっかり隠れてしまっている。

さきほどまで晴れていたのに。

「太陽が隠れちゃったね。余計に寒く感じるや」

「本当、春が待ち遠しいですね」

ふと、話声が耳についた。

「あれ？誰かの声がしない？」

「さあ？」

キヤラメル達には聞こえなかったようだけれど、ロゼリアはその声がした方に足を進める。

なんとなく聞き知った声が聞こえた気がしたから。声を頼りに進んでいるとそこには、数人の人影が。

「あ——バルくん」

と、知らない女性たち。

木の蔭からなんとなくこっそりと覗いてみる。
お上品で、いかにも淑女。

「……後宮に暮らしている令嬢たちの様ですね」
上からマリアが推測した結論を出した。

「つまり、うちと同じバルくんのお嫁さん？」

ちよっと違うのか、考えているのか少し間が空いて返事が返ってきた。

「……そうなりますね」

本当か？それにしても本当に居たんだ。
初めて見た。

冬に咲く小さな可憐な花を見て、嬉しそうに眼を細めあでやかに着飾った身を見せびらかす女性。

控え目に、でも、大胆に。（大胆なのはその胸辺りの開き具合。寒くないのかな？）

もう一人のほうは積極的にバルくんの腕をつかんだり、自らの腕を

からめたり。

スキンシップを必死に図ろうとしている。

うわ、うちこの人のこと好きになれそうにないわー。

バルくんは、ニコニコと笑って二人の話を聞いている。

こつちを見ない。だから、うちとは視線が合わない。

「――バルくん」

なんだか、胸がちくつてしたよ。バルくん。

そっか、そうだよ。バルくんのお嫁さんはうちだけじゃないんだ。後宮ってそういうところなんだね。

「ロゼリア様。ここは寒いですから、お部屋に参りましょう」

「うん」

マリアが気を使ってくれてうちの肩を優しく押してくれる。

大丈夫、うちにはまだ未来がたくさんあるもん。

あの人たちよりもおっぱいだっておつきくなるし、顔だつてきつと綺麗になる。

童話の醜いあひるの子と一緒に。

いつか、きれいな白鳥になるんだもん。

だから、最近バルくんがあんまり来てくれなくても、大丈夫だもん。

「ロゼリア様、先生がいらっしゃいましたよ」

「ロゼリア様っ！！！」

ボーとそんなこと考えながら歩いていると、急に頭ごなしに名前を怒鳴られた。

「おおっ！！！」

顔をあげるとそこはいつの間にか部屋で、ブリアン先生が仁王立ちで立っていらっしゃる。

あーはー。忘れてましたー。

「あはは。まあまあ、先生、お身体に悪いですわ、お席にどうぞ？」
自分の向こう側の席を勧めて自分のところからなるだけはなす。

うしろでキャラメルがすごく苦笑いをしている。

「これはどうも、お気づかいなく」

失敗しちゃったみたい。せっかく嫌いな丁寧語使ったのに。

人の親切はきちんと受け取るべきだよ、おばーちゃん！

……怒られるどころじゃないから口にはとても出せない。

「ロゼリア様、先ほどのあれは一体どういっつもりですか？」

いきなり本題。良いいいわけが思いつかなかったので、仕方なく正直にしゃべる。

「えつとー雪合戦？」

すると、その顔色が見る見るうちに真っ赤に変わっていつて、火山噴火みたいに一気に出了。うわあくくるくる。絶対くる。

「貴女という人はっ！！」

ビシャ——ンなんて効果音がつきそうな雷。やっぱりきたー！！

「うへええ」

「何度もおつしやいますが、貴女様は由緒正しきお家の長女。しかもかなり異例とはいえずでに後宮に召し抱えられております身、もう少し慎ましく、お淑やかにあるべきです！」

耳にタコ。

どれほど規則正しい生活をしたのか。

大きく開いた口には虫歯などが一本も目につかない。

あんなにぼさぼさだった髪の毛もいまやつるつるキューティクル。

「聞いていますかっ！？」

「はっはいつ！！」

聞いてませんでしたっ！！

なんて言えるわけもなく、先生の顔を恐る恐る見つめる。

おお、何度見ても鬼《オーガ》だね。

「スイマセンでした！もう二度としません！ごめんなさい！」

半ば説教を邪魔するような勢いで謝ると、先生は盛大なため息をついた。

心の中では土下座しているけれど、それすると余計に怒られるから

とりあえず誠意をこめて謝る。

先生はもちろん、仁王立ちで腕を組んだまま。

「私は貴女様を監視するためにここに来たのではありませんよ」

「なあんだ。じゃあ何しに来たの？」

ぎろつとすごい剣幕で睨まれる。

「——どのような用事で来たのですか？」

急いで言い直すけど、なんがイントネーションとか間違えちゃった。

「すこし違いますが、まあいいでしょう。あなたに伝えることがあつて来たのですよ」

だから、その要件を早くいつてよ。

と言ったらまた雷が鋭く突き刺さるような視線かのどちらかが来るからニコニコ笑って——ひきつってるけど——誤魔化す。

なんだろう、また先生を増やすとか、面倒なことだったらいやだなあ。

先生が一度、こほんと咳をした。

「……貴女様が、正式な王妃候補として挙がりました」

「王妃？」

全然思いもしなかったことを言われたので思わず鸚鵡返しに聞いてしまった。

「そう、つまり王の御子を生む方ですよ」

それじゃあ他の令嬢さんたちは何しに来たのだろう。

いまいち王妃とそのへんの区別がわからないので首をかしげたら、頭を軽くもんでブリアン先生が説明してくれた。なんだか、ストレス溜まってそうだな。

あんまり苦勞掛けさせないようにしないとね。

「つまり、うちが、バルク……シュバルツ陛下の正式なお嫁さんになるということっ！？……でございますか？！」

「……まあ、肯定も否定もしづらい言葉ですが、とりあえずそう認識しておいて構いません」

昼間、バルクと一緒に居た人よりも、もっとならんとバルクさんの近

くに居られる！

それはつまり、つまり……とにかく特別近くにいられるってことだね！

「本当！」

「本当ですよ。……言葉使いが」

「やったー！！」

手をあげて椅子から飛びあがった。

ついでに口ウ手をぶんぶん手をふる。

「ロゼリア様っ！！」

そしたらまた大きな声で怒鳴られて怒られた。

「すぐにとび跳ねたり走り回ったりなさらない！それに、一人称は私です！」

さっきは走ったり跳ねたりはしていない。

こういうところを早く直しなさい。といわれても癖だからそんなにすぐに直せないよぉ。

でも言い訳してもいけないらしいから返事だけしておく。

「うう。はい」

気をつけてはいるんだよぉ。

「それに、まだ候補の段階です」

「候補……？なら言わないでよぉ。うち、ぬか喜びしちゃったジャン」

「ロゼリア様っ！一番有力なのが貴女様なのですよ？その辺の自覚を持ってもつとマナーをしっかり身につけてくださいまし！第一にその一人称！品位を疑われますよ？」

「うおっ」

地雷思いつきり踏んじやった感じだね？

ブラウン先生の説教は3時間にも及び、なおかつ2時間お勉強の補習をさせられました。

でも、でもうちってでるんだもん！！

お勉強は嫌いじゃないからいいんだけど、お説教は嫌いだよー！

08 ロゼリアとブリアン先生（後書き）

（仮）は一人称ころころ変えてました。

僕俺私うちM e など私が一番短かったな。敬語の時ぐらいかな。

09 ロゼリアと思春期（前書き）

寒いですね。

皆さんも病気にならないように気を付けてくださいね。

09 ロゼリアと思春期

「バルくんは王様で」

「うん」

「忙しいのは分かってるの」

「そう」

言葉にすると、重くなることと軽くなることがある。

この言葉がどうなのかわからないけど、どうしても黙っているのは切なかった。

「でもね」

「……腕を上げてくださいな」

言われたとおりに腕を上げ、肩周りや二の腕の太さを測る。

「でも……最近なかなか会えなくてさみしいの。これってわがまま？」

少し不安に思いながら図った数字をメモしている顔を見つめた。それから胸囲などを図って彼女——いや、彼は手を頬に当てた。

「それは、乙女なら誰でも抱えるであろう悩みですわん」

ドリーちゃんはそのまま腰をくねっとひねった。

合いからわずのド派手な恰好は冬仕様になっても変わらない。

上着はすべて動物の毛に似せたファーでできたロングコートで、何故か短パンをはいている。あしは寒くないのだろうか。

本人いわく、「おしゃれのためには暑いも寒いもないの、私は時代の流行を先駆けよん」らしい。

うちのには先駆け過ぎてただの変態だと思っただけど。言ったらきつと怒るから黙っておく。

うちはあんまりおしゃれについてわからないから。

ドリーちゃんが何か思いついたのをスケッチしている間に、その場に座り込む。

冬仕様になった部屋は、もこもこの絨毯が敷き詰められているので

地べたに座り込んであんなにきつく怒られない。

もともとあんまり怒られないけど。

「悩んでもいいの？王妃になれるのはうちだけなのに、いいの？」

ただし、まだ候補らしいけどね。

ドリーちゃんは筆を休ませることなく書きながら、そうね、と呟いた。

「確かに贅沢ともとれるかもだけど、乙女はそのくらい強欲なのが普通よ」

「普通？」

「普通」

もし、ダメだつて言われたって悩むのを我慢なんてできないけど、誰かに相談したかった。

だから、ダンス用のドレスを仕立てるためにきたドリーちゃんに相談してみたのだ。

キラメルやマリアは気心を知れる仲だけど、あいまいなことしか言ってくれないから。

「そういう風に考えるのも、思春期特有。普通ですわん」

適当じゃない返事をくれるのに、仕事の手を休めないドリーちゃんは本当にすごいと思う。

プロ意識

問題なのは、本人が着る服の趣味と言葉づかい。と巷の噂。

うちはその性格も派手な服も結構好きだけどなあ。

あ、もちろん着るわけじゃなくて。

ドリーちゃんのすごいところは嫌いな人には作らない。

どんなに陰でささやかれても自分の信念を変えないところだと思う。

「やっぱり恋ってしょっぱいね」

「そこは普通じゃないかもですねん。甘酸っぱいとかじゃなく？」

うちはちよつとだけ考えて首をひねった。

「しょっぱい」

「貴方の恋はスポ根ものの恋愛？」

声がちょっと飽きているような感じだけど、実際そうなんだもん。でもスポーツなんかしてないから違うのかなあ。

出来上がったのか、筆をしまつてまじまじと絵を確認してにんまりと笑った。

「できたわあん」

会心の出来の時は体をくねっとして指をかむ。

ちよつとこのポーズは正直気持ち悪いと思う。

でもこのポーズをとったときはだいたい満足したものが描けた時だから、いいのができたのだらう。

「どれどれ？」

手を伸ばして受け取る。

「おお」

正直ドレスの良し悪しなんてわからないけど、ふわっふわのフレアスカートにフリルたっぷりコルセットうちの嫌いな肩のもこもない手袋が長い淡い赤い色のドレス。

これは見た目がとてもきれいだ。

……うちが着こなせるかどうかは置いておいて。

「……すごいのか？」

「……おお、って言いませんでした？」

ちなみに、マリアとキラメルは隣の部屋に休ませている。

相談聞かれると気恥ずかしいというのと、いまだにドリーちゃんが苦手ということがあるからだ。

「いや、きれいだなって思うけど、うちに似合うかなー」

「似合いますよ。だってこの私がロゼリア様の為に仕立てたんですもの」

不安で聞いてみたら、ドリーちゃんが自信満々な顔で言いきった。

「うん、じゃあこれ！」

「確かに私のデザインは完ぺきとは言え、今回のドレスは、貴方のお披露目も重ねているのですからちゃんと考えてくださいな？」
そう、このドレスはダンス用。

もつと冬が近づいたら、冬の感謝祭だか鎮魂祭だか忘れたけど、とりあえず理由をつけて貴族を王宮に呼んでダンスパーティーが開かれる。

巷も祭りで盛り上がるけど、うちの村だと食卓に飴が一粒出てくる程度の幸せだったなあ。

家族対抗のじゃんけん大会……懐かしい。
じゃなくて。

そのダンスパーティーでうちはやっと他の後宮の女性たちとも顔を合して挨拶をする。

正直なんか見かけたことはあったけれど、話したりしたことはなかった。

本来は入内あたりで挨拶するものらしいけど、まだいろいろ未熟だからと隠されていた。

らしい。

本来ならまだ年齢的に早いけど、正妃候補として皆に存在をアピールしておくのは大切だ。と先生が言っていたような気がする。

「考えたってわからないもん。でもこれは素敵だから着てみたい。それじゃだめ？」

今は目下ダンスの練習中。

スカートの丈でよく引っかかっていたのだけれどドリーちゃんがその辺のことを配慮してくれたのかこのドレスは前側が若干短めにできている。

「それは素敵な言葉ですけれども」

ドリーちゃんは化粧で真っ青な目を細めて少し嬉しそうに微笑んで、すぐに少し困ったような顔になった。

「一応、身分が高い方としてそれ相応の服装を意識しなくてはなりません。それを今のうちに少しでも意識づけしておくべきかと」

「うー」

うちはとりあえずスケッチブックを返して唸った。

その、身分相応の服装がわからないから困っているというのもある。

もともと、服なんて言えないほどの服を数着持っていただけの田舎時代。

服は暖をとるためだけのものという先入観がなかなか抜けないこともある。

「……ドリーちゃんは、うちに身分相応じゃないものを着させるの？」

「まさか」

「じゃあ、大丈夫。うち、ドリーちゃんが作る服が大好きだもん！^{ドレス}ドレスのことがわからないって言うのもあるけど、本当にドリーちゃんのドレスのデザインが好きだから、自信を持っていた。

「貴方って人はもう……」

ドリーちゃんは少しあきれながらも嬉しいのかうちの頭を撫でてくれた。

ドリーちゃんの手は、結構分厚い。

「……綺麗に着飾ったらね」

「はい？」

うちが少しうつむいて呟いたことばに、ドリーちゃんは小さく笑った。

——綺麗に着飾ったら、バルくん少しはドキドキしてくれるかな？

「もちろん、その為の私たちでもあるんですから」^{ドレス}

ドリーちゃんが自信満々に言うものだから、うちも少し笑った。

「あら？もうこんな時刻？申し訳ありません口ゼリアさま？そろそろ」

「うん、今日も御苦労さま——マリア！」

名前を呼ぶと隣の部屋から出てきたマリアがドリーちゃんの荷物を持ち、扉を開ける。

「明後日に見本の布を持ってきますね」

「わかった、よろしくね」

頭を下げて出ていくドリーちゃんとマリアを見送って、目を閉じていてもどこに何が分かるか分かるほど慣れてしまった部屋に戻る。

それからキャラメルにお茶を入れてもらえるように頼んで、ベットに寝そべる。

ふかふかのベットに温かい部屋。

バルくんからもらった人形をぎゅっと抱きしめてキャラメルがお茶を入れてくれるのを待った。

もうすっかり匂いはうちの匂いしか残っていない。

ちよっとさみしい。

「あ」

窓からのぞく景色に、雪がひとつ。またひとつと降ってくる。

「また、積もるかなあ？」

そうしたら、また雪合戦……は怒られるな。でも雪だるま作るくらいなら許してくれるかな。

「ロゼリア様、準備が整いましたよ」

「ありがとうございます」

人形を離してベットから降り、ソファに座る。

「ねえーキャラメルってさ」

「はい？」

一人で飲むのもアレなので、向かい側に座るように指示して砂糖を入れる。

じんわりと溶けていく砂糖を見るのはなんだか楽しい。

「何か趣味とかあるの？」

「そうですね……ロゼリア様の成長を日記につけていることでしょうか」

「ふーん」

「つて、あれ？」

「そんなのしてるの!？」

「はい、それはもう日々成長なさるロゼリア様が愛らしくて」

「一つか二つしか変わらないのにそんなに母性愛だしてもいいのかなあ？」

「その日記見せて」

「だめです」

ですよね。笑顔で一刀両断されっちゃった。

「ロゼリア様は、ご趣味はなんですか？」

今度は逆にキャラメルが質問してきた。

「うーん。音楽や運動、裁縫はマナーとしてでしょ。菜園とかは生きるためのアレだしー」

趣味。

どれもやっていて楽しいけど（裁縫は楽しくない）どれも趣味というにはいまいち。

「あ、絵を描くのが好き」

「そうなんですか？はじめて聞きましたわ」

いい感じに冷めたであろうお茶をすする。

「そう、風景画とか書くのがすきだね。地面に書いては見せて自慢して。ほめられて、風に吹かれて消えては泣いてた」

今にして考えると、ものすごく馬鹿な子みたい。

そのたびにねえちゃんが「また描けばいいじゃない、ばかねえ」ってほっぺを引っ張ってきたっけ。

消えたら泣いて、またほめられなくて描いて。

なんとなく思いだしていたらノック音がして、マリアが戻ってきた。

「ただ今戻りました」

「御帰りなさい」

外から戻ってきたから寒そうだ。

「マリアは何か趣味がある？」

隣に座るように手でジェスチャーして、マリアにも温かいお茶を入れるようにキャラメルにお願いをする。

マリアは趣味、と聞いて少し考えたようだけど、なかったのか首をかしげた。

「趣味ですか。そうですね……やはり特にありませんね」

「ふーん」

確かに、あまり趣味がありそうではない。

「そうですね、ロゼリア様お暇ならこの部屋を描かれては如何でし

よう？」

「えーでもしばらく書いてないからなー描けるかなあ」

マリアはブラック派なので砂糖もミルクもなしで一口飲む。

「私、用意してきますね」

キャラメルのは行動は素早く、モノの数分で準備を済ませて戻ってきた。

マリアのお茶もうちのお茶もまだ冷え切らぬ間の早業だ。

「どうぞ」

紙とペン。

ペンを握ると、なんだかドキドキして緊張する。

「えーと、その」

にこにことキャラメルとマリアがうちを見つめる。

よく考えたら、ペンを使ってお絵かきしたことない。

だって紙も結構高いし。落書きするくらいなら壁の隙間風にはるし。紙にインクを付ける。

けれど、腕がなんだか動かない。

「は、恥ずかしいからまたあとで書く」

なんとなく恥ずかしくなつてペンを離してお茶を一気飲みした。

窓の外の雪は、音もなく降り積もり、時間の経過を知らせている。

「冬……まだ続くねー」

「そうですね。まだまだ寒いですね」

部屋の中は暖かく調整されているけれど、やはり外に出たら寒いのだろうな。

雪積もってるし。

父ちゃんたち凍死とかしてないよねー。

「春……待ち遠しいねえ」

窓の外を見つめながらつぶやいた。

冬は嫌いじゃないけれど苦手だ。

どうしても寂しい気持ちで連想してしまう。

「そうですね。春になったらお庭のお花がまたきれいに咲くことでしょうね」

キャラメルも窓の外を見ながらそうほほ笑んだ。

春がきたら、何をしよう。ここでは何ができるのかな。

田舎だったら魚捕まえたり、山菜とったり土の中の虫をとったりして食べてたっけ。

夜寝るにはまだ寒くて難儀したけど、春は大好き。

「本当、春、早く来ないかなー」

同じくらいバル君こないかなーなんて思いながらあくびが出た。

09 ロゼリアと思春期（後書き）

思春期ってこんなのだよね？

と少し不安に思う（仮）です。

こんな甘酸っぱい時を過ごしてみたいものですね

10 ロゼリアの社交界デビュー（前書き）

ロゼリアは12歳です。

10 ロゼリアの社交界デビュー

「さあ、綺麗にできましたわ」
きゅつと絞られたコルセット。

大きな鏡の前に映るのは、フリルがまんべんなくつけられた赤いドレスを着た自分の姿。

履きなれていない、かかとの高いブーツ。

持ち上げられた髪とちらちらした重い髪飾りで体の重心がふらふらする。

締め付けられたコルセットが気合いを入れろといわんばかりに背筋を伸ばさせられる。

「素敵ですわ」

そう、うつとりしたようにキャラメルが呟いた。

「ふあー」

いつもと違う、うつすらと化粧が施された自分の顔を見て、ロゼリアは――女って、化けるんだな――と他人事のように考えていた。化粧の威力ってすごい。

今の自分はそう、ロゼリアというよりも、ウェルセント夫人のほうが似ている。

ん？つまりお母様は化粧美人？

とりあえず、いつもの3割増くらいロゼリアは美少女と変貌したのだ。

「ドリトル様はよい仕事をなさってくれましたね。とってもお似合いですわ、ロゼリア様」

いつもならドレスに着せられている、という感じをどうしても匂わすロゼリアでもこの赤いドレスは不思議と着ているのだ。

おかしい言い回しだが。

12歳の娘がこんなに着飾っても逆に子供じみているじゃないかと思われるか心配していたマリアも、これならとうなずいた。

本当に似合っていたし、今なら13でも14でも見れるからだ。

少し低めの身長も踵が上がり、靴そこが分厚いブーツのお陰でなんとかなっているし、スカートはフリルたっぷり、トップはシンプルにセクシーに。と甘さも加減し、ロゼリアの子どもらしい雰囲気もあいまってどこか背徳的な美しさを感じる。

ロリコンとかその辺大好きのおじさまたちがみたら思わず抱きつくかもしれない。

さすが、国で一番のデザイナーが特別にデザインしたものだ。

「ほめてくれてありがとう、でもね、重くてちゃんと踊れるかなり心配なんだけど」

そりゃあ、見た目もだいぶ心配だったが、踊りだってまだまだ心配の領域をえない出来なのだ。

もともと運動神経はいいほうのロゼリアだが、お上品な踊りのセンスはないらしくなかなか覚えられない。

というか、もつとこうポップ的に動かしたくなるのだ。

ゆったりとした曲に合わせた踊りも、楽しくないわけではないけれど性格的にあわない。

——こんにちは。

「だれだろ？」

扉がノックされたので、マリアが扉を開く。

ノックの主は挨拶もせず、扉が開くと同時にロゼリアに抱きついた。

「ロゼリー！久し振りだなあ！」

「うあー！！」

ドレスが崩れない程度にだが、しっかりと抱きついている。

いつもとは違うタキシードという盛装。

オシャレにシルクハットまでかぶって杖も持っている。

街に歩けば淑女たちは思わずそのひとをきにしてささやくかもしれない。

ただし、行動は淑女たちが好きそうとは言いがたいけれど。

「えーと」

誰だっけ。見たことはあるんだよね。声も聞いたことがあるし。

…… あ！ああ、そうだそうだ。エドリックだ。

「エドリック久しぶり！」

よって手をあげたらちよっと切なげに見つめられた。

心なしか涙目ですらもある。

あれ？名前間違えた。

彼は確かにロゼリアの生家、ウエルセント公爵家の嫡子、エドリック・ウエルセントだが、彼が気にしているのはそんなことではなかった。

「少し離れたら…… もうお兄ちゃんって呼んでくれないの？」

マリアとキヤラメルは同時に思った。

面倒くさい人だな。と。

「しかも、よつだなんて…… 可愛いけれど男の子みたいだよ、ロゼリー」

「めんどくさい人だな」

ロゼリアは思いっきり口に出した。

もちろんエドリックはショックを受けた表情になった。

「うう。せつかく3人兄妹の真ん中に生まれたのに兄弟の絡みが一切ない一人っ子のような暮らしなんて切ないじゃないかー！」

ごめん、うちは姉ちゃんと一緒に楽しく暮らしてた。

そういえば、お母様がそんなかんじのこと言ってたなあ。

なんだか憐れになってきたロゼリアは「お兄ちゃん」と呼んであげた。

「ロゼ…… できれば、お兄様のほうがいいな」

「…… お兄様」

心の中でめんどくさい。と思ったけど今度は口にしなかった。

お兄様、と呼んだとたんに打って変って明るくなった…… 行く前から疲れちゃった。

「で、何しに来たの？」

「あれ？聞いてないかい？後宮からいつてもいいけどまだ入っていないってことになっているから本来の方式に則ってウェルセント公爵令嬢として表から入るんだよ。そのお迎え」

あー先生がそんなこと言っていた気がしなくもない。

「……」

頭を絞ってみたけれど、うん、覚えてないや。

「じゃあ、行こうかお嬢様^{レディ}？」

手を差し出されたので習ったとおり^{レディ}に手を置いて微笑んだ。

「ありがとう」

きらびやかなシャンデリア、豪華で美しい調度品。

色とりどりのドレスを身にまとい、自らの美しさを誇示する人々《レディ》。

宝石の色のワインが、あっちに行ったりこっちに行ったり。

優美な音楽とともに揺れている。

一流が惜しげもなく詰め込まれた空間。

「うわぁ」

ロゼリアは誰にも聞かれない程度の小声で驚いた。

王宮で半年以上も暮らしてきたが、あくまで後宮の庭と自室くらいしか動いていなかった。

だから、こんなに広くて豪華絢爛な部屋があったことに思わず感嘆の声が漏れた。

さすが王宮、あなどれないな！

うん、やっぱり王宮はすごいんだなあ。

「こっちだよ」

兄さん……兄様がとことこうちを連れまわしては、いろんな人に

挨拶をして、うちは愛想を振りまく。

「これはこれは、このように愛らしい方を隠しておくだなんて、ウエルセント侯爵も人が悪いですなあ」

「申し訳ありません、やっと生まれた一人娘に父も母も宝のように包んでいたものでしたから」

こんな感じでエンドレス。

宝のように包まれていたところか野に放たれて平民の暮らしを謳歌していたけれどね。

初めてダンスパーティーなんてハイカラなものするけど、ちっとも踊ってないじゃん。

挨拶めぐりに愛想振りまき。

たまに相手の女性に睨まれるし。

ロゼリアはうんざりしてきたけど、それを笑顔でごまかし……ているつもりだったけど、顔がふてくされているとエドに注意された。

「だって」

「我慢する。これも重要なことだ。ロゼが王妃になった時に味方になってくれる貴族が多い方がいいんだから」

勢力図ですね、わかります。

といってみたところで顔も筋肉プルプルしていたので休憩を挟んでくれることに。

休憩するところもちゃんとあって、そこでお上品に待っているように、といってエドはまたあいさつ回りに歩いていった。

エドの姿が消えたところに、数分もたたないうちに知らない男性が寄ってきた。

「可愛らしいお嬢さん、飲み物はいかが？」

服装からして、貴族だろう。

いや、良く考えたらここの空間にいられるのは貴族か王族かよっぽどの金持ちくらいだろう。

貴族だとしても、なんとも頭の軽そうな青年だなあと失礼なことをロゼリアは思いつつにつこり笑って「ありがとう、でも結構ですわ」

と断った。

だって、持つてるそれどう見てもお酒だろうし。

うちはお酒飲んじやだめってマリアたちに言われている。

「お嬢さん、もしよろしければ一緒に一曲踊りませんか？」

飲み物を持つている青年の後ろからまた一人若い男の人が微笑んで手を差し出してきた。

髪の毛がくりんとしててなんだかナルシストっぽい青年だ。

なんでみんな寄ってくるの？なんなの？ロリコンなの？

見た目からして19〜21くらいの男がわさわさとロゼリアを取り囲み。

気がつけば周りに6人程度の人間が取り囲んで、わーわーとなにかを言っている。

「レディ、私の名前は」とか。

「我が候爵家では」とか

「今度ぜひ一緒に乗馬などいかがでしょう」とか。

各自口々に喋るものだから誰が誰でどれが何を言っているのかさっぱりわからない。

ロゼリアはキャラメルが持たせてくれた扇子で顔を隠してうんざりした。

ロゼリアがこれの正しい使い方をしていることを、キャラメル達が見たらきつと驚くだろう。

兄さま早く戻ってこないかなあと思っていると奥から声がした。

「あーあー諸君？ごほんつ。失礼？」

うちの周りにできた人ゴミをかき分けるように兄様が戻ってきた。前へ前へと寄せている男たちの波をぐいっと押し寄せるものだから、何名か顔をしかめた。

だが、だれかが小さくウエルセント公爵と呟いたのに気がついて、みんなお上品に笑い始める。

「これはこれはウエルセント公爵殿。こんな愛らしいお嬢さんを隠していただなんて人が悪いじゃないですか？」

うちを取り囲む人ゴミの中の一人がエドに取り繕うように話しかけるが、エドはうわべだけの愛想の笑顔。

「これはうちの珠玉の娘ですのですね」

とだけ言ってうちの手をとった。

「いこう、ロゼリア。……シュバルツがもうすぐくる」

歩きながらうちの近くで囁く。

「バルくんが!？」

しばらく出会っていなかったもので、つい歓喜の声を上げてしまったが、よく考えればそのために来たのだから当たり前だった。

「陛下とお呼びしなくてはいけない」

少しとがめるような声だったのでロゼリアは少し反省して頷いた。

「いい子だ。挨拶をして、一曲踊るんだ。いいね？」

それこそ、うちが一番楽しみにしていたことだ。

「一番にあいさつできるように気を張るんだよ。身分的に優先されはするけれど、同列の家のものにも年頃の娘を連れてきているものもいる」

いろいろなドレスやタキシードの波をよけて中心部に移動する。

「陛下のご登場です」

誰かがそう叫んで、パーラーと楽器を流す。

談笑していた声が控え目に静まり、皆が真ん中に道を開けて軽く頭を下げる。

いつもの顔ではなく政治用の顔なのか。

おごそかな雰囲気の中現れたバル君の表情は、にこやかにほほ笑んでいるけれど、感情は感じられない。どこか遠い。

でも、いつもよりも派手目の素敵なスーツを着ていてセクシーだ。口々にみんなが挨拶をするために寄っていく。

「さあ、いこう」

うちらもバルくん……陛下に近づく。

「ご機嫌よう、陛下」

他の人もいたけれど、ウェルセント公爵家の力のほうが上なので引

いてくれた。

「ごきげんようウェルセント公爵今回は代理かな？」

「ええ。今回は妹の社交界デビューですので、無理いって父に代わってもらいました」

「ご機嫌麗しゅう、陛下。ロゼリア・ウェルセントですわ」

ブリアン先生に習ったとおりにスカートのすそを掴み、お辞儀をする。

今まで何度も会ったのに、数日一緒にいたというのに改めて初めて出会ったみたいに挨拶するのは何だか変な感じがする。

「……」

陛下の反応はない。

じーっとうちのほうを見て動かない。

「……陛下？」

兄様が控えめに呼びかけると、はっとした。

「失礼。あまりにも愛らしい方だったので」

「ありがとうございます。……できれば陛下、妹と一曲踊ってやってくださいませんか？」

「もちろん、喜んで」

片方の手でドレスのすそをつかみ、もう片方の手を差し出されたバル君の手にかさねる。

ここまではお互い確認済みの行動だったのか、そのまま陛下はうちの手をひいて楽団のほうに手を挙げた。

楽団の指揮者が頷いて指揮棒を振る。

軽快な曲が流れてうちの手をとり、踊りの輪へと誘う。

「まあ、愛らしい」

「あんなレディいらしたかしら？」

踊っていると、口ぐちにうちのことを言っているであろう言葉が聞こえる。

ワン・ツー・ワン・ツー。

習ったことを間違えないように必死に頑張ってステップを踏む。

基本は相手の眼をみて、常に笑顔。

最初のほうがいいかと足ばかり見ていたけれど、ちゃんと顔をあげて彼の眼を見つめる。

——うわ。近い！

今更だけど、その近さに驚く。

いつもよりも身長が伸びる靴をはいているおかげで、バルくんとの顔の距離が近くなっている。

相手の息や匂いがものすごく伝わってきて、なんだかものすごく恥ずかしい。

「ロゼリア、とっても似合っている。愛らしいよ」

「ふーん」

真顔でそんなことを言うものだから、照れていつもの口癖を思わず出してしまった。

それをお世辞ととったと勘違いしたのか、バルくんはうちにさらに顔を近づけて耳元で囁く。

「本当だ……さっきはつい見惚れた」

「……」

バ……バルくんて、バルくんて意外とキザだったんだ。

多分真っ赤になっているであろう顔を俯かせる。

「——バルくんのロリコン」

「今ならロリコンでもいいかもな——ほら、顔をあげて」

バルくんは酔っ払っているんじゃないかと思うくらい、ほいほい甘い言葉をささやいてくる。

好き。

そういう気持ちが胸にいっぱい広がってなんだかとっても頭の芯がジーンとする。

……たまには、こういうのもいいかも。

最近かまってくれない分とっても幸せを感じる。
一曲が終って、他の人たちにも囲まれてすぐにその考えは撤退した
けれど。

10 ロゼリアの社交界デビュー（後書き）

バルくん、意外とたらい…じゃなくてたらしだな。
兄さんはあいからわずのシスコンだな。

ちなみに（仮）もシスコンです。
↑

11 ロゼリアへ包（前書き）

後宮つて来たらやつぱりこれでしょ！

11 ロゼリアへ包

結局、その後再びバルくと踊るところか話すらできなかった。

「それではお先にしつれいいたしますね」

ダンスパーティーも無事に終わり、ロゼリアに群がるロリ……貴族たちに初めてだから疲れたと伝え逃げるように一旦ウエルセント邸へと帰宅。

エド……兄さまは私を馬車に乗せた後、まだ当主代理として残るためにまた城の中へと戻っていった。

ウエルセント邸につくと、お母様が門で待っていてくれた。

「おかえりなさい」

嬉しそうにお母様が抱きしめてくれた。

「た……ただいま？」

どう返したらいいものか少し悩んだものの、おかえりといわれたからただいま、と返した。

「どうだった？デビュウは？緊張した？」

「あ、えーと、緊張したって言うか、面倒だったって言うか」

話をしながらも母さまが家へと招き入れてくれた。

「きつと、今に王室から正式に来るだろうからそれまで実家でゆっくり養生してね」

「はい」

そういえば、その間マリアたちはどうなっているのだろう。

どうやらこちらには付いてきていないようだ。

後宮に残っているのかもしれない。

「綺麗になっちゃって、それに身のこなしにマナーが染みついているわ。やはり王室の教育は一流ね」

「そう？」

マナーがなっていないと言われたことはあるけどしみついた、と言

われたのは初めてだ。

「そうよ」

みんなにもほめられたし、お母様もそういうのなら、うちもやっと成長できたってことかな。嬉しいから、ちょっとだけにやける。

「ご飯か何かいる？」

「ううん、パーティで少し食べたから……もう休みたいな」

「わかったわ」

その日は本当に疲れていたので、もう休ませてもらった。着なれていないコルセットや背の高い靴も脱ぎたかったし。

それからお母様のいうとおり3日後正式に後宮に召し上げられるというかたちで、再び後宮に帰ってきた。

前回と違うのは、部屋がもっと中心部にあるところに代わり、内装ももう少し高級なものになっている。

知らない女官たちも数人ついた。結構きれいな人たちだ。あと、行事として他の後宮の主たちにも挨拶をしてきた。表面上にこやかにしていたとしても心の中ではどう思っている事やら。

だって持っている扇に力が込められていたし服が必要以上に気合い入っているような気がする。

とりあえず、することはすべて終えてまた前のようなただシュバルツを待つだけの日々が続くのか、と思っていたが。

キャラメルとマリアが食事の用意をしているときだった。

「……なんだろう、これ」

ノックの音がしたと思って開けて見ても誰もいない。

足もとに小さな包み紙が置かれているだけだ。

持ち上げてみると、重いような軽いような。

リボンの間にカードが挟まれている、それをひっくり返す。

カードには『ロゼリア・ウェルセント様へ、親愛をこめて』と書か

れていた。

「だれだろ？」

誰からというのが書かれていない。

でも文面的にきつと女性だと思う。どことなくいい香りもするし。とりあえずそれをもって机へと向かう。

「さあ、食事のご用意が整いましたよ、朝食になさいますよう」

キヤラメルが微笑んできてうちがもっている小包に気が付く。

「まあ、ロゼリア様、それをどこで？」

「うん。扉の前にあつたの。ねえ、マリア！これ誰からだと思う？」

キヤラメルはティーカップを片手に持っていたのでマリアに渡す。

マリアは険しい顔つきでそれを受け取り慎重に見てから、それに耳を当てた。

「差出人の名前はありませんが……なにか動く音がしますね。生きものかもしれません」

「ええ！それじゃ大変だ！紙に包まれてちゃ息ができないよ！」

マリアからその包みをもぎ取り、なかを急いで開ける。

「いけません！」

「ロゼリア様、そういうのは開けない方が！」

マリアやキヤラメルが制止するのも気にせず紙を破り捨てると、四角いケースが出てきた。

それを開く。

「きゃあああ！！」

新しくロゼリア付きになった女官が叫んだ。

ケースから出てきたそれらは「ちゅうちゅう」と鳴きながらあちらこちらに逃げていく。

「あ！やば、つかまえないと！」

送られてきたのはネズミ。

「なんで鼠なんかつ！？」

愛らしいネズミではなく、茶色く薄汚いネズミ。

やはり、ねたみからのいじめか、とマリアはため息をついたが。

そんなことも気づかず逃げるネズミを追いかけるロゼリア。

「よし、つかまえたー！」

捕まえて、再びケースに閉じ込める。

「ロゼリア様。手を洗いましょう」

「うん。このネズミなんでもくれたのかなあ？」

田舎っ子のロゼリアにとってこれくらいのネズミはどうってこともないのである。

むしろ、あんまりにも腹が減ったときには捕まえて食べてしまおうかと思っただこともあるくらいである。

「……さあ、《親愛をこめて》ですし、お近づきのしるしでは？」

そんなことより、同じ人間から敵意を感じたことなどないであろう幼い姫のこころを傷つけないため、ロゼリアに助けてもらった二人は真実を伏せることにした。

「鼠好きなのかな？」

やっと朝食にありつけ、箱に入れたネズミをじーっと眺める。

鼻をひくひくさせて、髭もびこびこと揺れている。

せわしく右をいたり左を行ったり。

鼠は何を考えて生きているんだろう。うちと一緒にその日のことを適当に考えているだけだったりして。……真面目に考えていたらどうしよう！

「これどうする？どうする？」

基本ロゼリアの室内にはマリアとキャラメルの二人だけしかいない。他の女官がいて、ロゼリアが田舎育ちという情報が漏れることを防ぐためだ。

きちんとした立ち回りができるようになれば問題ないのだが、いまはまだまだ。

ロゼリアも自分がちゃんと貴族らしい暮らしをしていなかったことがばれるという不都合が起きるのだということを説明されたが、どうしても口が滑ってしまうのだ。

本来ならいいとこ育ちのお嬢様がネズミを見ても驚かず終わるあたりも怪しまれる要因ともならなくもないのだが。

その辺のことも考慮されて二人でいいですよね？とマリアとキャラメルが進言により基本的な御世話話は前と変わらず二人だけで行われている。

気心が知れた二人だけのほうが、ロゼリアとしてもありがたい。

ロゼリアは人見知りする性格ではないけれど、口うるさく言われるのは目に見えているからありがたいとはなくはない。

「捨ててきます」

まあ、飼うわけにもいけないだろうから、そうするしかないよね。

「うん。でも殺しちゃだめだよー」

「はい、わかりました」

マリアが窓辺に置かれていたネズミケースをもって歩いていった。

マリアもキャラメルもそういう出身だからネズミなどどうでもいいのだ。

午後から先生が来るのだ。

ちなみにいろんなお稽古ごとの先生が増えた。

確か今日はエルシナ先生の当番だったはずだ。

あの先生はいつも来るといふ時間よりも数時間早くきてうちと遊んでから授業を開始するのだ。

歯を磨いて身だしなみを再び整えてお勉強の準備をする。

本当はブリアン先生が抜き打ちふうに急にやってくるからいつもきちんとしていないといけないんだけどね。

紙とペンを出してもらって、文字の復習のついでに自分の名前を書いてみる。

《ロゼリア・ウェルセント》

このゼが難しんだな、これが。

自分の字を見て、うなずく。

うん、汚い！

「お上手ですよ」

うちの思っていることが分かったのかマリアがそうフォローしてくれた。

「そうかな？」

自分の字だからかな、だからミミズがいっぱいいるような字に見えるんだね。

……もつと練習しよう。

ついでに空白のところに《バルくん》と書いてみた。

「シュバルツ陛下ですよ」

見ていたのかキャラメルがそうやんわりと注意。

「スバルっ」

「いろいろ間違っていますよ、ロゼリア様」

おう字が悲惨なことに。

「まず、名前の時点で間違ってます」

キャラメル苦笑い。

「あれ？」

しばらくしてノック。

やっぱり先生がいつもよりも数時間早く来たらしい。

「ロゼリアさま、本日は隣国の多少珍しいおもちゃをお持ちいたしました」

「へえーそれはすごいなあ」

どうやら背中についているレバーを下げると手が横に広がる仕掛けらしい。

なにがどうやくにたつのかはわからないけれど、まあおもちゃだからそういうわけのわからないところが面白いんだろうなあ。

遊んで、授業して。

またお天道様が沈んでいく。

「ロゼリアさま。そろそろお休みの時間ですよ」

することがないから、本を読んでいたうちにマリアが声をかけた。

「うん」

本に栞をはさんで閉じる。

基本後宮の一日はこの部屋で過ごして終わる。

この暮らしが不満かと問われれば、もちろん不満だ。それを口にすることはダメだといいい加減理解しているけれど。

まるで籠の中の鳥。これならまだ犬の方が散歩に連れていってもらえるからいいかも……なんて思ってしまう。

働かなくても御飯も食べられてきれいな服も着て居られて温かい環境があるのに、なんと贅沢なつて昔のうちなら言ったかもしれないでもウエルセント家にいったん戻った時に外の景色をみた。

当たり前のことだけれどいろんな人がそれぞれの行動を自由にしていた。

一生懸命仕事している人。

家族で楽しそうに歩いている人。

忙しそうに道を歩いている人。

子どもたちが遊びにいくのか笑顔で走りって行くところ。

いろんな人を見た。

そして、その風景に春まではうちも入っていた。

「明かりを消しますね」

「うん、ありがとう」

布団にくるまって、ぼんやりと暗くなった部屋を見つめる。

仕事らしい仕事もしないで、ただここでこうやって日々を過ごすだけ。

初めの半年はお勉強やらなんやらで覚えなきゃいけないことばかりで、知らないところに来たばかりで寂しくてそこまで思っていなかったけど。

なんとなく余裕が出てきたら、いろいろな考えが頭をよぎる。

うちはこのままでいいのだろうか。

ふかふかのベットにくるまって。

毎日おいしいものを食べて綺麗な服まで用意してくれる。

あったかいお風呂にも入れる。

田舎にいたころには考えられなかったことだ。

ひもじかった、冬も秋も寒かった。

毎日毎日働かなきゃ食べていけなかった。

同じようなぼろの服を着て川で汚れを落とす程度。

本当に今の環境は恵まれているとおもっ

けど。

一度くらい世の中を見てみたい。

この国だけでもいいから、ちゃんと見てみたい。

田舎じゃできなかったこと、ここじゃできないこと。

それをやってみたい。

贅沢だけど。

ここにきてうちは少しわがままになったかもしれない。

ふかふかの布団を首元まで引き上げる。

温かいのに、重いというわけではない、上質なお布団。

体を右にそらしたり左にそらしたりして、ふと口にしてみる。

「家出とか……してみようかなー」

家出。

楽しいかもしれない。

噂になったものを見たり、有名になったものを見たり。

初めてだらけの経験を思う存分にしちゃうんだ！

もちろん、そんなこと本当にしてみたら怒られるだけだろうけど。

いろんな人にも迷惑がかかるけど。

やってみたいな！。

「いろんな経験をしてみたい……な」

田舎のうちは無知だった。いまでも無知に近いかもしれないけれど。

ここで一年程度過ごしたうちは無力だ。

少しはいろんなことをみて

いろんなことを経験して

それで戻ってきてこの国をもっとよくできるような人間になりたい。そうしたら、バルくんももっとうちにかまってくれるかもしれない。

結局は我儘なわけだけど。

「……よおーっし！」

思わず声をあげて腕を伸ばすと「どうかしましたか？」とキャラクターが出てきた。

「あ、えへへ。なんでもないよ」

笑ってごまかしたらキャラクターが近づいてきて頭をなでてくれた。

「眠れないのですか？」

「そういうわけじゃないよ。本当になんでもないよ、気にせず寝て、ね？」

起こしたのは自分なんだけど、寝るように勧める。

「そうですか？もし眠れないようならいつでも声をかけてくださいね」

「うん。ありがとーおやすみ」

「おやすみなさいませ」

やっとキャラクターが部屋に戻ったのを確認して、溜息をこぼす。

「よし」

少しずつその準備でもしていこうとひそかに心に誓った。

なにがいる？

服に、資金に、食べ物に。

服はドレスじゃだめだね。

資金はどうやって集めようかな。

食べ物乾燥物なら持つかなあ。

準備だけなのに、なんだか遠足に行くような気もちになってドキドキしてきた。

窓から見える雪が、どんどん解けていく。

春ももう近いのかもしれない。

……春になったら、うちはもっと成長できるだろうか。

大人になれるだろうか。

それで、バルくんとずっと近くにいられるようになるだろうか。
春が待ち遠しいなあ。

11 ロゼリアへ包（後書き）

思春期ってどっか行きたいとか思いませんでした？

え？（仮）だけ？

それでBIGな人間になりたいとか思ってたませんでした？

え？（仮）だけ？

12 ロゼリアと遭難

春が近いのか、雪がゆつくりと溶けてきている今日この頃。
雪溶けてきているのに風がものすごく冷たい。

現在、ロゼリアたちはウエルセント家の招待で山に行っていた。
山といっても麓の湖が凍って神秘的な模様を出すというのでそれを見に行っていただけだ。

本来なら後宮から出ることも難しいのだが、ロゼリアが未成年ということとウエルセント公爵家は権力が強いことが優遇されたために今回だけ許可が下りた。

こういうときだけ権力万歳。

なんでそんな行動に出たのかというところやらこの景色をウエルセント夫人がたいそう気に入っていて、ぜひロゼリアと見たかったらしい。

見るものみたら、挨拶もそこにさっさと帰らされるという条件なわけだけれど。

「綺麗でしょう」

みている間、お母様はうちの手を握って嬉しそうにその景色を見つめていた。

確かに神秘的で、綺麗な氷だ。

まるで妖精がそこでスケートでもしたのかというくらいさまざまな模様を描いて氷が盛り上がっていた。

太陽の光に反射して、キラキラと、何かがまじっているのかたまにうつすらと淡い色も見える。

一定の時間が来たら、そろそろと言われて帰らされるようになった。

「それじゃあ、またね」

お母様に向けて手をふる。

エドリックはふもとの馬車の所までついてくるらしい。

「綺麗だったね」

頭のなかで景色を反芻させながら、キャラメルに言うと、キャラメルも満足そうにうなづいた。

「ええ、とても。……ロゼリアさま、さむくありませんか？」

「大丈夫だよ」

麓といっても少しは坂道を上ったので、雪で滑らぬように気をつけて歩く。

「足元にご注意くださいね」

「うん。大丈夫」

といつても、田舎ではもつと雪が積もっていたため、中途半端に凍っている雪になれないロゼリアは先ほどから足もとがあやしい。

「本当に大丈夫か？このお兄様がおんぶして……」

とエドが手を差し出そうとしたその時、ロゼリアはちょうど足を滑らせた。

「ふあっ！！」

でも尻もちをつかないように、と踏ん張ったせいで、なんと余計な力が入り滑る。

というか、スケートリンクのようにつるつると坂を滑っていった。

「うわわわあああ！！」

「おお、逆に器用だな、ロゼリア！」

とても笑い事じゃないけれど、思わずエドリックは感嘆の声を上げた。

そのとなりでマリアとキャラメルが焦る。

「ロゼリア様っ！！」

後宮で過ごしている時に、まさか雪山に誘われるとは思っていなかったで、仕方なくそこが平らなブーツをはいてきたせいでとまることなくつるつる滑る。

地味にスピードが出ているのが怖いったら。

こけてしまえばとまるものだが、今更こけるのも難しい。

マリアたちが必死に追いかけてきているけれど、やはりなれない雪

道でなかなか追いつけない。自分たちも同じように滑って転んでしまいう可能性もあるからだ。

「わああああ」

といっても、滑っている当の本人のロゼリアは怖いと思いながらも少し楽しく感じていたりもする。

「た……楽しいかもっ！？ていうか、うち結構うまくない？」

でも、そうともいってられない状態が来た。

曲がり道。

つまり、このまままっすぐ行くと林に突っ込む。

「わわわ、ちょ、ちょつとヤバいかも？」

今更ながらに止めようとつま先に力を入れてみたら、余計に滑るスピードが速くなった気がする。

こういうときってどうするのが正しいのだろうか。

「わーっ！」

「ロゼリア様っ！！」

キャラメル悲鳴が聞こえた、と思ったら足もとの石にがっと思いついてロゼリアは林へと飛んだ。

「ロゼリア！！」

エドの叫び声も聞こえた。

「むふうあっ！」

とんだロゼリアは運がいいことに、木から落ちたのか、他と違ってだいたい雪の量が多い所に墜落していた。幸い、捻挫すらしていないようだ。

ただ、頭から雪をかぶってしまったから溶けたらだいたい濡れてしまいうかもしれない。

早く見つけてもらって着替えないと風邪を引きそうだ。

林と道の間は軽い土地の段差があったのか、結構飛んだなあ、うちなんてロゼリアは気楽に思っていた。

ここだけ雪がたくさん積もっていて、なおかつ新雪のように柔らか

くて助かった。

凍っていたら、捻挫どころじゃ済まなかったかもしれない。

段差は、ロゼリアの身長のうちうど二倍くらいの高さで、気づいてもらえばマリアたちが来ればすぐに助けてもらえそうだ。

「ロゼリア様ー！」

上から、キヤラメル達の声がする。

「こっちだよー！」

叫んでみたものの届いたかどうか。

見つけてもらいやすいように、段差の蔭から離れる。

オーライオーライ。

「んぎっ」

と、何か踏んだ。

「おお」

動物かな？と思って急いで下を見ると、それは人間だった。

こけたのか、頭が雪で真っ白になっている。頭の中が真っ白、ってことじゃないよ。

そして、先ほど遠慮なくロゼリアが踏んだせいで背中に足跡も付いている。

おおゝなんか、ごめんねえ。

「ふあっは！し、死ぬところだった！」

謝ろうと思っていたらちようどばっさーっと起き上がったこの人間さんは、どうやら若い男らしく癖つけの赤毛のロン毛、灰色と黒のオッドアイの持ち主だった。

「うわあ、微妙に左右の眼の色違う！」

「初めて人間に会った感想がそれか、微妙にって言うな、立派なオツドアイだ！」

「マツドアイ？」

「微妙に違う！！」

体中についた雪を払いつつ、青年はロゼリアを改めて見た。肩に動物の毛皮がついたローブ、何かで染色した派手な色のシャツ

ちやらちやらとしたものがたくさんついている腰巻。

独りで雪山に居るというのに食料も何も持っていない。

ロゼリアは彼を見てすぐにおもった。

「ばかなの？」

「違うわぼけえ！！」

「いったー！！」

ぱっこんっ！と頭を叩かれる。容赦がなかったので、かなり痛かった。バルくんも叩くけど、こんなにいたくはないもん！

「女の子の頭叩くとかひどくない！？」

「お前がこの俺にむかって失礼なことをいうからだ！むしろ教育してもらったと思って感謝しろ」

「しないよ！」

だつて普通に馬鹿だと思うじゃない。

今も思ってるけど、バカつて思うよりも最低だと思うよ！

「というか、初めて会う人間にはまず名前をきかんのかここはっ！」

「そういう自分はとうなんだー」

ぷりぷりとロン毛は怒るのでうちもぷりぷりと怒りながら言い返した。

「なんで俺が先に言わないいけないんだ！お前が言え！」

「どっちからでもいいじゃん。思いついた方からいいなよあ」

「どっちからでもいいならお前から言え」

「なんなんだ、この人はー」

確実にロゼリアよりも年上であろうこの人物はびしょびしょのローブを深くかぶってくしゃみを連発する。

なんという俺様本質な人なんだろう。

「こんなところで何してたの？」

当初から気になっていたところを聞くと、少し目をそらしながら男は言った。

「迷子」

やっぱり馬鹿じゃん。

あ、人のこと言えない状況だった。

もしかしてこの人も同じように滑ってきたのかもしれない。

「楽しかった？」

「んなわけあるかつ！」

なんとも会話が成り立たない。

「迷子で遭難してたんだ」

ということとはうちみたいに滑ってきたわけじゃないんだ。

雪山といってもこんな浅いところで遭難するなんてやっぱり馬鹿なの？といったかったが、またはたかれたらいやだし、自分も似たようなものだしなあとおもって今回は「ふーん」と流した。

「こんなところで寝てたら死ぬよ？」

「わかつとるわ！」

「じゃあ、何で寝てたの」

寝てたというか、埋まっていたというか。

「あ……そうそう、腹が減って力尽きてたんだ……お前、何か持っていないか？」

急に思い出したかのようにまた、その場にへたり込む。

「持つてるよ！ほれ」

ポケットから取り出したのは、紙に包まれたパンが一つ。

ランチの余りで、下の広場にでもいる野鳥にあげようともっていたのだ。

滑ったせいでマルかったのが楕円になっている。

「形が残念なことになってるけどね」

「それくれ」

青年は気にせず手を出す。

「これをあげたら、代わりになにをくれる？」

ロゼリアはパンをいったん自分に引き寄せ、ねだるように見つめる。

「お前、意地悪いなー。こんだけ死にそんな人間見てそれをいうか？」

「死にそんな人間はこんだけ饒舌にしゃべらないよ。ねえ、なにし

てくれる？」

「見ての通りなんも持っていないだが、このロープ取ったら俺は凍え死に確定だ……いまのままでも十分死にそうだけだな！みる、この鳥肌」

腕をむき出すけど、別にみる気ないよ。興味ないし、寒いのは同じだし。

「そんな反動物愛精神のロープなんていらないよ、何より臭そうだし趣味悪い」

「お前は鬼か！」

青年のお腹がちょうどぐきゅうるー！となる。

「頼む……マジでください」

「いいよ、はい」

遊ぶだけ遊んだし、彼にパンを渡す。

「ロゼリア様！！」

下のほうから声が聞こえる。

下のほうから回って助けに来てくれたのかもしれない。

彼らがいるであろう方向に向かって大声を出した。

「ここだよー！」

「なあ、お前、結局なにが欲しかったんだ？」

目の前の青年は渡したパンをすでに口に放り込んだまま首をかしげた。

「気にしてたの？半分冗談だったし、もらわなくても気にしないくらいだよ」

「あげるあげないはこの際関係ない、ただの興味半分だ」

興味半分ねえ。大したことはないんだけどな。

まあ、隠すことでもないから素直に言う。

「んーなんでもいいから話を聞きたかった……かな。いろんな祭りの話とかね」

「ふーん、ならとっておきがあるぞ、俺はなんていったって今は旅人だからな」

なぜか自慢げに胸を張る。

「ああ、それで死にかけていたんだ」

なんとなく納得してうなづく。

やっぱりこの人あほだね。

「ロゼリアー！」

エドの声も近くなる。

「あ！こっちこっちー！！」

もう一度大声で呼ぶ。と、横から服の裾をちょいちょいと引っ張られた。

「なに？」

「ごちそうさん。んじゃ、俺はもう行くから」

「あれ？一緒に保護されないの？てつきり一緒に来るものだと思ってた」

図々しく、一緒に助ける、風呂だせ飯をだせていいそうなものだとおもったんだけどな。

男はにやりと口元を歪めて笑った。

「んーいろいろあるってことさ」

「ふーん。じゃあこれもあげる」

少し雪で湿っているが、肩かけを彼の方にかけてあげる。

「え？」

「さむいでしょ？これも湿ってるけどあげる」

男はちよつと肩かけとうちを見比べた。

「……あんがとな、それじゃ、俺本格的にそろそろ行くわ」

淡いピンクの肩かけを首に巻いて彼は走っていった。

「じゃあな、ロゼリアー！」

青年は木の影に木の影にと死角向かっていったので、すぐに姿は消えてしまった。

あんな少しのパンであそこまで動けるなら別にパン食べなくても大丈夫だったんじゃないかな。

それにしても、せっかく肩にかけてやったのに、首に巻きなおすっ

てどういうこと！。

「ロゼリア！」

ちょうど入れ違いのようにエドが走り込んできた。

「今の男はなんだ！？ひどいことされていないか？それよりも、怪我は？さむくないか？」

「大丈夫だよ」

頭の雪を払って落としたり、自分の上着をうちにかぶせてくれた。

「ロゼリアさま、申し訳ありません」

「キャラメルが謝ることじゃないよー」

走ってきたのか、色白の肌が桃色に染まっている。

「うちこそごめんね、もう少し注意して歩くべきだった」

「いいえ、私たちが至らなかったせいですわ……ご無事で何よりです」

「風邪をひく前に帰ろう」

エドリックが心配そうにいうので、みんな賛成して急いで森の出口へ向かった。

うちもじわじわと冷たさに体温を奪われていたので早く暖を取りたかった。

森から出る途中でまた雪の深い所に落ちて全身雪だらけになってしまったので、しばらくユキは見たくない。と心底思った。

そんなこんなでやっと屋敷に戻り。

すぐにぬるめのお湯で体を温めてあったかい恰好に着替えられました。

上下白くて厚みのある布の服だからぱつと見ると白いクマに見えなくもない。

「楽しかったね」

うちは満足した声で笑う。

「ええ、とても綺麗でしたね」

温かい紅茶を淹れながら、キャラメルは微笑む。

「でも、もうあんな危険なことはないように気を付けてくださいね。私たちももう少し注意しますから」

「はい。本当に心配させてごめんね」

確かに、あの滑りはスリリングで楽しかったといえば楽しかった。けれどうちが楽しかったって言っているのはもちろんあの青年のことで……。

あ！

「……名前結局聞いてない！」

彼はうちの名前を知ったのだから、ある意味うちの負け？ いや、勝ち負けじゃないけど。

パンあげる代わりになにか面白い話でも思っていたのに聞く前に逃走していったし。

いや、いらなはいったけど。

「……ぬー」

なんだか損した気分でロゼリアはキャラメルが淹れてくれた砂糖たっぷりの紅茶に口をつけた。

「おいしい」

ま、楽しかったからいいか。

また会えたらいいなあ。

12 ロゼリアと遭難（後書き）

雪山で遊びたいな！。

スケートしてみたい。

高所恐怖症だからロフト？のれないかもしれないけど

13 ロゼリアへ反省文？（前書き）

冬から春へと数か月たってますのでご注意ください
ちよつとドロ？多分ちがう

13 ロゼリアへ反省文？

雪はもうすっかりその姿もなく、風にその余韻を残しつつも春が来た。

日差しはすっかり春特有の心地よさを帯びており、その日差しをうけたお布団で眠るのはとても気持ち良かった。

「……おい」

「……ん」

誰かの声が聞こえたのでうつすらと瞼を開ける。

「誰……？」

正確には今がいつなのかはわからないけどきつと朝にはだいぶ早く、夜にはだいぶ遅い。

こんな時間に誰かが来て、誰が起こすというのだろう。

マリアやキャラメルわけがないし、その他にうちを訪ねてくる人、事体ほとんどいない。

……ということは、導き出される答えは、空耳。

「……んう」

春はあけぼの。

眠たいのは眠たいの。それに時間も時間だしね。

とりあえず布団の魔力には勝てずそのまま意識を夢に託そうとしていたら、再び声が聞こえた。

今度は、すこし大きめで、しかもうちの体までゆすってくる。

「おきろ、ロゼリア！」

「ううー」

いい加減しつこいので目をつつすらと開けてみるも、誰かがそこに居るのは分かるけど暗くて誰だかわからない。

「なにお？」

「起きろ」

だんだんとはつきりしてくる意識の中で、ようやく声の主を思い出す。

「え？ええ？バルくん？！」

「しっ！声がでかい！」

口を押さえられ、瞬きを繰り返す。

急に血が巡り始めたみたいにドクドク心臓が波打っている。

目の前に居るのは、最近ずーっとともに相手してくれなかったバルくん、その人なのだ。

何故こんな時間に、こそこそとやってきているのだろうか。

服装は普段着のようでラフだから、仕事はもちろん終わっているのだろう。

いや、それにしたってこんな時間に来るだなんて……やっぱり夢？
「んんん？」

手をぺちぺちと叩くと、やっと手を離してくれた。

それから、自分のほっぺをつまむ。

「？」

「……いたい」

ほっぺを引っ張ってみると痛いから、夢じゃない！！

「なにしているんだ？」

「いや、夢かどうか確認……それよりどうしたの？こんな時間に」
明かりもつけずに。

ランプは何故か持っているけれど。……何故ランプ。

「いいから、ついてこい」

ううむ、久しぶりの登場のくせに生意気な。

「うんっ！」

でも久しぶりに会えたのはうれしいので、夜服の上に着れる上着を羽織ってついて行く。

春が来たといってもまだ夜は寒いし、風はつめたい。

何故か庭にでて、中庭にある椅子に座る。

途中警備の人と目があつたが、相手がバルくんだとわかると頭を下

げる。

こんな寒い中で警備のひとつで大変だなあ。

「ねえねえ、どうしたの？急に」

やっと落ち着いたらしいバルクんの肩にもたれながら聞いてみる。
へへ。あつたかいや。

バルクンは少し照れた様子で小声で答えた。

「……ほら、最近、あつてなかったからな」

「そうだね、あのダンスパーティー以来まともにしゃべってないもんね。そのあとの聖夜祭も皇后様の誕生パーティーも豊穰祈願パーティーも年越しの挨拶パーティーも春感謝祭も義務的な会話で終わったもんね」

「っう」

ちよつと反省したように呟くバルクんにたたみかけるように今まで
の主なイベントを掘り返す。

すべてバルクンはその他大勢のようにうちに義務的な会話をした
だけで終わった。

まるでセリフのような、いや、まさに決められたセリフをいうだけ。
親密な会話をするどころか、特別に部屋に来てくれるなんてもちろ
ん一度もなかった。

「……ごめんな」

「……むーうー」

バルクンが忙しいのもわかってる。

他の女性のところに通わなきゃいけないのも授業で習った。

はじめ習った時はいやでいやで、切なくて。でも、我慢しなくちゃ
いけないことなんだって理解したつもりだった。

だけど、だけどやつぱり胸になんだかもやもやができる。

こんなこと愚痴愚痴というの自分が嫌になる。

「……別にいいんだよ。仕方ないことだもんね」

そうやって割り切る自分も嫌。

本当は、忙しくて週に一度くらい顔を見せて、ほかの人と必要以

上に接しないでって言いたい。でも言いたくない。

バルくんにとってうちはその他大勢の女性なの？

ウエルセント公爵家の力を大事にしたいだけ？

もつと会いたい、一緒に居たいと思うのは我儘なの？

喉からいつも飛び出そうになるこの言葉。

そんなこと、言わないから。

だから

「うちのことは忘れないで」

「ロゼリア」

「それだけでいいからね」

ここにきて、一番に習った「笑顔」を作る。

「今みたいにたまにでもいいから思い出してくれて、それで「ロゼリア」って名前を呼んでふらつと顔見せてくれてほしい」

「ロゼリア」

「バルくんだって国を背負っていて、大変なんだもんね」

バルくんは目を驚いたように目を見開いて、ほつとした表情になった。

肩に自分の服をかぶせてくれる。

「ありがとう」

「バル君」

という彼の顔をじつと見つめて、うちはその顔を両手で叩き込んだ。ぱちーんっ！と清々しい音が響く。

「って言う訳ないじゃん！！うちは童話の純粋なお姫様じゃないし！」

上着を脱いで叩きつける。

そっちのつごうではのぼのと暮らしていた田舎から連れ出され。

そっちのつごうで後宮に閉じ込められてほとんど放置されて。

それで他の女性のところにはたまに行っているなんて情報を聞かさ

れて黙って「はいそうですか。王さまですから仕方ないですわねおほほほ」で終わるような人間じゃない。

「っていうか、なんなの？馬鹿なの？ふーんで終わると思ったの？冗談じゃないよ？」

マリアたちが必死に隠しているけれど、そのせいで自分に嫌がらせの贈り物や手紙が届いているのも知っている。

ただしくは、ちゃんと理解した。

「ろ、ロゼリア」

叩かれたせいか、気温の低さのせいか、バルクんのほっぺは赤くなっている。

けど、うちの不満の爆発は止まらなかった。止まるはずがなかった。

「あのな、ロゼ」

「バルクんのドアホ！！！」

うちはいままでの思いを思いつきりつめて、それをぶつけるつもりで叫んで自室へと向かって走った。

この際、なんでこっそり夜中に訪れてきたの？とかそんなことはどうでもよかった。

ただ、あふれてくる涙を止めることに精いっぱいだったから。

「っていう、夢を見た」

うちは布団から半分身を乗り出した状態でキヤラメルに告げるとキヤラメルは苦笑いで答えた。

「いいえ、現実ですよ」

「ですよー」

あのあと、涙流しながら自室に帰って来たうちはキヤラメルとマリアの控え室に特攻し、愚痴をこぼして眠ったんだそう。

どうりで頭が痛いと思った。

あーがんがんする。今鏡見たらひどい顔しているんだろっなあ恐ろしくてとても見る気持ちになれない。

マリアが「どうぞ」と冷たいタオルをくれて目を冷やしてくれる。冷静になって考えると、やっぱりまずい気がする。

「んー。やっぱり、まずいよねー」

「昨日のことですか」

「うん、セーブしたつもりだったけど、叫びまくっちゃったし」

よく考えたらちよつと恥ずかしいかも。

でもすつきりした。

キャラメルはあったかい飲み物を入れ始めた。

「さすがにここはまでは聞こえませんでした、守衛たちが聞いてますからね」

守衛の口の堅さは女官よりは信頼できるけれど、それもいつまで持つ事やら。

とりあえず、先生たちの耳に入れば怒られることはまず間違いだらうな。

守衛さんが女官たちに話してしまえば、確実に先生たちの耳に届く。そう思うとなんだか頭が痛かった。

「キャラメルさん、今日も小包が届いてますよ」

「またですか？捨てておいても構いませんよ」

また、女官が小包を持ってきたがなんだか雰囲気が違う。

最近では小包はほとんどうちに通されることなく処分されるようになってきた。

うちも見ていて気分がいいものじゃないからその配慮はありがたい。でも、差出人の名が一応あります」

でも、その小包はひまな貴族の嫌がらせでもわいるでもないようだ。

「見せてー」

あやしい小包で不快な思いはしたことはあっても怪我したことなんてなかったし、一応見てみることに。

箱の裏にロゼリア様へ、雪山のイケメンよりと書かれている。

「……差出人の名??」

これを判断した女官も結構すごいな。

雪山が姓なのがミドルネームでイケメンが名前かな。んなわけあるか。

とりあえず、誰かは分かった。

それにしたって自分でイケメン宣言はないわー。

「どう思う？」

マリアが確認したところによると消印もなにもないので直に持ってきたんじゃないかと。

……この警備は大丈夫なのだろうか。

「どれどれ？」

中身をみてみると、数枚の写真が入っている。

あの人は写真家だったのかな？

見たことのない花

行ったことない街

面白いアーチ

「わあっ！」

どれも興味深いものばかり。

「すごいすごい！これは綺麗！これは面白い！」

「良かったですね、ロゼリアさま」

あの人もものすごいただのあほの子だと思ってたけれど、実はいい人だったんだな！

でもどうやって持ってきたんだろう？

うーん。

壁の外から投げてきたとか？いや、この軽さじゃ無理か。

だいたいどこにあったんだろう、廊下？うちの部屋の前？

ますます謎だ。

悩んでいたら、一人の従者が近づいてきて頭を下げた。

「ロゼリアさま、シュバルツ陛下からのお手紙が届いてますが」

「陛下から？」

女官が控えめにやってきてうちに手紙を渡す。

「……ありがとう」

他の人には下がるように指示してから封筒に目を落とした。
シンプルな封筒に、ロゼリアへと書かれている。

これでウェルセント家の名前なんて書いてたら破り捨てるところだったよ？

忙しい中、一生懸命家のことを思っていて書いてくれたのだろう。
内容は今までの謝罪と、昨日の謝罪。

田舎からここへ無理に連れてきてしまったことへの謝罪など。

最後は今日から遠征の仕事で直に謝罪にこれなくて申し訳ないというここと。

謝罪ばかりで本当にうちに申し訳ないと思ってくれていたみたいだ。

……うちも少し言い過ぎたかな。

なんだか申し訳ない気がする。

昨日呼び出したもの、その話をするつもりだったらしく。

うちが先に切りだして、ちよつともわかりのいいこと言った瞬間
ほつとしたところもあったってところまでわざわざ謝罪している。

うーん、バルくんって結構自覚してるんだな！。

これからも会うのは難しいって。

他の人のところに行くのも政治的理由上やめられないって。

そこまでわざわざ書いているからなんだかへこんできたよ？

「でも、まあ、許してあげるべきかなー」

ここまで反省文のような手紙を送ってきたのでさすがにかわいそうな気もするし。

……次会いに来た時の判断次第にしようと思う。

「ん、よっし」

一応この問題は保留ってことで。

「キャラメルー手紙の返事書くから用意してー」

「かしこまりました」

手紙の中にロゼリアという名前がたくさんあるからって理由でご機嫌に戻るの、すこし単純すぎるかな？

《でも、ロゼリアのことは絶対忘れないから》

この一文がかなり大きな決め手だったかな。我ながら単純だなあ。
「とりあえず、嫌味から始めてやる」

うけとったペンの先を振りまわして微笑む。

仕事先まで届くのかはわからないけど、まあ、書いておいて損はないだろう。

《陛下へ》

やっとまともな字をかけるようになった。

……あ。

「雪山の遭難者のアホの子にはどうしたらいいのかな」

雪山のイケメン宛てで手紙の返事出しても絶対届かないよね。

写真はかなり嬉しいんだけどね！。

返事出せない。困ったな！。

もういつそのこと借りは返してもらったってことでいいのかな？

半分の、しかも形の残念なパンの対価にしてはずいぶん素敵なものをもらってしまった。

「ふむ」

もう一度写真を見返す。

みているだけで、体がうずうずして出かけたくなる。

もちろん、そんなことできるわけがないんだけど。

「返事、できないなあ」

いろんなことを聞きたい。

この写真の観光地のこと、どうやって手紙を置いたのかという謎のこと。

「さすがに、手掛かりがないので無理ですね」

マリアもどこかに住所がないか探していたようだが、やはりないようだ。

「そっかー残念」

文通とかしたかったのにな。

「また、逢いたいなあ」

俺様で口も態度も悪い人だったけど、面白くて律儀な人みたいだ。
あの人なら写真の中に自分のピースサインとか必ず入れそうだったけれど、写真はいたってまともなもので目的のものが真ん中に来るように綺麗に取られている。

これ、きつとあの人がとったやつじゃないな。

「それにしても、この『雪山のイケメン』というかた、本名くらい入れてもいいですね」

キヤラメルが封筒の外側を見ながら言った。

「確かに」

名前がない。うっかりなのか、ミステリアスな自分を演出したいのか。

……彼の場合、後者の方が有力だな。

13 ロゼリアへ反省文？（後書き）

リア充爆発させたい。

ラブラブってむずかしいね！。

次回、急に時間が進みます（多分）注意！

14 ロゼリアもお年頃（前書き）

とつても月日が流れています。ご注意ください

14 ロゼリアもお年頃

春が過ぎ、夏を越え、秋に流れて冬もこす。
春夏秋冬を3度この後宮で過ごしてしまった。

ロゼリア・ウエルセント（15）

とてもお年頃な絶賛ストレスためまくりの田舎育ち（でもあり王宮育ち）な貴族少女である。

「あはは。また来た。もういいよ見なくていいから捨てていてマリ
ア」

後宮での適年齢ともなると、いやがらせが目に見えて増えてきた。
庭などで他の側室たちに会つと、大した容姿でもなくせに！と野
次られる。

そういう自分はどうなの？とつい口を滑らせてしまったものだから
このプレゼントの中身のクオリティがどんどん（悪い意味で）高く
なっている。

それに、自分の利益を得ようといろんなとこの公爵家などの要人た
ちが贈り物やら手紙やらを送ってくるのもとても対応が面倒くさい。
それでも、ロゼリアのストレスの一番の原因はそんなみみちいいじ
めや、明らかに下心まるだしのわるい攻撃ではない。

一番の原因は、彼女をここに連れてきた張本人で、彼女の愛しいあ
の人なのである。

国王シュバルツ

最後に会ったのはいつだったろうか？

そりゃ、季節ごとにあるパーティなどでは顔を合わせて入るが、個
人的に尋ねられたのは三年前にケンカ別れしたあの時が最後だろう。
「ねえねえ、キレてもいいのかなあ？」

笑顔で怒るというスキルも手に入れた。

それをフルに使つと、顔をこわばらわせたキャラメルが、紅茶をもつてきた。

「まあまあ、ロゼリアさま……きつといろいろと忙しいんですよ」
紅茶にミルクを馬鹿みたいに注ぎ込み、雑にスプーンでかき混ぜる。
こぼれたつて気にしない。

思わず顔の笑顔にもすごい力が入る。

「他の側室のところにはいつているのに？いままで子供だしって思つて気にしないようにしてたけど、うちだつてもういい年なんだよ！？」

あ、いや、だからつてそのああいうこととかそういうこととかしてほしいという訳ではなくて、いや、してほしくないわけでもないわけだけど。いや、むしろ……じゃなくて。

3年前にもらつた手紙を開いて読んで、投げ捨てる。

「忘れないよつていつたのに……」

「ロゼリア様」

「結局バルくんはロリコンなの？ロリコンじゃないの？」

「……ロゼリア様」

それはチョイスが違うのでは？

「ねーちゃんは、もう子どもができたつて言つてたのに」

その言葉に、ロゼリアはもう一枚手紙を取り出す。

手紙を送るのだから、そうとうお金がいるはずなのに姉からの手紙は、ロゼリアの心配ばかり綴られていた。

男の子がすすくと成長中。

ねえちゃん似で整つた顔の子らしい。

きつと頭のいいイケメンに育てきつて見せると手紙には熱い熱意文が描かれていた。

「お母様からの報償金？とかでなんとか子育ても順調にいつているつて」

「それはようございました」

「うちのが先に結婚したのになあー」

ていうか、正式に結婚式とかも挙げてないよね。

正妃ってほぼ確定といわれてから、正式に確定しましたって聞いてないんだけどどうなってるの？

「ああ、いまは何を言ってもブルーモードに入ってしまった」

キヤラメルが困ったようにそう呟いた。

うちだって困らせたいわけじゃないし、すきでブルーモードなわけじゃないよー。

「ロゼリアさま、仕立て屋がきましたよ」

マリアが扉を開けると、ドリーちゃんが「はあい」と手を挙げた。

あいからわず趣味がいいとはとてもいえない格好だが、彼：彼女？
が作る服はとてもセンスがいい。

「あれえ？ドリーちゃん、どうしたの？半年前にドレス仕立てたばかりじゃない？」

一応成長期だから1年になんとかドレスを頼んでいるが、記憶によるとついこの間作ってもらったばかりだったはずだ。何か特別な行事でも控えていただろうか？

すると、ドリーちゃんはいやにうれしそうににやにやした。

「んふふ。今回はね、陛下からのご注文で、貴女にこれを届けに来たのよん」

ぱっちゃん。

と指を鳴らすと、後ろからちびの子が二人、トランクケースを運んでくる。

2年前にドリーちゃんに弟子入りしたベルナ（9）とシユクー（9）だ。

二人は双子なのでとっても容姿がそっくりだ。二人がぐるぐる回ってどっちだ？なんて聞かれても答えられる自信はない。いまでもどっちがどっちかよくわからない。

「はい、先生」

そのどちらか——多分、ベルナがきはきと返事をした。

ベルナがそつと一枚の服をドリーちゃんに差し出すと、満足そうに

ドリーちゃんがそれを広げた。

「じゃーん。これよ」

ちよっと薄めの生地で、とっても軽そうなワンピース？

胸元が大胆に開けられており、紐をほどけばウエストがとっても楽そうだ。

というか、脱がしやすそう。夏とか涼しくていいかもしれない。

「新しいパジャマ？」

ちゅちゅと指を振ってドリーちゃんの眼が光った。

「これはね、勝負服よん！」

「勝負服？」

なんとなくキャラメルのほうを振り向くと、少し頬が赤く、うつむいている。

マリアのほうを見ると、すでに自室へと引っ込んでいる。

「つまり？」

「つまり、陛下とHするときに、そういうムードを盛り上げるための服よん」

「えええー!!」

勢いよくドリーちゃんに近づいて、思わずその服を握りしめる。

「まじですか？」

「まじよ、マジ」

何がどうマジなのかわからないけれどうちのボルテージは今のところ無駄にマックス。

「ヤル気満々です」

「しー怒られるよ」

なんだか下の方でちびっこが何か言っただけど、気にしない。

「確かに！勝負服だね！ドリーちゃん！」

「あなた意外とそういう耐性ついてるのね、ちよっとつまらないわでもいいわ！そう！勝負服なのよ！」

「そついうのを、あまり大きい声で叫ばない方が……」

キャラメルがそう止めるので、ちよっと恥ずかしくなってテンシヨ

ンを落ち着かせる。

というか、二人して席に着く。

「後これね、ブラジャー。また大きくなってきたんですって?」

「ありがとー成長期ってすごいよねえ」

これはウエルセント家の遺伝なのか、食生活改善のおかげなのか、ロゼリア、すすくといろいろ成長中です

「ベルナも大きくなるでしょうか」

「シユクーは無理だと思うのです」

可愛い双子ちゃんは二人で殴り合いを始めたが、それをするーしてドリーちゃんをお茶を楽しむ。

……なんか、ミルク多くない?

「でもね、ドリーちゃん。せつかくの勝負服なんだけど、使い道がないよ」

冷静になつて考えてみたら、着たところを見てもらわないことには全く意味をなさない。ただなんか薄いだけのパジャマ。

「バルくん……陛下が来てくれないとねー」

ミルク多めの紅茶に口をつける。

「あらん?それじゃ何のために陛下が注文なさったと思っているの?」

「でもねー」

そりゃそうだけど、事実部屋に来てくれないのだから仕方がない。

キャラメルがドリーちゃん専用の紅茶と、ちびつこたちの紅茶を用意してきた。

ドリーちゃんの紅茶には、まいかい何かの花が刺さっている。

それで味が変わるとは思えないが、ドリーちゃんはこれがいいらしい。

飲み物にもオシャレを追及するのよ!だそうだ。

今回は真っ赤なお花で、ドリーちゃんのアイシャドーのいろとお揃いだった。

「ロゼリア様も入れ直しますか?」

「んん、いい。もったいないから飲む」

しばらく、まったくしてしていると、マリアがちょっと急いで帰ってきた。

「というか、自室にこもっていると思ったら、表にでていたのか。」

「談話中失礼します。ロゼリア様、明日陛下がこちらの部屋においてになるそうです」

「えー!!」

明日、バル君が、こちらの部屋……ここに、おいでになるって!!? がたんつ。

うちは椅子を倒す勢いで立ち上がる。

そんな、明日だなんて……!!

嬉しい!! いや、困る! あ、でも勝負服さっそく使える……あ! やっぱり困る!

「うち、最近太り気味だったのに! ちょ、ちょっとドリーちゃん! ごめん! ちよつと走ってくる!」

ウエスト、ウエストがやばいのです。

「やるき満々です」

「気合い十分です」

「頑張るのです!」

双子ちゃんに合わせて気合いを入れ直す。

「「頑張ってくださいましー」」

双子ちゃんに見送られ、私は庭へと走っていった。

「ちよつ! ロゼリア様! ?……申し訳ありません、本日はこれでお引き取り下さいますでしょうか」

キャラメルは一瞬すぐに追いかけてようとして、お客がいることを思い出しその場に踏みとどまりきちんと礼をした。

もちろん、乙女心も男心も理解できる、おしゃれなドリーちゃんはロゼリアの行動も大まかに理解しているので快くうなづいた。

「ええ、いいわよん。もともと服を届けに来ただけですもの。むしろ長居して申し訳なかったわ。ベル。シュ。片付けなさい」

「はい」

双子は全く同じタイミングで元気よく返事してから、命令どおり片づけをはじめた。

「私も、早くこれを片付けてロゼリアさまを追いかけては」
キラメルはロゼリアの勝負服をつかんで……少し考えた。

「これ、本当に薄い……」

一方ロゼリアは、本当に庭を走っていた。

頭のなかは明日会えるうれしい↑でもウエストやばい↑でも明日会えるの無限ループがぐるぐる。

そんな一日走ったくらいで肉つきが変わるのであれば、全国の乙女の悩みは70%くらい解消されるのではないだろうか。

それでもじつとしてはいられない性格のロゼリアはだんだんばててきた。

「ぜーぜー。いくらなんでもドレスじゃ走りにくい」

それは当然である。

しかしロゼリアはすでに中庭を4周もしたのだからすごいとしか言いようがない。

ドレス、脱いで走っちゃおうかなあ。なんてまた先生に見つかったら怒られそうな計画をしていると、急に名前を呼ばれた。

「あら？ロゼリアさん？」

「ふえ？」

呼び止められて振り向くと、木の木陰でにつこりとほほ笑む女性がいた。

いま、確かにロゼリアさん？とうちの名前を言ったよね。

多分、あの人しか周りにいないからあの人がうちを呼びとめたのだろつ。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

とりあえずあいさつされたから挨拶を返す。

えーとこの人なんて名前だったっけなあ。

「はい。なんでしよう？……ああ、えと。えーと」

「失礼……ロワロ・グーテラスクですわ」

そう、確かそういう名前だった。

向こうが立って挨拶をしようとするので慌てて制する。

「いや、いいですよ。そのままで」

「でも、貴女のほうが身分は上ですのに」

ロワロ・グーテラスク。たしか男爵家の人だったと思う。

金の髪、青い瞳。なかなか幼い顔だが、愛嬌のある顔の女性だ。

美人というよりは、かわいい部類にはいるんだろうな。

どこか懐かしい、どこかで見たような雰囲気、とつても親近感を醸し出す。

歳はたしか18……だったかな。体があまり丈夫でないから、去年ここに入ってきたと聞いた気がする。

正直、あんまり知りたくないからそういう情報は極端に聞かないようにしているためにおぼろげにしか思い出せない。

許可を得て、隣に座る。

「何故、走っていらしたんですか？」

不思議そうにロワロさんが首をかしげるけれど、まさか馬鹿正直に「明日陛下が私の部屋に来るんです。それでウエストが気になるからダイエットをともって走ってましたの」なんて言えるはずがない。

「何故……えーと、必要にかられたからですわ」

嘘ではない程度にごまかしておく。

「まあ、大変ですね」

冗談だと受け取ったのだろう、彼女はくすくすと口に手を当てて小さく笑った。

ああ、思い出した。

ロワロさんは今一番バルくんのお気に入り、という噂だったっけ？
確かに、可愛い顔をしているし、性格も温和、体つきも……よくわ

かないけど、肌もすべすべでさわり心地がよさそうだ。

あまり化粧を望まないあたりがバルくんの好みなんだろうか。

うん、好きそうだなあ。

でもうち正直化粧しないと平凡な顔なんだけど……困ったなあ。

「羨ましいですわ。私、あんなに早く走れませんか」

「え？ ああ、いや。そんなことない……ありませんですよ、ほほ」

淑女たるもの、肅々とした態度であれ。と先生に習ってたんだっただもしまらされていたのが彼女ではなく、他の側室だったら罵倒の嵐だったんだろうな。

彼女といると、なんだか落ち着く。

他の側室たちと違ってこちらに敵意を持っていないし、雰囲気が柔らかい。

バルくんが彼女を選んだのもなんとなくわかる気がする。

……って、いやいや、選んではないけどね！

多分きつとほら、うちを選んでくれるしね！

失礼にならない程度に席をやりわりと立つ。

「私、もう行きますね」

そういつてほほ笑むと、彼女も微笑む。

「御引き留めしてすいませんでした」

「いいえ、またお話ししてくださいね」

軽くお辞儀をして、部屋へと戻る。

戻ると、探していたのかマリアが息を切らして寄ってきて、軽くお説教された。

最近、先生たちに怒られることが減ったのになあ。

「聞いていますか？」

「はい、ごめんなさい」

うーん。まだまだ淑女には遠いなあ。

14 ロゼリアもお年頃（後書き）

ロアロってなんかおいしそうだね。
次回。バルくん登場

15 ロゼリアの閨事直前（前書き）

エロを期待してはいけませんw

15 ロゼリアの閨事直前

「いいですね？ロゼリア様」

「うん！」

例の勝負服に身を包み、いつもつけないようないい香りのする香油も胸に少量吹きつけた。

髪も肌もいつも以上に磨き上げたし……化粧はしていないけど、暗闇だから問題ない！

「バルくんが来ても、恨みや愚痴をこぼさない！」

「重要ですよ」

前回の反省をちゃんとしているのだ。

「殿方の気分をその気にさせるのは女ですよ」

ちなみに、閨事について教授しているのはエルシナ先生だ。

「頑張る！」

布団の中に入って具体的に何をするのだとか、どういうときはそういうことをすればいいんだとか。

大声で口にできないようなこともきちんとして学習してきた。

「それにしても……」

エルシナ先生はさきほどまでの気合いがどこかにいったのか、急にしなっとしてうちの肩にやんわりとふれた。

「小さくて愛らしかった貴女様も、もう立派な淑女なのですね」

「エルシナ先生……どこでスイッチはいったの？」

この状態にはいると、結構長い。

「いいえ、もちろん今もとても愛らしいですよ？でも化粧をした貴女はそうまるで天使のようで」

「すっぴんじゃ勝負できないって？」

そしてこの状態に入ると周りの言葉は耳に入らない。

「なんだか私の知らない人のようで……私の手から巣立っていく子

どものように」

「実際、そろそろ自立の歳なんですけどー」

ダメだ、どんどん自分の世界に入ってしまったている。

おおよ、とハンカチを目に当ててまでいる。

最近重症化してきたなあのため息をついた。

「いいですか？ロゼリア様」

「う？うん」

いきなり振られてびっくりしたが、涙目のままロゼリアをじっと見つめている。

「たとえあれが下手だろうが、何が小さかろうが我慢するのが女性の仕事。相性が悪ければ苦勞するかもしれませんが、あきらめずに工夫をして頑張るんですよ」

「いきなり下ネタですか」

かなり重症化している。

しかもやけに熱意が感じられて逆に生々しくてやめてほしい。
いい加減暴走とまれーと念じたところで、うちは念力なんてもっていないから彼女の暴走は止まらない。

「工夫というのはですね。こうやって」

わざわざ持ってきていたのか、ポーチの中から薔薇の花弁を取り出して、シャツの上へと放り投げる。

白いシャツに真っ赤な花びら。

とても誘発的ではある。

「雰囲気盛り上げることが重要ですよ」

「いや、エルシナ先生。もういいから、っていつかうちそれほど誘ってないから」

もうだめだ。

いつもは時間をかけて現実に戻ってきてもらっていたけれど、今回は強制退場してもらおう。

「マリアー。エルシナ先生が御帰りになるそうよ！」

「かしこまりました、ご主人様」

うちの声に素早く反応してマリアがやってきて、エルシナの肩を掴む。

もちろん、いつもの下手のご案内ではなく、追い出す為に強気のご案内。

「それでは先生、お送りします」

「ああ、でも」

まだ言い洩るエルシナ先生を言いくるめながら、マリアがエルシナ先生を外へと連れ出す。

荷物は他のメイドが持っていく。

みんな一様に苦笑い。

「ふぁー疲れた」

「お疲れ様です。でも、よろしいタイミングでしたね。そろそろ陛下がいらつしやるはずでしょうから」

「え？もうそんな時間？！エルシナ先生滞在しすぎだよ！」

時計を見ると確かにそろそろ夜も更けてくる時間。

着付けを手伝ってもらおうとわざわざ来てもらったのだが、まさかここまで居座るとは。

「でも、よしっ！大丈夫」

最後に自分の姿を鏡にうつして一回転。

よく分かんないけど、よし、たぶん大丈夫。

薄いカーテンのつけられたベッド

薄く、色っぽい色のつけられた弱めのランプ

部屋の演出が多少ピンクっぽくなったけど、淡白よりはいいでしょう！

ってことで

「どう待ってたらいいの！？」

椅子に座っておくべき！？先に布団で寝ているべき！？

でも、布団に入ってたらせつかくの勝負服が目立たないっ！

どうしようっ！？無駄なことばかり言っていて、今知りたいことがわからない！

エルシナカムバック！

混乱気味で頭がぐるぐるしてきたうちを見かねたようで、キャラメルが出てきた。

「そこまで深く考えなくていいんですよ、ロゼリア様」

うちの手をそつと握る。

そして、そのままソファへと誘導する。

「いつもの通りでいいんです」

いつもの通りの落ち着いたトーンで言われると、自分がいかに混乱していたのかわかってなんだか恥ずかしくなってきた。

「ごめん。てんぱり過ぎたみたい」

一度、大きく息を吸って、ゆっくりはいた。

「ふふ、謝る必要などございませんよ。……そうですね。すこし気を紛らわす話でもしましょうか？」

「うん」

頷いて、キャラメルにも席に着くように促す。

「ありがとうございます……そうですね、マリアはいつまでこうして女装してられるかはどうでしょう」

「いきなり深いところについてきたね」

それはうちも気になっていたところではある。

「いつまでも出来る訳じゃありませんからね」

確かに、その辺の本物の女性の女性よりも女性らしいマリア。でも一応というかちゃんとした男性。

まだ線が細いから大丈夫っちゃ大丈夫なんだけど――。

「髭が生えてきたら、アウトですよ」

こればかりはどうしようもないだろう。

身長もすくすくと伸びてきているしね。

「今いくつだっけーうちより2つ上だっけ？」

「マリアはロゼリア様より一つ上……ですから、16ですわね」
16か。

長くてもあと2年もつたらいい方なのかな？

髭の生えたマリアかぁー。

「失礼します。ただ今戻りました……？」

二人して、戻ってきたてのマリアを凝視する。

うーん。想像できない。

こうしてみると、背の高いという印象の普通の女性だけどなあ。

「マリア、女装楽しい？」

「いきなりなんです？」

どうやらそんなに楽しいわけでもないらしい。

「じゃあさーマリア、髭がびちって生える前に今のうちに護衛職にこつそり転職しなよ」

「髭はびちって生えませんよ……それに、私は護衛職にまだ転職する気もありません」

「なんで？」

入口に立ったままだったので、手で近くへと呼ぶ。

「転職してしまうと、こうしてお近くでお世話ができないじゃないですか」

「できない……ああ、そうだったね」

後宮では男は入れないシステムだったね。

賄賂渡しに来る人とか親族ですらはいるにはなかなか面倒な手続きが必要になるんだっけ。

護衛も女性ばかりで……ん？

「今更思っただけど、そうすると今マリアがここに居るのってやばい？」

「とつても」

にこりとほほ笑んで見せるけど、笑い事じゃないよ。

まだメイド服似合うねなんて笑ってる場合じゃない。

「本当に今さらに悪いんだけど、それってストレスにならないの？」

「そうですね。でももう慣れましたし、しばらくは大丈夫だと思いますよ」

マリアが珍しく笑った。

「陛下も私のことは女子だと思ってますしね」

「そうだったけ？」

「そうですよ」

なんだろう、知らないって怖いね。

「だとしても、むしろそうなる前に転職をするべきだと言っているんです。ロゼリア様だって無傷じゃられない」

「ふーん」

本当にね、知らないって怖いね。

キャラメルが咎めるようにマリアにいつても首を縦には振らない。

「ご主人様がそう、命令なさるなら従います。……でも、私はあなたのお世話がしたいんです」

「うーん」

そこまで言われたら、なんか言い出しにくいよねー。

だいたいうちって人に命令するの苦手だしねー。

「もうしばらく考えてみようか」

「ロゼリア様ったら」

キャラメルが少し困ったように言うけど、うちだってこれでも一生懸命考えた方なんだよ？

これでもね。

っというか。

時計をみて少し欠伸を洩らす。

「っというか、バルくん遅くネ？」

「そういえば……そうですね」

ちよつと聞いてきます。とマリアがそつと部屋出る。

「また緊張してきた」

せっかくマリアの話で緊張をほぐしてた……というよりは忘れてた

のに。

「言葉が思いつきませんが……頑張ってください」
それはうちも返答に困る。

マリアがすぐに戻ってきた。

「陛下は少し遅れるそうです」

「そっか」

残念なような、助かったような。

その間に平常心を取り戻そう。

すーはーすーはー深呼吸。

いつもどおりでいいんだよね。いつも通りいつもどおり。

あーなんか心臓ドキドキしてきた。

「香油のにおい、きつすぎない？」

「大丈夫ですよ」

落ち着かないので、席を立って準備体操とかしてみる。

……なんか、やる気満々みたいで恥ずかしいかも？

「えーと」

やり場のない恥ずかしさでキャラメルに笑いかける。

「本でも読んで待ちますか？」

「そうするほうがいいみたい」

頬をかきながらそういうと、キャラメルは少しお待ちくださいと言
って本を取りに行く。

もーバルくん何してんだろ。って仕事か。

来てくれないと一人で馬鹿みたいじゃんか。

実際、先ほどから一人でバカみたいなことしてる気がするけど。

心臓がときどきいつてて落ち着かない。

「コレはいかがですか？」

「ありがとう」

勉強の本だ。しかも数式がびっしり詰まっているやつ。

これは別に教養に関係ないけど、今どきの女性は学も必要だとブリ
アン先生が持ってきたものだったと思う。

正直、内容なんてほとんど理解していない。

サインコサインタンジェント……見ているだけで欠伸が出る。再び椅子にすわって読み進めていると、ページをめくる分欠伸もでる。

「確かに、テンションは下がるけどなんだか眠たくなるよ」

「それは……我慢してください」

苦笑い。

しばらく時計の音と欠伸で時が立つのを待つ。

……いくらなんでも遅くない？

3年前喧嘩した、あの時くらいの時間になった。

「朝になるのと、陛下がくるの、どっちが早いと思う？」

我慢しようと思っではいたものの、思わずこめかみに力が入る。

「我慢っ我慢ですよ？ロゼリア様。先ほどこちらに向かわれているという連絡が」

「あつてすぐに愚痴言いそう。あーもー」

面白くない数式の本をたたきつけるような勢いで閉じる。

少しほとして、本当にバルくんはやってきた。

「す、すまないロゼリアっ」

「……」

ちよつと半目で睨む。

走ってきたのかなんなのか、ちよつと疲れている。

「……し、仕事がその」

なんだかしどろもどろであやしい。

でも、まあ、許してあげるか。

うちはため息についてバルくんに微笑んだ。

「いらつしゃい、バルくん」

二人が本当の夫婦になる日なのだ、少しくらい寛容な気持ちじゃないとこれからやっていけないだろう。

いつも、男が馬鹿なことをしたら女が許してやらないといけない

て姉ちゃんも言っていたしね。

バルくんがうちの手を持って、ソファへと座る。
こうして、近くに居るのっていつ振りだろう。

「何の本読んでたんだ？」

「数式の本、だって」

「内容わかるのか？」

語尾がどんどん笑っている。

「何その言い方、うちだって勉強はきちんとしているんだよ？……
理解はまだだけど」

「っはは。やっぱり」

そういつて笑う。

むかつくから鼻をつまんでやる。

「いひゃい」

「ねえ、バルくん、久しぶりに会っていうことそれだけ？」

鼻を引っ張っていたのをやめて、その胸に飛び込む。

ああ、落ち着く。

やっぱりうちはこの人が好きなんだ。って実感する。

しばらく感じてなかった幸福感と満足感で胸がいっぱいになる。

「ロゼリア……大きくなったな。それに……綺麗になった」

そっと、頭をなでてくれる。

「バルくん……うち……大きくなったのは身長だけじゃないんだよ
？」

胸を軽く押して、じっと見つめる。

ずっと待ってたんだよ。その言葉を言う前に、瞳を閉じてキスをお
ねだりする。

ずっと待って、ずっと甘えるのを我慢していたんだ。

これくらいいいだろう。

「ロゼリア」

近くで、バルくんの匂いがする。

前に比べると、なんだか体臭と違ういい匂いがする……香水？

「すまない。あの、言いにくいんだが、実はロワロが風邪をひいて……見舞いに行くといってしまったんだ。だから今日はもう行かなくて是不ならない」

「……はあ？」

目を開けると同時に、バルくんはうちを持ち上げ、素早くベッドに寝かして布団を頭からかぶせられる。

「ちょ、ちよつとバルくん!？」

布団をはいだら、すでにバルくんはいない。

「どうということ!？」

「バルくんつ!！」

悲しいとか、嫉妬とか通り越して、混乱が頭を支配する。

ロワロさんが風邪？

キスは？

ここまで準備したうちつて一体。

薔薇がバカつぽさを引き立てる。ちよつエルシナ先生。

つていうか、遅刻した理由は何？

待機時間に対しての甘い時間短すぎない？

つていうか、ここまできて乙女に恥かかせるつてどうよ!？

「バルくーんー!！」

怒りで枕をバルくんが出ていった扉に投げつける。

もうなんていうか、混乱と怒りがぐるぐると頭を回る。

正妃つてだれ？

いつまでも候補つてどうということ？

つていうか、いつまでまたすの？

「……もう、我慢できないっ!！」

うちの暴走に気がついたマリアとキャラメルが寄ってくる。

「どうなさいました、ご主人様っ」

「マリア!キャラメル!手伝つて!！」

「はい?何をですか?」

枕を拾ってきたマリアからその枕をひったくって叫ぶ
「家出する準備！！」

15 ロゼリアの閨事直前（後書き）

ちよつバルくんへたれかよ。

最初の頃の性格を思い出せゝ（*A*；
泣けないロゼリアかわいそす

16 ロゼリアが家出（前書き）

タイトル通りの内容です（＾　＾）

16 ロゼリアが家出

「本当に行くんですか、ご主人さま」

次の日の午後には、すでに家出をするための荷物は整っていた。

前々から、旅に出たいと思っていたから、小さな荷物をまとめて、気分だけでもと用意していたものがあつたからだ。

不安げにいう、マリアの言葉は、質問ではなく、確認だったのでロゼリアは大きくうなづいた。

「行く。もういやだよこんなところ。いったん、前の家に帰って頭冷やさせてやる。ついでに自分の頭も冷やす」

近くに好きな人がいるのに、逢えない。

好きな人なのに、ほかの女性のところに通っているという情報が入ってくる。

なんていう、拷問？他の側室たちの嫌がらせよりも、よっぽど堪えるよ。

「……いったん、ということはいずれはお戻りになるつもりなんですか？」

キラメルが、荷物の確認していた手を止めて、ロゼリアに振り返った。

「……わかんない」

本当にわからない。

こんなところ、戻りたくない。いい思い出なんてほとんどない。

もう、忘れてしまいたい。夢であつたと思いたい。

でも、ここにはあの人がいるから、帰りたくなるかもしれない。

……それでも今のうちには、ここは戻るべき所じゃないと思っている。

「でも、ここには居たくないから」

うちがここから出ることによって、ウェルセント家にも、仕えていた従者たちにも咎があるだろう。

だから、マリアとキャラメルは連れて行くつもり。
他の従者たちは、かわいそうだけど連れて行かない。
どうせ、バル君の手ごまの子たちだし。

ウエルセント家は、うちを捨てた罪ってことで、我慢してもらおう。
一応、根に持つてるところはあるんだからねっ！

そこまでうちの人生をウエルセント家に費やすつもりなんて、ない
んだから！

「でていく。んで、見つからないようになるべく隠れて地味に行く」
カシユ
実家で待ち伏せされてもすぐには戻らないためにも、帰るまでにゆ
っくり時間をかけていこうかな。って思ってる。

旅の気分も味わえて、一石二鳥

そうだよ、せっかくだから三人で観光地巡りとかしてのんびりい
こうかなあ。

その言葉を聞いて、キャラメルは頷いた。

「そうですか、では、私はここでお待ちしておりますね」

「うん、わかったーって、え！？」

キャラメルがそんなことを言うなんて思わなかった。

「なんで？外、やっぱいいや？」

うちがここがいやな用に、キャラメルにもいやなことが外にあるの
かもしれない。

それなら、強要はできない。

「いいえ、ロゼリアさまと一緒にしたら、どこでもかまいません」
マリアは事前に聞かされていたのか、驚いていない。

キャラメルは奴隷時代のトラウマでもあるのかと思ったが、そうで
もないようだ。

「私が、ここにいればしばらくの間ロゼリア様がいらないことを隠せ
ます。それに、三人旅は目立ちますから。マリアの女装をといて、
二人で旅をすれば手配を出されてもきつと見つかることはないでし
よう」

「キャラメル」

うちのために、いろいろ考えてくれているんだ。

こんな、うちのわがままのために……。

「って、残ってたらひどい目に逢っちゃうかもだよ?! だめだよ、許可しないよ!」

なにされるか具体的にはわかんないけど、殺されちゃうかもしれない。

それは、出て行ったマリアもそうかもしれないけどいるよりは平気なはず。

うちの表情が暗いことに気がついたキャラメルは明るく笑いながら言った。

「それじゃあ、一筆書いてください、そうすれば大丈夫ですから」

「いいよ、書く!」

「ありがとうございます」

キャラメルはにつこり笑って紙とペンを取り出した。
愛からわず用意がいいなあ。

「でもなんて?」

うちは椅子にすわって、ペンを握る。

「えつとですね。……《腰ぬけの王様に愛想を尽かした。家出させていただきます。なお、もし大々的に公開および刑を実行したら国中に国内情勢を暴露します。また、好きなキャラメルを私がいない間に処罰したら、一生戻らないもしくは、戻っても一生口をきかないつもりなので、よろしく》これでよろしいですわ」

「うん! わかった」

地味に、王さまをけなして自分のことを大好きと主に書かせたな、とマリアは思ったけど黙っておくことにした。

「この手紙は、ロゼリアさまが部屋にいないことに気がついた侍女が陛下に告げ口した時に陛下にお渡しします」

「うん……本当にありがとうね」

「まえまえから懐柔させておいた裏の門兵に今宵あけておくように
言っておきましたから、今夜決行できます」

ここまですんなりと抜け出すとこれまでできるとこまでしたロゼリア
に、一種の才能を感じなくもないが、キャラメルに言われてなすが
ままに手紙をしたためる彼女を一人にしては危険だな、とマリアは
感じたけど、やっぱり黙っておくことにした。

夜、実行の時間がくるまでは、今までと同様に過ごす。

不自然さを出さず、明日もおなじようにいるのだと思わせるように
して。

「ありがとうございます」

本日最後の授業はエルシナ先生だった。

愛からわずのテンションだったなあ……でも、ちゃんといつもお
りに過ごしたから恵那市ナ先生もまさか今日うちが家出をするとは
思ってもいないだろう。

エルシナ先生が去っていったのを、確認してうちは急いで服を着替
える。

マリアたちが来ているのと同じ格好だ。

今までのドレスたちに比べたら、かなり貧相な格好だが、カシユー
時代のロゼリアに言わせてみれば、全然上等な服だ。

「なんか、自分で言うのもあれだけどこっちの方が似合っている気
がする」

鏡の自分を見る。

それっていいのかなー。まあ、似合わないよりはいいよね。

髪をみつあみにして、ヘッドドレスをつければ、立派なメイドさん
だ。

「平凡な顔って役に立つ時が来るもんだね」

「何を着ても似合ってらっしゃいますよ」

マリアがよくわからないフォローを入れた。

「ってあれ？マリアはまだ着替えないの？」

「ええ、今着替えると問題がありますから」

そっか、私もメイド服着てるんだもんねえ。

「それじゃあ、キャラメル言ってくるね」

そっいつて体に抱きつく。

「はい、気をつけて行ってらっしゃいませ」

「……ぜったい、戻ってくるからね」

キャラメルは、うちがここに帰ってきやすいように理由になつてくれただ。

意地になりやすいうちが、へんな意地をはって戻れなくなったときに、キャラメルがいるから戻るんだと言えるように。

「……はい、お待ちしております」

気がつくのが遅かったけど。

小さくお礼を言つと、ぎゅっと体を抱きしめてくれた。

ごめんね。

でも、うちこのままここにいたら、きつとうちじゃなくなつてしまふきがして、怖い。

「ご主人さま、そろそろ」

マリアの声にうなづいて、キャラメルから離れる。

「マリア、ロゼリア様を頼みます」

マリアは、しっかりとうなづいてうちの手を引いてそつと部屋を出た。

荷物はずでに植木に隠しておいた。

隠しているあいだ見つからないかヒヤヒヤする。

きつと見つかつていないとは思ふけれど。見つかつても懐柔した兵士がどうにかしてくれると思う。

廊下は薄暗く、人の気配はしない。

足音がかつんかつんと響くけど、マリアは気にせず胸を張って歩いている。

ふいに、向こうからも足音がした。……見つかった？
ついで声がした。

「誰だ？」

明かりがばあ、とうちらの顔を照らす。

やはり、隠れもせずにとどくと動いていたのだから当たり前に見つかった。

「なんだ、ウエルセント様の……。こんな時間にどうした？もう出入りは禁じられているはずだろう」

「すみません」

けれどマリアはうるたえることも一切せずにただいつものように頭を下げた。

「ご主人様が昼間に指輪をなくしてしまっただけ、先ほど気がついて嘆かれたもので」

「探しにいかうって？だめだめ。明日にしろ」

やっぱり駄目か。

もういつそのこといったん引いたふりしてこそそこそこかと思えていたら、マリアは引き下からず続けた。

「しかし、それは陛下にいただいたもので——そう、特別の意味があるとか」

つまり、婚約指輪って言いたいのかな？マリアがすらすらという嘘を感じしながら聞いた。

そんな素敵なもの、もらっているなら家出なんてしないんだけどね。

「それは……大変だな。しかたない。特別だぞ？」

「助かります。目星は付いているので、すぐに戻れると思います」

おお、うそにひっかった。

マリアは丁寧にお辞儀した。

見回りの男はうなづくとまた巡回に向かった。

私たちもまた目的地へと歩いて行く。

「……マリア、嘘うまいね」

響かないようにこそつと褒めるとマリアは微笑んで返した。

サロンを抜けてやっと荷物のところまでたどり着く。

よかった、見つかっていない。

必要最低限のものだけにしたので、荷物は小さい。

それをスカートの内側に引っ掛ける。

……めっちゃ歩きにくい。

スカートが不自然な形になっているけど、まあこう暗ければたぶん、
ばれないと思う。

いや、近くで見たらかなり変な感じだけどさ。

「……！」

門のところまで歩いて行くと、門兵のおじいちゃんがこちらに気が
ついて、あくびしてどこかへと歩いて行った。

もちろん、たまたまというわけではない。

「さあ、行きましょう」

前々から事情を説明してこちらの協力者になってもらったのだ。

城から、こういう風に出る。

なんだかもものすごく変な気持ちだ。

城に入る前は、城で暮らすだなんて微塵も思ったことがなかったな
あ。

それが今はどうでしょう。

そのお城から家出しようとしているんだから、本当世の中って何が
起こるかわからないよね。

今の私が昔の私にこうなるよっていつても信じない自信があるね。

そつと門を抜けると、久しぶりの城下町が目広がる。

振り返って城を見る。

どこかでキャラメルが見守ってくれているかな。

バル君はいつ気が付いてくれるかな。

いろんな思いを抱いたまま、うちらは人込みへと紛れた。

このメイド服を着替えたなら、もうすぐに連れ戻されるということとは
ないだろう。

「いってきます」

もどってくるのかはわからない。

けれど自然とそう口から出たからいずれ戻ってくる時が来るのだろうか。

さようなら、じゃなくて、行ってきます。

「さあ、ロゼリアさまこちらです」

マリアにおいて行かれないようにその姿を追いかける。

籠の中の小鳥。

かごから出してもらえない、かわいがってももらえないのなら、自分から籠の外に出るまでなんだからね。

16 ロゼリアが家出（後書き）

カシユー宅がある土地の名前をつけるのを忘れていた気がする。
ん？つけたっけ？土地名募集中wwww

17 ロゼリアの名前

「朝です」

カーテンが開けられる音とともに、まぶしい光が目刺激する。

一瞬ここはどこだろう、と寝ぼけてからああそうだったと思いだす。いつもと違う手触りの布団を手で確認して、体を起こす。

目の前の長い髪を適当に結った男が濡れたタオルを差し出した。

「……んーおはよう、マリア」

「おはようございます」

城下町のとある宿屋の一室。

そこにマリアとロゼリアはとりあえず一晩を過ごした。

もちろん、マリアが本来の格好というか、男装プラスメガネ。

うちは下町の女性なら普通の格好。

「よく、眠れたようですね。ようございました」

「そりやそうだよー。もっと悪条件でもぐっすり眠れるよ」

この宿は、そりや城に比べたらだいぶ質もおちるが、だいぶいい方の宿だ。

「それは頼もしいです。これから経費削減で節約生活で行きますからね」

タオルで顔をぐしぐしと洗って、髪をくしでとく。

城に来てからずっとマリアがキャラメルにやっってもらっていたから自分でやるとなんだか少し変な気がする。

「朝食をもらってきました」

「ありがとー」

中が卵と野菜のサンドウィッチだ。

ヘルシーでとってもおいしそう。

部屋に備え付けられていたお茶を飲みながら、ふと思う。

「逃亡中なのに、こんなのにんびりしてもいいの？」

目の前で一緒にサンドウィッチを食べているマリアを見ながら首を

かしげて見る。

そういえば、一緒に食べるのは初めてかもしれない。

そっか、そういうこともいちいち気にしなくてもいいんだ。それって当り前のことだもんね。なんだか嬉しいな。

「構いません。まだ、ばれてないでしょうし、無理に急いだ方が街の人の記憶に残りやすい。こうして堂々としていれば旅人が多いこの街ではまず記憶に残りがたいはずです」

「ふーん」

こうして聞くと、マリアもキャラメルもいろいろ考えているんだなあ。

うち、どんだけ無計画だったんだろ。

「あ、それじゃ敬語ない方がいいんじゃない？」

「そうですね」

「どういう設定にする？だって、兄弟じゃどう考えても見た目が違うし」

うち、金髪。マリア、黒髪。

「親戚、というのも無難ではありますけど」

「親戚かあ。それでもいいか」

ぼんやりと、窓から少しだけ見える城の一角を見つめる。

いつもと、見る位置が逆だな。

なんだか不思議な感じ。

外から見るとこんな感じなんだなあ。

うちはマリアの方を向くと、ほほ笑んだ。

「リッジーポルトに行きたい」

「……観光地ですね」

「こそこそ裏道とか田舎とか辺鄙なところか行くよりは、堂々としてるでしょ？」

今の時期、リッジーポルトにあるポルト草原の120種類ほどの花が咲くらしく、一般市民にとっても愛されているらしい。

もちろん、貴族だったらその花をすべて庭園で育ててるつわものも

いるらしいけど。

野に咲く花が一番でしょ。

「そうですね、観光客とかにまぎれて逆によい目くらましになります」

お茶を飲み終え、食事も終え、荷物をまとめる。

「あ、マリアって言うのは女の子らしい名前だから、改名しないと」
変装しているのに、実名だったらばれるよね。

「また、つけてください」

マリアは苦笑いでそういった。

「えーうーん」

だから、うちは名前を決めるのが苦手なんだってば！
男の名前って言ったらシュバルツしかでないよー。

あ、兄さまの名前なんだったっけ。あ、エドリックだ。

うーん。でもそのまま使うのもなんだか悪いかなあ。

階段を降りながら、考える。

「この宿決めた時の名前でもいいんじゃないの？」

「ひねっていいないので……」

何にしたのかは教えてくれなかった。うーん気になるなあ。

宿にお金を払っている時も、笑顔でかくしてごまかした。

いったい何にしたのか。

うーん。名前かあ。

マリア……マリオ？だめだな、なんかいろいろだめだ。

宿から出ると、小さな男の子たちがうれしそうに走って行った。

片手におもちやを持って、実に楽しそうだ。

その後ろでお母さんかな？年配の女性がどなっている。

「マイセン！ハイルド！そんなに急いで誰かにぶつかったらどうするのー！」

「……」

「……」

うちはマリアに微笑んだ。

「どっちがいい？」

「……せめて選んでいただけます？」

「じゃあ、合わせてマイルド！」

「なんだか、味わい深そうですね」

「……やめとこうか、ハイルドでいこ」

「なんだか、かわいそうだったから。」

城下町はほかの街よりも栄えているし、治安もいい。

少し歩けば商店街はあるし、子どもたちのための学校も公園もある。

治安維持のための兵隊さんも歩いているし、教会もある。

道は歩きやすく美しい石畳式。

どこからか風に乗って花も散っている。

「……きれいだね」

ここがきれいなぶん、少し胸がさみしくなる。

田舎に、ここの少しの豊かさがあれば、もっと子供も育つのに。

音楽も、どこからか流れてくる。

「ねえ、ハイルド」

「なんです？」

「敬語なおさないの？」

「いいんですよ、敬語が標準の平民もいますから」

ぶつちやけ、癖になっているようだ。

「……まあ、いいけど」

馬車を待つために、駐留所の椅子に座る。

「うちの名前はどする？」

「……そうそう、名前が叫ばれるなんてことはありませんが、必要ですからね」

「マリア考えてくれる？」

「いえ、自信がないので遠慮します」

うちも名前決めるの苦手なのにー。

とわがままいったところで仕方がないから、まあいいか。

ちよっとマリアのネームセンスも気になるところではあったけど。

「あのねえ姓は考えてるの」

「へえ、何ですか？」

マリアは興味深そうにいうから、ちょっと言いにくくなったけれど言っちゃえ。

「アーモンド」

アーモンドと言ったとたんにマリアの顔がゆるんだ。

「……キャラメルといい、食べ物関係好きですね」

そっとうい方、まるでうちが大食いみたいじゃん。否定はしないけど。

「でもちゃんといるんだよ、アーモンドさん」

「掃除女といつの間に仲良くなったんですか？」

「ばれた？」

馬車がきたので、手を挙げる。

「相乗りになりますか、よろしいですか？」

運転している男が、マリアに訪ねた。

「我々は、リッジーポルトのポルト草原に行きたいのですけれど……」

……そちらのかたがよろしければぜひ」

「まあ！お姉様リッジーポルトですって」

マリアが行き先を告げると馬車の中から可愛らしい声が聞こえた。

「わたくしたちと一緒にですね。もちろんいいですわ、ねえお姉様」

「ええ、構いませんよ。どうぞ」

もう一人女性の声がして、運転している男はその声を聞いて、どうぞ、と扉を開けた。

「ありがとうございます」

「いいえ」

お礼を言つて入ると、小さい女の子とその姉であろう女性が笑顔で迎えてくれた。

声にたがわず可愛らしい女の子だ。

「今の次期、通り馬車を捕まえるのは難儀ですもの」

「ええ、助かりました」

マリアはそう言ってほほ笑んだ。

「わたくしの名前は、キャロライナですわキャリーと呼んでくださいまし」

小さな女の子は、元気よくそう言うてにこーっと笑った。

かわいらしい。ちゃんと自己紹介もできてしっかりした子だ。

「まあ、キャロライナだったら……姉の、シャーロットです」

「ハイルドです」

姉のシャーロットさんは妹さんよりもずっとお淑やかな感じた。

ちなみに順番的に次名乗るのはうちかもしれないけれど、うちはまだ名前を決めていないので、にっこりと笑ってごまかした。

でも、二人ともこちらを見つめて名乗るのを待っている。

仕方ない……えーっと。

「……キャロットです」

キャロライナとシャーロット

二人を合わせたら、こんなものになってしまった。

自分のネームセンスがいいとは思ってはいなかったけれど、ついとつさにこんな名前が出てくるなんて……しかもよりによってキャロット。再び食べ物系再来。

となりでマリアの笑顔が固まった気がする。

ああ、笑いたいんだろうな。それを我慢しているんだろうな。

でも一人だけうちの名前に喜んだ。

「人参きんじん? おいしそうな名前! わたくし、キャロット大好きよ!」

キャリーは気に入ったのか、うれしそうに私の手をぶんぶん振りまわす。

「キャリーたら、失礼でしょ?」

「いえ、別に……御いくつ?」

「わたくしは、今年でもう6つになりますわ」

わたくし、というのが、まだ慣れていなのか、どこか不自然だが、それもまたかわいらしい。

だいたい、うちはまだうちって言うてるし、この子の方がちゃんと

できているような気がする。

ああだ、こうだと言っているうちに目的地に着いたらしく、扉が開かれる。

「これ以上は、馬車や人が多くて入れませんで」

「構いません。……これを」

マリアは一足先に降りてお金を払う。マリアに手を借りて馬車から下りる。

「私たちは、もっと人氣が少ないところで下してもらえるかしら？」

「かしこまりました」

シャーロットがそう言うと言と運転手は頷いた。

「そうですか、相乗り、ありがとうございます」

「いいえ」

シャーロットとキャリーが頭を軽くさげたところで、運転手が扉を閉める。

扉の小さな窓からキャリーが手を振っている。

「またね」

小さくそう言って手を振ると、にっこり笑った。

「ごきげんよう」

そう言って小さなレディは笑った。

「いい人たちだったね」

「下級貴族のものようでしたね」

なるほど、それでなんとなく氣品があつたのか。

それにしても、確かに人が多い。

足場がない、とまでは言わないが肝心の花が見えないどころか草原に来たのかすらわからない。人を見にきた、といった方が知らないで来た人は納得するかもしれない。

なるほど、上級貴族たちが来たがらないわけだ。

どちらからいけば一望できるのか、右往左往した結果、やっと人が比較的少ない高台を見つけた。

上から見下ろす草原は、確かに色とりどりの花が咲き誇り、光を受

けてきれいに輝いて見える。

たまに、人が見えるのがあれだけど。

「うわぁ……すごい……」

ひとつひとつ、何の花か見えないのは残念だけど、ここから見る景色も十分綺麗だ。

風に吹かれ、100種類以上の花びらが散っていて、とても風情がある。

キャラメルにも、ねーちゃんや両親にも見せてあげたい。……バル君とも、一緒に見たい。

「……このようなときに、ともおもうのですが」

「なに？」

景色に見とれていると、マリアがまじめな声で言った。

「本当にキャラロットでいくんですか？」

語尾が笑っていたのは聞かなかったことにしておこう。

「……ハイルドが笑うといけないから、考え直しておく」

「失礼ながら、ニーナでいかがでしょう？」

「……それ、宿で使った名前でしょ」

「……」

凶星だったのか。

なら、最初っから教えてくれてたらよかったのに！

ロゼリア改めキャラロットさらに改めニーナになりました。

17 ロゼリアの名前（後書き）

センス悪すぎ。

むしろ悪化したとも言える。

マイルド……ドナルド！↑

18 ロゼリアと謎の物書き（前書き）

最近ルビきなくなっ た感じですかね？

18 ロゼリアと謎の物書き

「おお、すつごーい」

すごい水の音をたてて滝が豪快に飛んでいる。

落ちている。という方が水の表現としてはあっているかもしれないが、ロゼリアには飛んでいるように見えた。

流れた水を追いかけるように下をのぞけば、思ったよりも深くてなんだかくらつとした。

「落ちますよ」

クラシエン大橋。

大きく、少し派手目の赤い鉄骨でできたこの橋を渡るのが、下町では結構人気らしい。

そういう噂をきいて、滝もみたい！橋も渡りたい！というロゼリアの希望で今ゆつくりと渡っているところである。

いまロゼリアたちがいるところがちょうど橋がこの滝に一番近くにあるところ。

滝の迫力も、音も、飛沫も格別にすごい！

「あ！ほら、見て！虹だよ！」

「ああ、気を付けてください。あんまりそちらによると濡れますよ？」

落ちはしないだろうが、端のほうにしがみつき滝を指さしてははしやぐものだからマリアあらためハイルドはひやひやしてそれどころではない。

「すごい、きれい」

橋に向かって飛んでくるような滝。それにきれいに半円を描く虹色の端。

ロゼリアは思わず溜息を漏らした。

「バル君やキャラメルとも見たかったなあ……」

そう呟いたところでほかの観光客だろうか、カップルが目に入った

から虚しさが増すのは当然だろう。

「……バル君のあほ」

思い出して、思わずテンションが下がる。

それをみてマリアは話題を切り返すついでにロゼリアの肩をつかんで橋の中央へといざなった。

「……さあ、そろそろ橋を渡り次の街へ行きましょう。宿が取れないかもしれませんから」

「うん」

もともと、このクラシエン大橋は輸送用に作られた橋なので結構長い。

今は輸送用として通る馬車は少なく、数年前にここよりも街の近くに新しくできた山の道を通っているらしい。

それで一時期この橋の利用者は激減したが、その立派な橋の外観と大きな滝によって観光地として再び活用されるようになった。

なぜかお年寄りやカップルの観光客が多い。

カップルはなんとなくわかるとして、なぜ老人？

なにか体にいいとかそういうのかな？

やっと橋の3分の2程度を渡り終えたところでちよつと変わった人を見つけた。

淡い緑のフードを身にまとい、小さな簡易イスに腰掛け、絵を描いている。

「なんだろう？絵描きさんかな？」

「さあ、どうでしょうね」

「聞いてみよーっと」

「ニーナ？」

たたたくと小走りに走って近づいて挨拶。

「こんにちわ」

この人物に興味がわいたロゼリアは早速話しかけた。

反応がないな、と思ったら、ゆつくりと反応が返ってきた。

「ん？んん。ああ。やっぱ僕にかな？はい、こんにちは」

やけにのんびりとした声色でゆっくりと振り返る。

女性とも男性ともとれる中性的な顔立ち。

声も高くも低くもない。

多分、滝の飛沫が入らないようにするためかな？フードをかぶっているのに顔がはつきりとはよく見えない。

「あの、いきなりなんだけど質問してもいいかな？」

「ニーナ」

マリアはいやな予感がしたので遮ろうとしたが、ロゼリアの方が早かった。

「あなたは男？女？」

「ニーナ！」

初対面で失礼極まりない質問だが、あいても相手にけろつとした顔で答えた。

「どっちでもいいよ」

「……は？」

マリアはなんだか頭痛がしてきた。

「ふーん」

ロゼリアもその答えで満足したのか、いつもの「ふーん」で会話の終了を示した。

「……ニーナ」

そこまで深い質問をしたのなら最後まで聞いてほしい気もしているが、とりあえずロゼリアの興味はそこで終ったらしい。

「君たちは観光客かい？」

男か女かわからないこの人は、いったん筆をおいてこちらを見た。グレーの瞳。

「そうです。あなたは、絵描きですか？」

確かに、キャンバスには虹の浮かぶ滝の絵が八割がた完成している。絵に詳しくはないロゼリアでも、きれいだと思った。

「わあ、素敵」

「ありがとう。確かに絵を描いているけど、僕は実は物書きなんだ」

「物書き？」

鸚鵡返しのようにロゼリアが聞き返すと、自称物書きはうなづいた。
「そう、絵は趣味なんだけど……悲しいかな。物書きとしてはさっぱり売れなくてね。でも幸い絵の方では少々名が売れているんだよ」
フードから、マリアと同じ黒髪が見える。

「絵、本当に素敵だしね……ねえ。物書きって何を書いているの？」

「いろいろさ。歴史だったり空想だったり、観光記だったり人物記だったり」

「だったりだったりだね」

耳に残ったのか、ロゼリアがキョトンとした顔で繰り返した。

本といえば、先生たちが持ってきたものくらいしか読んでいない。

「そう、いろいろさ。でもね。人物記や歴史は好きじゃないんだ」
「どうして？」

「絶対ハッピーエンドにならないだろう？」

彼は言いたいことを言ったのか、ふたたび筆をとって絵を描き足し始める。

虹はまだ消えずのこっている。

「ハッピーエンドの小説はたくさんあるよ？」

具体的には読んだというわけではないけれど、こういう本がありました、と女官たちから聞いたことくらいはある。

「それは途中までの人生を一番いいところで止めているからだろ？」

その人物はまた山あり谷ありの人生を繰り返して、最終的には死に行きつく」

よくわからない。

「それでも、いい死に方だつてあるでしょう？」

首をかしげながらそう言くと、少しだけ笑ってうなずいた。

「そういう考え方もあるよね。ああ、そうそう、僕の名前はハル」

このときになってようやくお互い自己紹介をしていないことに気がついた。

「あ……うちはニーナ」

「ハイルドといいます」

滝に浮かぶ虹を切るように鳥が飛んできてハルの肩に留まった。

「彼は、トンジというんだ」

「へえ。トンジ、はじめましてうちはニーナっていうの」

水色の美しい鳥だ。

くるると鳴き声もすきとおっていて心地よい。

「なんとという鳥なんですか？」

マリアも始めてみるのか、ハルにそう尋ねた。

「トンジはトンジだよ」

「トンジという鳥種なんですか？」

「トンジは名前だよ」

「では鳥種はなんというんですか？」

「トンジはトンジだよ」

……わけがわからない。

明らかに不満を顔に出しながらマリアが首をひねる。

「トンジは気がついたら一緒にいたんだよ」

「つまり、知らないんですね」

そうならそうと言ってほしい。

「生まれた時から一緒なんだよ」

「言っていることが矛盾してます」

「つまり、謎の人物なんだね！ハルって！」

よくわからないが、なぜかロゼリアがそうしめた。

その答えにとてもじやないがマリアは満足できないが、そうしつゝ
く言うのも失礼だろうと口をつぐんだ。

「君の人生も、楽しそうだね。谷あり谷ありで」

「谷ばっかりだね。うちの人生」

「たぶん怒ってもいいところですよ」

なぜか納得しようとしたから、マリアが突っ込む。

谷ばかりの人生っていいことを連想するには難しいと思うのだが。

「ふふふ。今度の作品は君を題材にしてもいいかもね」

ハルは絵を描き終えたのか、片付けをはじめ。

「さて、僕はもう行くけれど、ぜひともまた会おう」

「うん、また会おうね」

「僕はしがない旅人物書き。君は——何かな？」

ハルはじつとロゼリアを見つめて、笑った。

「ただの観光客ですよ」

マリアがそう素早く返すと、ハルは荷物を背負って笑って去っていった。

「変な人でしたね」

「おもしろい人だったね」

マリアが明らかに複雑そうな顔をしたけど、気にせずうちはまた橋の向こう側を目指して歩く。

「あのですね」

「なに？」

どこから見ても滝は綺麗に見えるなあ——なんて思いながら道を通る。

「あまり、むやみやたらに話しかけてはいけませんよ」

「ええーどうして？」

「いい人ばかりじゃないからです」

それはそうだろうけど、せっかくの旅なのにつまんない。

でも、マリアの言うことも一理ある。

「ふーん」

でも約束はしない。

ゆっくりゆっくりと歩いているから、あとから着たであろうカップルたちの方がすでに出口のほうに行っている。

「つぎは何を見ようかなあ」

自称「雪山のイケメン」にもらった写真のところにでもいってみようかな。

「そろそろ真面目にピュールに向かった方がいいかと思いますが？」
ピュール？初めて聞いたなあ。

「ピュールってどこ？面白いところ？」

聞き返すと、なぜか不思議そうな顔をされた。あれ？なにか変なこと言っちゃった？

「あなたの出身の村だと聞きましたが」

「へ？」

うちの村、右の村、隣の村とかそういう風に言ってたから名前初めて知った。

というか、どこからどこまでがピュール村なんだろう……。

「初めて知ったよ」

「そうなんですか？」

「本当に初めて知った」

いや、もしかしたら聞いていたのをあんまりにも使わないものだから忘れてただけかもしれない。

「それじゃあ、向いますか？」

「うーんでも、もう少しいろんなものを見て回りたいな」

お城に戻ったら、もう二度とこっやって旅に出れないんだろうし、田舎《ピュール村》に戻ったらそのままだらだら家の手伝いとかして旅にでなさそうだし。

「……わかりました。でもせめてルートのうちから選んでくださいよ？」

マリアはすこし苦笑い気味で言った。

「うん！次はどこに行こうかなー！あ！お爺さん、ちょっといいですかー？」

「って、ひとつ言ったらひとつ忘れて！知らないひとにむやみに話しかけないってさっき言いませんでした？」

目の前をゆっくりとあるくお爺さんのところに走っていく。

「こういうのは年の功だよ、いいとこしってるといいなー」

世界はこんなにも広いんだから、少しの間だけでもいろんなところに行つて、いろんなものを見たい。

「お爺さん、はじめまして」

教科書だけじゃわからない、感動とかそういうのを体験してみたい。

「へえー次の街のお菓子がそんなにおいしいんですか？」

「おうおう。それでの、自分で作れる体験もできるとかで娘もよろこんとったで」

「作れるんだー！すごい！よし、ハイルド！次そこいこ！そこい！さつそく行こうとしたからマリアに服の端をつかまれた」

「待ちなさいニーナ。お爺さんできれば詳しい店の名前を教えてくださいませんか？」

「えーはいはい……なんじゃったかの」

マリアが確認とっている間にもう一度、滝を振り返ると虹はまだかかっている。

虹と滝。

とってもきれいなクラシエン大橋。

街についても宿が取れるかひやひやしているマリアをよそに最後までゆっくりと橋を満喫するロゼリアでした。

18 ロゼリアと謎の物書き（後書き）

アンケート実施中

暇な人答えてくれるとうれしいです。

19 ロゼリアもさすがに驚いた

「できた！」

クラシエン大橋を抜けて、お爺さんのお勧めする街リーリットの、お勧めしてくれた料理体験を終了したロゼリアたち。

体験したのは初心者でも簡単！プチベリーケーキだったわけだが、ロゼリアの作った完成品をみてマリアは正直驚いた。かなりの完成度だ。

初心者向けのレシピとは言え、ロゼリアのキャラを考えると失敗するかと思ったができたそれは先生のお手本といってもいいぐらいきれいなものだった。

「すごいですね、正直もつと下手と思ってました」

材料とかどばーと入れてがばーと混ぜると思っていたが、ロゼリアの手際はそれは几帳面だった。

「まあ、ひどいなあ。……貧乏人に、料理の失敗なんて許されないんだよ？」

笑っていたのに、一瞬真顔になってませんでした？

……なんだか、格言のように聞こえました。byマリア

「お菓子作ったの初めてだから楽しかった」

にこーと笑って出来上がったケーキをじっとみる。

ブルーベリーとラズベリーがとても見た目を華やかにして食欲をそそる。

借りていたキッチンと調理器具を片付けエプロンと帽子をお店に返す。

「ありがとうございましたー」

「いえいえ、上手にできました？」

教えてくれた先生はこの店の店長さんで恰幅のいい朗らかなおばさんだ。

お菓子のにおいがしみついているのか甘い匂いがする。

「はい！先生の教えがいいから」

「それはよかったわ！テラスで食べることもできるからぜひ利用して頂戴ね」

「ありがとうございます」

「マリアが一礼してふたりで一緒にテラスに向かう。」

「この街は料理店が多いらしい。」

「ここで料理人たちが腕を競い合っていたという文化があったらしい。ただ、本当に料理大会が行われるのは首都だからいまはただ料理店が多いだけ。」

「おおーいい天気」

「ついたばかりの時は夜で街もあまりよく見えなかったけれど、テラスにでると青空が広がっている。」

「パラソルがないから、少し日差しがまぶしいですね」

「そう？」

「もともと山のその辺でとれたての木の实を食べていたロゼリアはなんとも思わない。」

「カップルや親子が座って楽しそうにお菓子を楽しんでいる。」

「ロゼリアたちもあいている席に適当に座って先ほどのケーキをだす。」

「お飲み物はいかがですか？」

「紅茶をふたつ」

「かしこまりました」

「ウェイターが紅茶を運んでくるのを待つ間、周りの人たちをなんとなく見まわす。」

「ハイルドは何か食べないの？」

「ケーキを作ったのはロゼリアだけなのでマリアはケーキがない。」

「私は甘いものは少し……」

「ふーん」

「街並みにもぼんやりと視界を向けると、腕袖を大胆にまくり腕を出している女性がにやにやしながら体格のいい男の人と笑っている。そのうち、なにか子袋を男が取り出して女に中身を見せている。」

と、手を滑らせて二人して慌てている。ちょっとコメディみたいで面白い動きだ。

中身がちらつと見えたのだが、なにか赤くて光を反射していた。

「??」

「お待たせいたしました」

「あ、ありがとう」

ウェイターさんのほうに視線をずらしたのをまた戻した時には二人はもういなかった。

「??」

「ミルクは入れます?……どうかしました?」

なんとなくあの二人が気になって見ていたらマリアが不思議そうにミルクポットを持ったまま首をかしげている。

「あ、ごめん……ミルクいれて」

なんだっただろう。やけに気になるなあ。

「ありがとうございます。またのご来店お待ちしております」
店をでると、入る前に比べて警吏の人が多い気がする。

というか、目に入る。

「まだばれてないはずだよねえ」

「どうでしょう……ばれていてもおかしくはないですが」

とりあえず下手に動いて不審人物扱いされても困るのでどうとどうと道を歩く。

と、警吏の一人がこちらに来た。

「どうも、旅行の人ですか?」

「ええそうです。……なにかあったんですか?」

マリアが平然と話を促す。

「どうやらこの先の宝石店で泥棒が入ったらしいんですよ」

「泥棒ですか」

なんだ、やっぱりうちらのことじゃなかったんだ。

心の中で安堵をつくと警吏の人が続けた。

「大きな赤い宝石がとられたらしいんですよ。手口が似ているから cat 団の仕業じゃないかって」

「猫？」

赤い宝石？どこかで見たような

「自分らで何が嬉しいのかそう名乗っているんですよ。男がトラで女がクロ……とりあえず怪しい二人組がいたら連絡してください。」

その赤い宝石って言うのが上級貴族に注文されたものらしくて店のやつらが困ってるんですよ」

「わかりました」

よく喋る警吏はそのあとまなかに喋りたそうにしていたがマリアが頭を下げてそそくさと逃げた。

「貴族かあ」

「なにもこんな辺鄙な街で購入しなくてもいいのに」

「あれじゃないの？レッドローズ」

「ああ、じゃあ随分の貴族さんのね」

街の人もひそひそと例の泥棒の噂をしているようだ。

「レッドローズで何？」

「一度、ロゼリア様も身につけたことがありますよ」

「ああ」

手のひらくらい大きくて光によく反射する。

めっちゃ派手なやつ。

「うちはある、でかくて派手で嫌い」

「この辺でしかとれないものらしいですね」

そういえばつけた時にも同じこと言ったらもう出てこなくなっただけ。

北側からだと、小さな森がありその森をでると次の目的地らしいので、北を目指す。

と、急に路地から出てきた女の子にぶつかる。

「おわっ」

「うわあ！」

女の子はある意味器用に一回転して綺麗に直立した。

受け身をとった……のだろうか？

うちはそんなことももちろんできないので尻もちをついた。

「ごめそ」

謝る気があるのかないのか。

少年のような服装をしているが、きっと女の子だと思う。

赤毛の女の子はうちに手を伸ばした。

バンダナをつけているのが、猫みたいな感じで端っこがつんつんしててなんだか可愛い。

「大丈夫ですか？」

マリアが心配して駆け寄ってきた。

「ケガしてたらごめそ」

さつきから謝る気ないよね。まあ特に怪我とかしていないから別にいいんだけどね。

「大丈夫だよ」

女の子の手を借りて立ち上がったら、女の子の胸ポケットから何かが落ちた。

「！」

うちは条件反射でそれを空中で受け取る。

「うわわーやべえ。まじびびた。お嬢さんあんど」

「いえいえーこれ、なに？」

ずいぶん重たいやつだなあ。

ちょうど手にすっぽり収まるこれを渡しながら尋ねる。

女の子はにこにこしながら受け取った。

「え？これ？これはなあーえへへー知りたい？どうしようかなーふへへ」

かなり変わった子のようにだ。

言いたいということがすぐく伝わってくる。

言いたいんだろうなあ。

「知りたい」

正直そんなに知りたいわけでもなかったが、あんまりにもその子が嬉しそうに言うから聞いてみた。

「ええゝそんなに知りたいゝ？これはなあ実はなあふふふ」
「うん」

喋りながら笑うなんてよほどいいものなんだろうか？

「さつきにいにたちが盗りたてのレットローズという宝石なんだよ
おゝふへへすげえだろゝ」

「……」

「……」

どこからつつこめばいいのだろう。

うちとマリアは思わずお互いの顔を見合した。

さすがにここまで泥棒に素直に言われると思わなかった。

「……ん？あれ？」

「……」

「……やつべ」

途中で自分の失敗に気がついた女の子は宝石をポケットに突っ込んで走り出した。

「逃げよつと！」

うちの手をつかんだまま。

「て、ちよつ！うええ！？こけるっ」

「口……ニーナ……！」

マリアが困惑したように追いかけてくるが、うちをつかんで走っているにもかかわらず少女は素早く人ごみにまぎれてどんどんマリアをまいて行く。

うちもつい、その場のノリで一緒に走ってしまう。

しばらく走った後に裏路地に入りこんで落ち着いたのか、少女は歩き始めた。

「つちゃー。やつちゃったやつちゃった。怒られちゃうところだったぜ」

「だれに？」

「だれってそりゃあ、にいにとあねさんだ……どりゃあああ!!」
最後のどりゃあああは驚きなんだろうな。

ていうか、話しかけてきたのかと思っただらやっぱり大きな独り言だったんだ。

後ろを振り返ったまま女の子は驚きポーズをとった。おお、愉快的ポーズ。

「お前、足早いなあ!!」

「あのね、君がね、うちの手をずっと握ったまま引っぱ張ってきたんでしょ」

天然なのかな。

自分も天然って姉ちゃんに言われてたけどこの人よりだいぶまじだと思う。

やっと気がついたのか、手を急いで離れた。

そのとき、なぜか頭上から声がふってきた。

「コラっ!ミケ!」

「げげ」

低い成人男性の声だ。

どこから降りてきたのか、男の人が上から降ってきた。

どしんっ

「……っ」

……足がしびれたのか痛いのか、地味にうつむいて耐えている。

うつん、これは突っ込むべきなのかなあ。

「ミケちゃん?だめよ勝手に持っついていっちゃ。それに、トラも普通に階段使いなさい」

裏口の扉から地味に……というか普通に登場してきたのは、あのお菓子やで見た女性だ。

そっいえばあのお菓子やで女性と一緒にいたのはこの男の人だった気がする。

なんでわざわざ上から現れたんだろうこの人。

「うるさいクロ。それよりもミケ！不審人物連れてきてどうする！？」

不審人物はそっちだ。

とマリアがいたら突っ込んだだろう。

不審人物に不審人物扱いされるのって意外とムカつくね。

クロに問い詰められてミケはけるっとした顔で言った。

「ついて来ちゃったんだ」

「いやいや」

さらっと嘘ついたね。うちは引っ張られたんだってば。

すると、クロは何か考えてうむむーと唸った。

「正体がばれたなら仕方がない」

ばれたけど、ばれてるとは一言も言っていない。

だが男はばばっと両手を高く持ち上げ、腰までゆっくりまわしながら言った。

「闇夜に紛れてこんばんわ！」

すると反応して女の人すすすと男に近づいて髪を払っていった。

「狙われたからには諦めて」

最後に女の子が二人の前に立って両手をあげてよくわからないポーズをとった。

「光るお宝頂戴な！！」

どーんっ！と効果音でもつきそうなドヤ顔。

「トラ！」

「クロ」

「ミケ！！」

「我ら、闇夜の盗賊cat団！」

最後は声を合わせてのフィニッシュでした。

「ふーん」

ネタなんだか本気なんだか……多分本気だろうけど。

よくわからなかったので、とりあえずロゼリアは拍手だけ送った。光ものをほしがるのはカラスじゃなかったかな。

……ん？ cat 団で二人じゃないんだね。

うち、どうしたらいいかなー。

10 秒くらいポーズティングしたまま停止して、10 秒たってからそれぞれポーズを直した。

19 ロゼリアもさすがに驚いた（後書き）

うちよりも、変な人がいたなんて……！byロゼリア
この三人のポーズ誰か描いてくれないかな。

20 ロゼリアを待つ人（前書き）

祝20話！

20 ロゼリアを待つ人

「で、どうするの？」

ポーズをとったら満足したのか、クロがトラに問いかける。
どうするってうちのことだろうなあ。

うちもどうしたらいいだろう。

大声出して誰か呼ぶべきかな？それとも逃げるべきかな？

「んーそうだなあ。我々cat団は良いやつには手を出さない主義だしなあ。拍手くれたし」

「そうね、女の子に手を挙げるのは賛成できないわ。拍手くれたし」
拍手重要なのかな。

反応に困ってとった行動だったのだが、cat団にはとても好印象を与えたいらしい。

もう一度拍手したら返してくれるかな。でももうないか。

「でも、大声出されたら面倒だからとりあえずぐるぐる巻きにして放置ってことでいいんじゃないかな？」

「そうね、それじゃあそうしましょう」

「でもさにいに。大声出す気ならとつくに出してるんじゃないのぉ」
「それもそうだな」

……なかなか対策が決まらない。

まとまりがあるようでないなあ、この人たち。

「ねえねえ」

なんだかじれったくなってロゼリアから話しかけた。

「なんだ？」

「どうして泥棒なんてするの？」

泥棒に聞いちゃいけないような気がするけど。

うちも、とっても貧乏だったけど人に顔向けできないようなことはするな。するくらいなら一家心中するって母ちゃんがいつも言っていた。

「聞いてどうするの？」

やっぱりというか、クロが少し機嫌が悪くなったのか、まゆをひそめた。

「人生の参考にする」

よい意味でも、悪い意味でも。

すると、その言葉に反応してクロが首を振った。

「それはよくないわ。泥棒なんて人生の選択肢に入れちゃだめよ」
泥棒によくわからないが諭された。

「ふーん」

「おまえ、バカな子だろ」

ミケがうちのほほをぶにいとつまむ。

「痛い」

「泥棒なんてろくなことはないわ。人目は常に気にするし失敗は許されない、保険もないし老後の心配もあるのよ」

よくわからないけれど、切実らしい。

「わかった。泥棒は選択しない」

ほほをずつつかんでいるミケの手をはたく。

「うちは大声を上げないし、あなたたちのことも言わないから、代わりにその宝石を返して」

「これを？」

トラが袋を持ち上げる。

「やっぱり馬鹿だなあ。どうして泥棒が盗んだものをほいほいと返すんだよ」

またミケが馬鹿にしてほほをつまもうとするから両手で防御する。

そんなにうちがやられっぱなしだと思ふなよう！！

「あ」

ふいに、トラがそう一言唐突にいった。

「……お嬢ちゃん、これを返してやる。いや、その髪飾りと交換してやる」

「本当？」

「いったいどんな心変わりなんだろう。」

「本当本当」

トラはにこにことして大きくうなづいた。……なんか胡散臭いなあ。けど、まあいいか。

「ええー！なんでだよにいにいー。そんな髪飾りじゃこずかい程度しかないじゃないか」

何でも言ってみるものだ。

心の中でロゼリアはガッツポーズをとった。

「おめえは黙っている、ミケ」

ぐちぐちいうミケの口をつかんでたまらせる。

「それで、おれたちは南へ行ったというんだぞ」

「わかった」

とりあえず素直に頷く。

「100数えてるまでその場で動くなよ？」

「わかった」

「えーマジで？」

正直100も数えるの面倒だなあ。と思いつつも頷く。

クロはうちの髪から髪飾りを取った。

「ミケ・クロ。行くぞ」

「わかったわ」

「なんでよおーう」

宝石をその足元に置いてcat団は北へと逃げて行った。

「1、2、3、456789……」

足跡が聞こえなくなっしてからすぐに宝石を拾う。

……あ。

大通りにでると、マリアとすぐ目が合った。

「マ……ハイルド！」

「ニーナ！無事でしたかつ？」

むぎゅうと抱きしめられてちよつと苦しい。

「怪我はありませんか？心臓が止まるかと……！」

「だ、大丈夫だよお」

今若干大丈夫じゃないですよー！

「そつえば髪飾りはどうしたのです？」

「くるしい」

肩をばんばんと叩くと気がついたようですぐに解放してくれた。

「も、申し訳ありません」

それだけ心配さえてしまったということだろう。

はあ、うちいつつも心配させている気がする。もつと気をつけなくちゃ。

「いいよお。……髪飾りはこれと交換してもらった」

これ。と宝石の入った袋を掲げる。

「……」

無言でうけとつたマリアはすぐに理解した。

「割れてますね……」

割れてないとしてもヒビが沢山。

いくら高級な宝石だってこれだけ傷がつけばほとんど価値などないだろう。

泥棒のくせにどんだけ雑に扱っているのだろう。

もつと大事に扱うべきじゃないのかなあ。

「とりあえず、警使に渡してきます。そこで待っていてください」

「うん」

うちはちよつと落ち込んだ。

せつかく取り返したのに壊れてるし……騙されて髪飾りとられたし。マリアに心配掛けたし。そうだよ、マリアに謝らないと。

「……よし」

反省終了っ！

泥棒にいい人なんていないんだねっ！変な人はいるけど。

いや、面白かったけれども！悪い人なんだよね！

もう今度会ったら騙されないんだからっ！

「ニーナ」

ちょうどいいタイミングでマリアも戻ってきた。

「ハイルド！心配掛けてごめんねっ！」

お詫びの気持ちをこめてハグ。

勢い付けすぎて若干マリアのあごで頭ぶつけちゃったのが地味に痛い。

「口……ニーナ？べ、べつに謝らなくても大丈夫ですよ」

「いや、でも心配かけちゃったしね」

ついでに顎を撫でてあげる。

「おでこぶつけちゃった。ごめんね、痛い？」

「いえ」

超目をそらされてるんだけど。

「そ、そろそろいい加減ちゃんと村に向かいましょう」

「う？うん。あ、いやでもうちまだ行きたいところあるんだけどー」

なぜか早足ですたすたと歩いて行くマリア。

もしかして照れてるのかな。さっきからでもってるし。

顔は平然としてるけど……あご痛くないのかな？すごいポーカーフ
エイス。

態度が物語ってるけど。

顔の表情と体の行動が一致してませんよー。

「あつすいません」

いろんな人とぶつかってるし。

これ以上マリアが他の人に迷惑かけないうちに捕獲しちゃおう。

「まっつてよ」

ところかわって首都センラウ……のお城のある部屋の前。

「……」

一人うろつろと入口を行ったり来たり。

実に落ち着きのない様子で、たまにちらと扉をみたり耳を澄ませてみたり。

この人じゃなければ確実に兵士が「くせものっ！」と捕獲していたでしょうね。

あ、それ面白いかもしれない。今度やってみましょうか。

「……どうしたものか」

もちろんさつきからうろろうろしているのはこの城の主シュバルツ・リンヴェル。

「ロゼリアが……怒っていないわけがない」

それくらいは自覚してるんですね。

「先ほどから何をしていたらっしゃるのですか？」

「っ！？」

ガチャと開いた扉に異常なほど反応して、すぐさま冷静を装う。

「あーその」

ごほんつとわざとらしい咳をしてから

「ロゼリアは、その……そろそろ会ってくれる気になったか？」

と少し早い口調で聞いた。

キャラメルはにこりと微笑んで手で×印を作った。

「……そうか」

「何度もおっしゃいますけど、すぐに弁明に来なかったのも大きいと思いますよ？まあ、それ以前の問題のような気がします」

「……返す言葉もない」

ロゼリアが家出してから2日後に一応ご機嫌を見に来たり、それから2日おきに結構マメにロゼリアを訪ねてきているのだが……まあ、いないからには仕方がない。

「……そのマメさをいらっしやるときに発揮すればよろしかったのに」

思わずため息とともにキャラメルはそう呟いた。

「ん？なにかいったか？」

「いいえ？」

「それにしても……」

シュバルツはロゼリアの部屋の扉を見る。

「勉強もお稽古もしていないらしいな」

「ええ、どうしても気分が乗らないとかで」

実際は気分が乗らないというかいけないからできないわけなんですけどね。

「もう2週間も怒ったままじゃないか。ロゼリアにしては……」

長いような、という前にキャラメルが笑顔のままさえぎる。

「いくら素直なロゼリア様でも女として侮辱されたようなものではプライドが許さないんでしょうねえ」

「うぐ」

……とは言ったものの、生来怒るということがあまり得意じゃないロゼリアが2週間も（しかも頻繁に謝罪に来るのを拒んだまま）怒るとするのはキャラメルにも想像できない。

しかしまあ、いないものはいないのだ。

帰ってきていないということは会う気がないということだろう。

キャラメルはなにもウソなどついていない。

「陛下、そろそろ執務の時間が……」

「わかった」

小間使いの一人がシュバルツを呼びに来て、今日はこれで終わり。

「ロゼリア様が会う気になられたらすぐに陛下にお伝えしますわ」

キャラメルはそう言って一礼すると、シュバルツはなんとも苦々しい顔でうなづいた。

「頼む」

小間使いと一緒に立ち去っていく陛下を見てキャラメルはため息をついた。

だんだん陛下も気が付いてきているだろうから、あとどれくらいもつものやら。

「ロゼリア様は、無事に村に着いたかしら……？」

主のいない室にもどり、窓を見上げる。

「ご無事で、楽しんでらしてるならいいのだけれど……」

他のメイドたちにはお金を払って黙ってもらっているけれど、それもそろそろ限界だろう。

あの陛下が頻繁に謝罪のために訪れていると知ったらきつとロゼリアは喜ぶだろう。

いや、むしろ見損なうだろうか？

そんなに今来れるなら、どうして昔はこれなかったのだ、と。

「……ロゼリアさま」

ロゼリアに会いたいのはシュバルツだけではない。

キャラメルだって会いたいのだ。

「早く、お戻りになってください」

主がお気に入りだったクッションを抱いてキャラメルは瞳を閉じた。

20 ロゼリアを待つ人（後書き）

シュバルツくん相も変わらずへたれてるねえ。

キャラメルってばいじらしいっ！って思っていたけると嬉しいです。

21 ロゼリアも花まつり（前書き）

アンケート答えてくださりありがとうございます

正直、SがMが聞いているのはただの（仮）の興味本位です！！↑
ちなみにいまのところSが一人ドMは一人です。

この二人が出会うとどうなるんだろう（。v。）どうもならんか

21 ロゼリアも花まつり

軽快な音楽がどことなく流れてきて、人と人の話し声や活気ある売り子の声が飛び交う。

空では小さな花火がぱんぱんとまつりの開催を知らせていた。

「お祭りだああー!!」

ロゼリアは馬車から身を乗り出して街を見渡した。

ちょうど、ロゼリアたちが立ち寄ったその日、プールフ町では花まつりをしていたらしい。

あちこちで花のいいにおいがする。

馬車を止めて貰って街に降りると、さっそく売り子が声をかけてくる。

「お嬢さんお嬢さん!うちの花なんか似合うよ!」

「いやいや、お嬢さんにはうちの花こそ似合う!」

みんな街の中心に向かって花を持って向かっているようだが、そのたびに出店の花屋が花をどうぞと薦める。

人ごみにながされるようになんとなく歩いていると、ひととき大きな声でおばさんがマリアに向かって叫んだ。もちろん、まわりには色とりどりの花が胸をそらしている。

「ちよいと、お兄さん!かわいい彼女さん花付けてないじゃないか、買ってあげなさいよ!うちのなんかどうだい!」

そういつて大きな花をぐいっと押しつけるおばさん。

「か……彼女!?違いますよ!」

珍しく取り乱している。マリアもこんな表情できるんだなあ、となんとなくしみじみしてしまう。

「そうなのかい?まあ、なにはともあれ、広場に行く前に花を買わなきゃ!」

大きな花が気に入らないと判断したのか、今度は小さな花を取り出す。

「ねえ、どうしてみんな花を持って広場に行くの？」

「おや？知らないで参加しているのかい？」

「移動のついでに寄っただけですから」

おばさんは呆れた顔をして、説明してくれた。

なんかよくわからないけど熱く伝説みたいに語ってくれたのを省いて要約すると

プールフはいろいろな花の生産地で、花を出稼ぎに他の街に売りに行く男が多いらしい。

それで、どんなに離れてもカップルたち（もしくは家族）の心は共にあるという祈りをこめて花を水晶に込め、それをお互いに持つておくはずと一緒にいられるというジンクスがあるらしい。

ふーん。カップルが確かに好きそうなお話だね。

「一般的には男性が女性に花を贈り、女性が水晶に祈りながら入れてそれを二人で共有するのが適切なやり方だね」

「ふーん」

ずっと一緒にいられる……かあ。素敵だなあ。

ロゼリアも一応女の子だから、こういう話は嫌いではない。

「だから、あんた彼女に買っておやりよ！」

「ですから、彼女じゃありませんっ！！」

につこにこしながらおばちゃんはマリアの肩を掴んで何かひそひそ話している。

わー面白い。マリアの表情が（悪い意味で）ころころ変わってる。

いろんな意味ですごいおばちゃんだなあ。

「……わかりました、買いますよ、それで？というのがいいんですか？」

商売人魂に負けたのか。なぜか疲れた表情でマリアが近くに戻ってきた。

「そうさねえ、花が大きいほどいいという人もいれば、花言葉がいいとか、色言葉によって決める人もいるね」

そういえば、さっきいちゃいちゃしているらぶらぶカップルが二人

で顔くらいの大きさのある花を持っていたっけ。
ん？よく見たらカップルが多いなあ。

「あの花を丸ごと水晶に入れるの？大きくて邪魔そう」

「まさかまさか、花びらを一枚入れるとか……それでも大きかったらちぎったりとか」

「ぶつちやけ花どうでもいいんだね！」

なるほど、と思って口に出したらすぐにマリアに口を押さえられた。

「こういうのは気持ちだからね！さ！彼女さんはどれが好きかい？」

「彼女じゃないと！」

いじられているマリアを見るのも面白そうだけど、うちはうちでお花を選ぶ。

「んー」

出店とはいえ、ものすごい種類の花がそろっている。
もともとこの名産物だから当然か。

それにしても本当にどれもきれいで、どれも素敵だ。

「んー」

ついつい目移りしてしまう。

見たことのある花から、はじめて見る花。

大きい花も小さい花も、どれもそれぞれ美しいし、ロゼリアの気を引くものばかりだ。

「んー……決められないやあ。ハイルド、決めて？」

「いいんですか？」

「うん、ハイルドなら大丈夫だと思う」

「じゃあ、決まりだね！」

おばちゃん何かマリアを再び捕まえてなにかひそひそ喋っている。
あ、あのひと花束持つてる。全部入れるのかな？？

再びおばちゃんのほうを見ると、こつちの花とかあつちの花とか持つてはマリアに何事か囁いている。

しばらくしてから、戻ってきたが今度はおばちゃんが不服そうだ。

「本当にその花でいいのかい？」

手にあるのは、小さな真つ白の花だ。

「いいんですよ」

「まあ、それもきれいな花だからいいけど、それじゃあお代は確かに貰ったよ」

リボンで包んでもらってその花をうちに渡してくれる。

「うわぁ、かわいい花」

花びらのかたちがハートみたいでなんだか可愛い。

「ありがとう」

「いえ」

「それじゃあ、広場に行こうか」

「そうですね」

広場につくと何箇所かに分かれてみんな並んでいる。

よくわからないけれど、私たちもそのうちの一つに並んだ。

「おや。これはこれは、お久しぶりです」

不意に話しかけられて振り向くと不思議な物書きのハルがトンジと一緒にいた。

「ハル！久しぶりだねっ」

久しぶり、といっても依然別れてからそんなに日にちも経ってはいないけれど。

ハルはあいからわずの格好でいる。

「花まつりに参加しているのかい？」

「そうだよ。ハルは参加しないの？」

「うんー参加してもいいけれど、この通り独り身だからね」

あんまり興味なさそうに笑って、うちがもっている花に目をとめた。

「君はそれを？」

「うん？そうだよ。ハイルドが選んでくれたの」

少しのあいだじーっと見つめてから思い出したようにつぶやいた。

「ふうん、そう。その花はパレーだね。確か、花言葉が素敵な出会い……だったかな」

「ふーん。そうなの？」

マリアの方に首を向けると、マリアは優しく微笑んでうなづいた。

「ええ、この旅で少しでも良い出会いがあればと思ひまして」

「一緒にいるジंकウスと良縁のおまじないってところかな？」

「ふーん。ちよつと欲張りかな？でも、素敵！本当にありがとうね」
そうやって笑ったらハルは何かインスピレーションでもわいたのか
おもむろにキャンバスを広げると、うちの許可もなにも取らずにう
ちの姿を描き始めた。

「君は面白いね」

「そうかなあ？どの辺が？」

「顔？」

「それって誉めてるの？」

疑問形ではあるけれどほとんど考える時間もないくらい素早く返さ
れたので余計気になる。

「どっちでもいいよ」

「うちはどっちでもよくないんだけど」

けれどやっぱりハルは前にあったときみたいにのらりくらりとどっ
ちつかずの答えばかり。

そうこうしているうちに、やっと列が済んで広場の真ん中につく。

手で握れるくらいの小さな水晶の真ん中に、穴があいている。

「この中に、祈りながら花を入れてくださいね」

綺麗なお姉さんが水晶をうちに手渡しして、そう説明した。

「……あら？ごめんなさい。本来ならもう一つペアでお渡ししなき
やいけないのだけれどそれが最後みたい」

「ええ？そうなの？」

確かに、後ろに用意されている箱は空っぽのようだ。

「私は構いませんから、ひとつで大丈夫ですよ」

「えーでも」

「まあまあ。どちらにしてもそれは作ればいいじゃないか」

花を作る工程を描きたいのか、ハルはお姉さんの隣で準備万端の態
勢でこちらを見ている。

「本当、ごめんなさいね。他の列も余裕がないようなの」

「構いません、続きを教えてください」

わがまま言ってお姉さんを困らせてもあれなので、とりあえず作ることにする。

パレーの花は小さいけれどこの水晶には入らなかったのので一枝花びらを入れる。

そして、少しの間祈る。

「次に、この液体を注ぎ込みます」

透明の液体を注ぎ込み、数秒待って水につける。

「ハイ、出来上がりましたよ」

お守り袋みたいな小さな袋もセットでお姉さんができたお守りを渡してくれた。

「うわぁー可愛いー！」

マリアが選んでくれた花が、きちんと真ん中に来ている。

「綺麗に完成して、良かったですね」

ハルが簡単にスケッチできたのか満足そうに閉じながら微笑んだ。

「うん！」

白い花弁は、ハートの形にも見えるけれど、こうして空にかざして見るとまるで羽のように見えなくてもない。

「綺麗にできてよかったね、ハイルド！」

「はい、そうですね」

マリアにそう言って渡すと、マリアは受け取って手で転がして見ている。

「それじゃあ、僕はそろそろ次の所へ行くね」

「次はどこへ行くの？」

「さあ、気の向くまま。かな？」

トンジが空高く飛んで、それについて行くかのようにハルはゆっくりと歩いた。

「それではお二人とも、また会いましょう」

「ばいばーい」

なんというか、行動も雰囲気も独特な人物だなあ。と思ってしまふ。
「うちらもそろそろ行こうかー」

「はい。ニーナどうぞ」

マリアがさっきのお守りを渡してくるから首をふる。

「ううん、それはマリアのだよー」

「いや、しかし」

そのままでもそのしかしって続きそうだったから口を狙って軽くチヨップする。

「いいの。そういうものでしょ？それに、マリアにも素敵な出会いがあつてほしいし！」

ね？と問いかけると諦めたのかやんわりと笑った。

「……ありがとうございます」

「素直でよろしい！」

正直、あんまりにもきれいだつたから惜しいなーって思うけれどもつまかなりのお世話になっているから、心の中の声にしておく。

「でも、私はもう十分素敵な出会いをしてますよ」

「ん？だれだれ？」

「もちろん、ロゼリア様ですよ」

冷やかし半分で聞いたものだから、なんだかじんわりと照れる。

「……マリアって意外とキザーよくそういうお世辞いえるねー」

「まさかまさか、本音ですよ？」

「そういうことあんまり言わない！なんだか恥ずかしいでしょー」
周りがカップルばかりなものだから、浮いてないのがさらに恥ずかしい。

「ふーんで終わらせるかと」

「いや、うちをいつたいなんだと……あ。そういえばハイルドだったね、ハイルド。ハイルドはキザ」

「いえいえ」

「もついいっぱい！」

あなたとの出会いが一番素敵な出会いですよ。ともう一度心の中で
思ったのは、今度はマリアは口にしなかった。

21 ロゼリアも花まつり（後書き）

思ったよりも更新があいてしまつて申し訳ない。

最後のほうマリアと若干いちゃいちゃ気味になつたような。

ハルが結構お気に入りだけれど動かしにくいキャラだ。

22 ロゼリア、占う（前書き）

この間祝10万文字突破しました

22 ロゼリア、占う

河を渡る為に船に乗ったロゼリアとマリア

河を渡り、森を抜ければロゼリアの育った村にやっと着くらしい。

「んー船ってつまらないねー」

最初の方はそれこそはしゃいでいたものだが、1時間もすると飽きてしまったようだ。

「馬車と同じですよ」

「馬車とは違うの、なんか違うの」

「そうですか？」

安い船に乗っているから、個室などあるわけもなく広いルームに椅子がただ並べられたところでじっとしている。

「おとと」

安い船ゆえに非常に揺れる。

知らない人にむやみに話しかけてはいけない、とようやく半分理解したロゼリアは同乗した客たちを見るだけにとどめている。

小さいことが走り回っているのを見て自分の小さいころをぼんやり思いだす。

「もったいないなー」

「なにがですか？」

ついぼつりと漏れた言葉に、マリアは首をかしげた。

「うち、ほとんどあそこで過ごしたでしょ？若くて遊びたいまっ盛りに」

「ああ、なるほど」

「たいして身についてもいない勉強づくしで、もったいないなあって」

「いや、習得はしておきましょう」

本気なのか本気じゃないのかロゼリアは半分眠っているような声色だ。

「そこのお二人さん、暇なら占いなんてどうかしら？」

というか、やっぱり半分眠っていたのか、声をかけられてはっとした顔でロゼリアは顔をあげた。

淡い桜色のローブを纏った、同世代くらいの若い少女だ。

どこかで見たことのあるような、少し変わった格好をしている。

「占い？」

「ええ。仕事運から恋愛運、明日のお天気から今日の運勢までなんでも」

そういつて頭にかぶったローブを下した。

真っ白の髪に、ダークグレーの瞳。

「綺麗……雪みたい！」

「えええ！なんで私の名前がわかったの！？あなたもしかして同業者！？」

「……」

二人して驚いた顔でお互いを指さしたまま停止。

大声を出したものだから周りの人も思わず二人を見ている。

マリアはため息をついた。

「……。まず、自己紹介をしましょうか。ハイルドといいます」

「そうですね。ごめんなさい気が動転しちゃって……はは。えっと

私はユキ・シイナ」

「うちはニーナ……ニーナです！」

フルネームを言おうとして忘れたのでロゼリアは二度繰り返してごまかした。

「私は東の小さな国から来たの」

「へえーそうなんだ！言葉上手だね」

「ありがとう。頑張って勉強した甲斐があつたわ」

現地住民といってもいいほど、言葉の違和感を感じられない。

だが、顔のつくりや服装などを見るとなるほどなんとなくわかる。

「ニーナちゃんはこれからどこへ？」

「ニーナでいいよ、こちらは故郷に帰るの」

「素敵ね」

キララメル笑顔に似た、やわらかい笑顔でなんだか懐かしさを感じた。

うち、ユキのこと好きかも」

「ユキはどこにいくの？」

「そうねー特には決めていないの。修行の旅なのよ」

「修行？占いの？」

そういえば、占いをしてくれるっていつて結局ごちゃごちゃしてないね。

「んーそうつていえば、そうかな。具体的には占いというか、別の職業なんだけど」

「ふーん」

ユキの荷物は多い。肩かけからリュックから腰にもポーチをつけている。

重くないのだろうか。

「まあ、その修行も表向きで、本当は人探ししてるの」

「人探し？」

「そう、同じ国出身……なのかな？よくわかんないや」

苦笑いでほほをかいだ。

「どういう人？」

「謎な人。でもね、きっと私の運命の人なんだ」

マリアが多分うさんくさそうな顔をしているに違いない。

マリアはそういうことはあんまり好きじゃないみたい。

「運命かぁー見つかるといいね」

「うん！きっと見つかるわ」

船がひととき大きく揺れると、ぼおおと大きく汽笛が鳴った。

「ついたみたいだね」

「そうね」

入口に近い人からまばらに出ていつている。

「ねえ、もしよければ私も一緒にあなたの故郷に行ってもいいかし

ら？」

「いいよ。ね、ハイルド」

「ええ、構いませんよ」

「ありがとう。一人旅はさみしいもの、助かったわ」

「よいつしよつと荷物を担ぎ直してユキはまた笑った。」

「それに、まだ占いしてあげてないわ」

「そうだね」

船から降りると、すぐに馬車を捕まえて3人は乗り込んだ。

この町で宿をとつてもよかったが、明日になると馬車が混んでしま
うそうなので今日中に村に着く方法を選んだ。

「すぐ捕まつてよかったですね。村には森を横断して4時間ほどで
着くそうですよ」

「結構時間あるねー」

「そうだ、ニーナ。今のうちに占いやつてあげるわ」

手をぱんと打ってユキは大きなカバンに手をつっ込んで丸い球を取
り出した。

「水晶玉？」

「そうよ。これに手を置いて」

なんか本格的！ロゼリアは言われたままに手を置いた。

ひんやりしていてつるつるだ。

「目を閉じて——誕生日は？」

「春節りの25日だよ」

「……何それ」

目をあけると、ユキはきょとんとした眼でこちらを見ている。
なにつて、誕生日だよ。

「一月とか二月とかじゃないとわからないわ」

「そんなこと言われても困るよ」

「じゃあ、一年は何月あるの？」

「えーと、12だよ」

「いつから数えるの？」

「春からじゃないの？」

二人して首をひねる。

「お正月はいつなの？」

「お正月ってなあに？」

「年おさめの日のことよ」

「ああ、冬閉の30日だよ」

「じゃあ、その次の月を一月だとしたら、あなたの春咲は何月なの？」

ややこしいなあ。

冬名残、春始め、春咲、春飾り……

「4月？」

「ややこしいのね」

一度二度、頭をかいてから、思い出したようにフードを再びかぶる。

「じゃあ、もう一度ね。これに触れて目を閉じて」

言われたとおりに目を閉じて、水晶に手を置く。

それだけなのに不思議と落ち着いた気持ちになれる。

「誕生日は？」

「4月25日」

「年齢は？」

「18」

「フルネームは？」

「ニー……ロゼリア・カシユー」

「……！」

マリアがすごく反応した。

あ、つい本名言っちゃった。

偽名キャロットって言ってた気がしたけれど、なんとなくカシユーって自然と出た。

よく考えれば、今から実家行くしその方がいいかもね。

うちの答えを聞いて、ユキが何事かつぶやくと、水晶玉がなんとなく

く暖かくなつたような気がした。

「……出たわ。もう目をあけてもいいわ」

目をあけると、雪はまだ目を閉じていた。

「よくない運勢みたい。とっても良くない」

しみじみと言われちゃった。

しかも眉間にしわを寄せている。どんだけよくないの？

「これ以上進むのはやめておいた方がいいかも。でも、戻るのも得策ではないわ」

「うちにどうしろと？」

このまま停止、というのは森の真ん中で危ない上に馬車のおじさんが了承してくれるわけもない。

「進むための幸運の力ギは……女装？」

ユキは目を開いた。

女装……ユキの視線の先にはもちろん、マリアがいる。

「何故」

マリアは真顔で問うた。

「さあ、占いでそう出たから何とも」

「悪いことって何？ 事故とか？」

「さあ？ 誰かさんが微妙に真実と違う情報を言うから詳しいことはわからないけれど、痛いこと……みたいね」

真実と微妙に違うこと……？

あ、うちそういやウエルセントだった。

「ニーナって、偽名だったのね。なおかつ誤情報があるみたいだけど？」

「ごめんね、嘘ついてて。本名はロゼリア・ウエルセントっていうの。カシユーの方がなじみ深いからつい口から出ちゃった」

これは本当。

「別に名前を隠すのは悪いことじゃないわ。……で、どうするの？」

「どうするって？」

「ハイルドさん」

二人してもう一度マリアを見る。

マリアは少し考えてユキの方を見据えた。

「女装すると痛いを目見ないですむのですか？」

「さあ、わからないわ。でもないよりはいい状況になるでしょうね」

水晶をかばんにしまいながら、「どうします？」とマリアに問うた。

「わかりました、一応貴方を信じてみることにします」

「そう、一応でもうれしいわ」

答えがわかっていたのか、ユキは水晶の代わりに手に化粧道具を持っている。

左手には女性用の服だ。

「さ、メイクしましょうか？」

うちは心の中で、マリアは結局女装する運命なんだなあ。

なんて結構失礼なことを思っていた。

……似合ってるから別にいいじゃん

22 ロゼリア、占う（後書き）

マリアは冬生まれっぽい

キャラメルは秋

バル君は秋？

ドリーちゃんはきつと春だろう

23 ロゼリアの雨罌（前書き）

今回

ギヤグ少なめ注意！

- 占いの厄が訪れる！？

23 ロゼリアの雨傘

「すごいわね！本物みたいよ」

その視線の先にはもちろん、ユキによりいつもの三割増し女性化したマリアがそこにいる。

満足のいく仕上がりになったのか、ユキはうれしそうにそう叫んだ。
「……どうも」

もちろん女装を褒められたところで嬉しくないのだろう、かなり複雑そうな表情で口元がゆがんでいる。

「本物の女の子よりも綺麗だよ」

フォローのつもりでうちが言つとさらにマリアは落ち込んだ。
あれえ？

「あら？雨が降っているみたいね」

化粧で盛り上がっているうちに、外は暗く、ついでに雨まで降っているらしい。

「悪天候だから、なにか自然的な事故でもあるかもね」

先ほどの占いにあてはめて考えたのか、縁起でもないことをユキはつぶやいた。

「えー。でもさ、こうしてちゃんと女装させたのに？」

「別に生贄を捧げるとかそういうんじゃないんだから」

それじゃあなぜ自分は女装させられたのだろう。と、口には出さないがマリアは思った。

「何がどう具体的に起きて、それをどう回避できるのかは、とても調子がいい時じゃないとわからないわ」

ユキは自信満々でそう言い切った。

なぜそんなにも自信満々で言いきったのかよくわからないけど「ふーん」で納得しておくことにする。

「とはいえ村まであと1時間弱、女装のおかげで何事もなく過ごせるかもね」

なんとなくマリアを女装させたものだから、マリアを生贄にゝ的な展開が待ち受けているような気がしなくもない。

そんな展開になったら困るのだけれど、すこしRPG的な要素を期待してしまう。

「そうだったら、うち絶対助けに行くからね！」

「何の話ですか!？」

あ、途中でつい話かけちゃったけどこれはうちの脳内妄想の話だった。

失敗失敗。

「なんでもないよ」と言おうとしたら、思い出したようにユキが手をポンと打った。

「そうそう、貴方達の本当のこと教えてちょうだいよ」

「本当のこと？」

好奇心が強いのか、でばがめなのか。

目が爛々と輝いていて何が何でも聞く気満々のようだ。

「そうよ、隠していたんだからそれなりの事情なんだろうけど……ばらしたりしないから、教えてくれない？」

言葉は控えめのようなが。

「うん、いいよ……ってマリアが言ったら」

思わず了承しかけたところで、マリアを思い出して隣を見る。

「マリア？ハイルドさんの本当の名前ってマリアって言うの？」

「あ！あちゃ」

つい口が滑っちゃった。

でももつうちの名前もばれてるしいいよね。いくない？

「ね、マリアさん、できればいいんだけど話してくれないかしら」

マリアに噛みつかんばかりの勢いでユキはずいとい迫った。

ここでマリアが断ったところでうちにまた戻ってきそうだ。

「……仕方ありませんね、絶対に公言しないと約束してくれますか？」

「もちろん！どこから聞かせてくれる？」

「それじゃあねー」

どこから教えてあげようか。

やはりあの特別な誕生日から始めるべきだろう。

話を終えるころにはすでにその村にはついているだろうな。

——ごうんっ

「！」

「なに？！」

話が盛り上がってどれくらい経っただろうか？

馬車が急に揺れた……停まったようだ？

村に着いたにしては随分乱暴で、不吉な停まり方だ。

馬も尋常じゃない、興奮した様子で啼いている。

「どうしたの？」

不安そうにユキは小さい窓のカーテンを開けて外を見ようとしたのを、マリアが手で止めた。

「静かにして、なるべく右に寄ってください」

この馬車は左に扉があるので、ロゼリアとユキは頷いてその行動をとった。マリアが扉に警戒しながら武器をスカートに隠しこむ。

扉のすぐ外に、何者かの足音がする。

「……」

自然と呼吸が荒くなる。

ユキなんか小刻みに体が震えている。

その手をぎゅっと握りしめると、弱弱しくうちに微笑みかけた。

「……」

やがて、馬の鳴き声は消え、足跡も消え、雨音だけが強く響いている。

どれくらいのがきが立っているのだろう。

一秒が数分、一分が数時間のように感じられる。

獣なら、このままやり過ごせるが——人間なら？

——コンコン

「……………!!」

ノックの音だ。

その音にびっくりして悲鳴をあげそうになったユキの口をとっさにふさぐ。

「もし？どなたかいらっしやらないでしょうか？」

外から誰かが話しかけている。

初老の男の人の声だ。穏やかで、気の弱そうな……どこかでこの声を聞いたことがある？

——こんこん

二度目のノックだ。

「もし？私は怪しいものではございませんよ、私はこの先の村のものです」

この先の村といえば、目的地の村のことだろう。

あの村に人間など数えるほどにしかない。

ということは声だけでは判断しかねるが、この人は知り合いなのかもしれない。

「この馬車の馬がどうやら怪我をしたようなので村で用意した馬車にお乗りください」

「それはわざわざありがとうございます……馬はどのような怪我をなさったのでしょうか？」

マリアが低めの声でそう尋ねた。

「どうやらこの雨で足が滑ってひねったようでございます」

「運転手は何をしているのでしょうか？」

「……その馬の手当をしております」

怪しい。運転手がいつまでも客を放って置くだろうか？

それに、馬が足をひねったのならもっと大きな事故になるのではないだろうか。

「どうして、あなた様はそんなに早く我々のもとにお出でになられ

ることが出来たのでしょうか？」

「……お客さん……わ、私をお疑いですか？私は外に出稼ぎに出ているものです。帰りがたまたま一緒になったところ、このような場に遭遇したのでございます」

「そうですか、それは失礼しました」

全く思っていないような顔でマリアが表面上だけ失礼を詫びた。明らかに怪しい。

「あのっ」

うちが質問しようと口を開いたら、マリアにふさがれた。

「代わりに私が聞きます」

「名前を聞いて、マリア。うち村の人ならほとんど知っている」

新しく生まれた子供まではさすがにわからないが、この声の年代のおじさんならほとんど知っているはずだ。

マリアは頷くと扉に向かって問いかけた。

「私たちはこの村の縁故のものです、あなたはなんというお名前でしょうか？」

「私は、大きな一本木が目印家に住んでいるのパーツというものです」

「エデックおじさん！？」

きつとそうだ。

つい声を荒げるとユキが期待した顔でうちを見つめた。

「知り合いなの？」

「うん、うちと同年代のメアトのお父さん」

うちが小さい頃は父ちゃんたちが仕事で忙しい時メアトと一緒に面倒みてくれたっけ。

「ああ、その声はロゼリーか？」

自分の愛称を呼ぶ懐かしいような、そして少し不安げな声が扉の外から聞こえた。

「そっだよ、エデックおじさん」

うちは懐かしさで嬉しくつい声が弾む。

「……あ、ほら、それじゃあそろそろ出ておいで……老体にはこの雨は冷たすぎる」

確かに、ずっと雨は降り続けている。

傘をさしていたとしても、外はだいぶ冷えるだろう。

そのせいだろうか、声も少し震えている。

「マリア……」

「だめです、怪しすぎます」

「おじさんは優しい人だよ。ちょっとさぼり癖があったけど」

「どちらが正しいのかわからないけど、もういつそ覚悟を決めて出ましようよ」

「しかし」

意見が分かれる中、ユキが未だ不安脱ぎ去らぬ顔色のまま言った。

「あの人がいい人なら助けてもらえるし、悪い人だとしたらこのままでもどちらにしても襲われるわ……怖いけど、でましよう」

「そうだよ、おじさん風邪ひいちゃうよ」

マリアは少し考えて、ゆっくりとうなづいた。

「わかりました、ただしもしもの時は自分を優先して逃げることにいいですね？」

「……」

あのおじさんに限ってもしものことなんてない。

でももしものことがあったとして、その時みんなを見捨てるなんてできない。

「……うん、わかった」

でも今はそう言うしかない。

「すみません、パーツさん、お待たせしてしまって」

マリアが改めて声をかけた。

「あ……ああ。いえいえ……」

「私が一番に出ます……安全を確認してからお二人も出てください」
マリアが扉から出る。

しばらくしてからうちも出る。

それで、ユキも出てきた。

暗い森にはおじさんしかない。

馬車もない。

「……パーツさん、運転手さんはどちらでしょう？」

そして、うちらが乗ってきた馬車につないでいたはずの馬も、その運転手もない。

「……それは……」

おじさんが言葉を濁していら、ユキが叫んだ。

「マリアさんっ！後ろ……！！」

「なにっ！……ぐっ！」

いつの間にかいた男がマリアの後頭部を強く殴りマリアは倒れた。馬車の影に潜んでいたのだろうか。

見るからに犯罪者のような男たちが5人さつとでてきて、うちらを取り囲んだ。

「だれだよ、善人そんな爺使えばすぐに出てくるつつったの」

「いつもの倍時間かったじゃねえか」

ちげえねえ、と下品な笑いを浮かべて男は気を失ったマリアを担ぎあげた。

「ほう、なかなか上玉じゃないか」

その顔を見て、男はにんまりと笑った。

「マリアっ……！きゃあっ！おじさん！？」

マリアに近づこうと思ったら、後ろからおじさんにつかまれる。

「マリアさんっロゼリア！きゃああっ！ちょっと、放してよ！」

ユキも捕まったのか、悲鳴が聞こえる。

雨を含んだ髪が、服が、重さを持って思うように体が動かない。

「おじさん？どうして……？！」

優しく、おもしろかったおじさん——信じてたのに！

「ごめんなあ、ロゼ」

おじさんは、泣きそうな声でそういった。

泣きたいのは、こっちだよ、おじさん。

23 ロゼリアの雨罨（後書き）

珍しくシリアス

おじさん、伏線しいとくのわすれたおじさん
今思い出したよ。ごめんよー

24 ロゼリアたち + α (前書き)

アンケート楽しく見させていただいております
ロゼリア圧倒的に人気です
さすが主人公!! (。ω。)

24 ロゼリアたち + α

どうしてこうなった。

安っぽい縄で雑に縛られた腕を見つめながら深いため息をついた。がたがたと荒い運転で馬車が揺れて乗り物酔いしそうだ。

この場は暗く、聞こえる音といえば雨音とおじさんの声くらい。

「ごめんねえー」

おじさんは先ほどからずっと謝罪を繰り返している。

謝るくらいならここから逃がしてほしい。

もともと荷物をおくはずの場所に、見張りのおじさん以外にはうちらしいない。

と思っていたら、もう一人、見知った人物がいた。

「あのさあ、ねえ、おっさん、それいい加減聞きあきたから、黙ってくんないかなあ？」

不機嫌そうに口を尖らせたまま、彼女——ミケはおじさんをにらんだ。

「……で、なんでミケも居るの？」

確か南に行くとか何とか言っていたような……まあ、行動範囲の広い彼らのことだからあまり驚くことでもないのだろうけど。

「ちよつと街で失敗しちゃって大騒ぎになっちゃってねえ？そのぼろ村でしばらく身を隠そうかと思っていたらこいつらに捕まっちゃったってこと」

「ねえ、口……ニー……この人と知り合いなの？」

ロゼリアと呼ぶか、ニーナと呼ぶか考えたらしい。

「もうロゼリアでいいよ。うんとねー知り合いっていうか……顔見知り？」

ミケの方に視線を送ると、ちよつと考えて「そんな感じで」とうなづいた。

「へえ、私ユキっていうの。よろしくね……えつとミケちゃん？」

「よろしくしてる場合が分かんないけどねえ」

ちなみにマリアはずいぶん雑に殴られたのか気絶したままだ。
絶対仕返ししてやるから覚えとけよおお。

「それにしても、暇だよねえ。寝ようにも、ここ狭いし」

とうとうにあくびと一緒に伸びをしながらミケがだるそうにつぶやいた。

「あなたって、ずいぶん楽天的なのね。こんな状況なのに平気なの？」

「クロさんたち心配じゃないの？」

「んあ？一気にそんなに聞かれても」

ミケはちよつと困ったように視線をさまよわせてから、肩を軽く上げた。

「にいにたちならねえ、きつとすぐに気づいて探してくれるだろうし……あたしだって全然平気ってわけでもないけどどうせどこに連れていかれるか予想ぐらい付くからまだ余裕っていうかねー」

「どこにいくのかわかるの？」

少し、食い入り気味にユキはミケの方へにじり寄った。

「まあねー奴隷といえば、とりあえずユエルだろ」

「なんで？ていうかどこ？」

ユエルかー。聞いたような聞いてないような。

「ユエルって大きな川があるところでしょ？国外と貿易としている街」

なぜかユキの方が思い出したように尋ねた。

うちはさっぱりわからない。

「そうそう、自国で奴隷売るよりも他国で売る方が珍しがって高く売れるからユエルから国外へ輸出するのがよくある手なんだよ」

ミケはまるで経験でもしたことがあるのか、良く知ったように口にした。

「じゃあ、国外に売られちゃうのかなあ」

いろんなところを見て回りたいとは思ったけれど、まさか他国に行

くなんてなあ。

「やつぱり、売られちゃうのかしら……奴隷なんて考えただけでもいやだわ」

「まあ、売られちゃうのは仕方ないよねえ。あたしらのほうが弱かったってことなんだからさ」

「なにそれ？どういうこと？」

「強いやつに生きるために糧にされる。弱肉強食、仕方ないこの世の仕組みだよねえ」

本当にそう思っているのだろう。納得した表情でうなづいている。

「うん。でも、そう簡単に売られるつもりもないけどねえ」

「ああ、ビックリした。諦めているのかと思ったわ……それでどうするの？」

「この天気でしょう？国外に売ろうにも河が荒れていちゃ国外に船が出せない。陸路をいくにも関門が厳しいし、国内の人間を国外に売るのは基本的に禁止されているし」

「へえ、そうなんだー」

「くわしいねえ」

おじさんとうちはへえーほおーとしきりに感心している。つて、いやいや、おじさんは一味として知っておこうよ。

「となると、数日はユエルで地道に国内で売買すると思うから、引き渡す隙に逃亡するつもり」

「そううまくいくかしら？」

言うだけならもちろん簡単だ。

ただ現実はそのくらいだろうか。

ユキは疑わしそくにそうミケを見た。

「うまくいけなきゃその程度の運命だったってことでしょ。そうなたたらあたしはあきらめて新天地で自力でいにたちのもとに戻る努力をするよ」

その視線を小馬鹿にしたようにミケは見返す。

その好戦的な視線にユキは少しむっとしたようだ。

「ていうか、一応おじさんいるんだけど、そんな作戦暴露してもいいの？」

「うちは今にも喧嘩しそうだったので水を差してみた。」

「……脅しとけばいいんじゃないかなあ？」

「そうだ、脅しが効くなら、いまから脅してここから逃げるっていうのはどうかしら？」

「どうやら肉体的脅しは決定らしい。」

「おじさんは青い顔して馬車の端っこの方に逃げた。」

「今逃げたってこの天気じゃあ体力の差があるうちらじゃすぐ捕まっちゃうよ。それにマリアはまだ気絶したままだし」

「あたし一人ぐらいなら気づかれず逃げれそうじゃない？」

「なにそれ、ひどい！」

「もともとミケとはそれほど深い仲でもなかったのでそういう発想ももちろんありだと思うけど、一期一会がモットーらしいユキはたいそう不服なようだ。」

「……この二人って案外気が合いそうだったのだけれどそうでもないみたい。」

「とりあえず、おじさん」

「うちは端っこで体操座りしているおじさんを振り返った。」

「逃げるのくらい協力してくれるよねえ？」

「もちろんそれはお願いじゃなくて圧力だけど。」

「う……うん、もちろんだよ口ゼ。おじさんだって本当はこんなことしたくないんだからさあ」

「いかにも気の小さいおじさんらしい答えだ。」

「……う」

「マリア！」

「うちはマリアに近寄る。」

「眉を潜ませ、頭痛に耐えながらマリアは目を開けた。」

「ここは？」

「あの人さらいの馬車の中だよ」

「守れず……申し訳ありません、すぐに逃げなくては……つつ」
起き上がるうとして、痛みが走ったのか、すぐにまた倒れた。

「無理しなくていいよ！一応作戦らしくない作戦だつて立ててるし」
「そりゃ悪かったねえ」

だつて本当に作戦つて言い難いんだもん。

マリアの横に座つて、おじさんに指示してマリアの頭をうちの膝の上に乗せてもらう。

「これで、少しはまし？」

「そんな、恐れ多い……私は大丈夫ですから」

マリアはかぶりを振つてまた起き上がるうとするから頭突きをしてとどめる。

「つつ！」

「ろ、ロゼリア。頭怪我している人に頭突きはちよつとどうかと……」

……

「だつて遠慮して起き上がるうとするんだもん」
手は背中で縛られてて使えないし。

「あ。そつか。じゃあおじさん縄切つてよ」

「じゃあがよくわかんないけど、ごめんねえ、おじさん縄切るナイフ持っていないんだよ」

「手でほどこやあ」

ミケはどうやらおじさんのようなタイプの人間が嫌いなのかいらいらしたようにそう投げかけた。

「じゃ、じゃあ」

おじさんは一番怖くないと判断したユキの縄を取り外しにかかる。

……。

……。

「あの、まだ？」

「おかしいなあ、硬くてなかなかほどこけない」

「このおじさん使えないにもほどがない？」

おじさんは少し傷ついたのかしゅんとしている。

「じゃあ、おじさん、私の荷物がどこにあるか知っていますか？」

「荷物？多分それなら他の仲間が馬車で闇市へ売りに行っていると思うけど」

「闇市！？私の大切な荷物が！！！」

それを聞いて急にユキは大声をあげた。

「やだ、ちよつと本当にあの荷物！あのなかには、あの人からもらった大切な――」

「ざまあ」

「ちよつと！ミケちゃんひどくない？」

「いえ、本当にもう平気ですから」

「だめ！ねえねえおじさん、なんか湿布とかないの？」

「ないねえ」

「おじさん本当役立たず！」

一気に馬車の中がわいわい（？）盛り上がる。

「うるせえぞてめえら！見張りちゃんと黙らせろ！！」

怒鳴り声ですぐに静まることはなかった。

24 ロゼリアたち + α (後書き)

おじさん不憫。

部屋の掃除しました。

そして、ロゼリアの国付近の地図をちよちよいと

メモしていたやつを捨ててしまいました(多分)……orz
どうしよう

25 ロゼリア、どうなる？（前書き）

（- 困 - ）

25 ロゼリア、どうなる？

あれからどれくらい時間がたっただろうか。

「……ふあ」

つい眠ってしまったのか、目をあけるとそこは薄汚い小屋のなかのようだ。

「よくこんな状況下でのんきに熟睡できるねえ」

ミケが半眼であきれたようにロゼリアを見やった。

「ここは？」

「お待ちかねのユエル。運が悪いことに雨がましになってきたからって船を出すらしいんだよねえ」

思ったよりもだいたい早くユエルについたらしい。

しかも船が出るとなると……占いの不運はどこまでも続くようだ。

日付が変わっても有効なのだろうか？

「チャンスは一度。ここから船に移動させるために男たちが扉を開いた瞬間ですね」

「そうね……うまくいくといいけれど」

マリアの言葉に不安げにユキは頷いた。

室内が暗いために、誰がどこにいるのかわからなくなてしか把握できない。

言葉は途切れ、それぞれただ黙って虚空を見つめる。

粗末な小屋には窓がないために外の様子をつかがい見ることはできない。

おじさんはどこに行ったのだろうか。

どうやら壁際にいるらしいロゼリアは背中を壁に預けると、かすかに外側から数人の足音が雨音に交じって聞こえる。

「誰かくるみたい」

「あの役立たずのおじさん？」

「さあ」

みな一様に扉の方へ視線をよこした。

すると、ちょうどタイミングよく扉が開いた。

なんとも豪快に、荒々しく開けられた扉からは多分人さらいの一味じゃないだろう男が居る。

暗くて顔は見えない。

「暗いな」

どこか聞き覚えのある声がそう一言言うと、後ろに控えていたのであろう人さらいが「へえ、ただちにつけますんで」とへこへこしながらランプを持ってきた。

暗かった部屋に心もとないが光がともる。

闇に慣れきった瞳には、そのかすかな明りも強く感じられた。

「暗いな」

「後で仲間がいくつか持ってきますんで、今はこれで」

「ふんつまあい……言っていたのはどれだ？」

男は灯りの範囲から出ているので顔がよく見えないが、この態度からするに人さらいの統領か客かどちらかだろう。

「こいつですよ、ダンナ」

どうやら客のようだ。

ランプをもった男がぐいっとうちの顔を照らした。

「むう」

眩しい。

「ああ。こいつだ、こいつ」

顔を照らされたとはぼ同時に両頬をがちりとつかまれてぐいっとう引っ張られる。

「ふふああ！」

「ぎやははは！」

顔をいじられてあんまり上品とは言えない声をあげて笑う。

「はなひひえひよー！」

「その手を放せっ！」

両手が使えないために顔を振ってのけようとしたって向こうの手が

外れるわけもない。

マリアが男を睨んで飛びかかるうとしたが、マリアが行動を起こす前に男はうちから手を離れた。

「おお、怖い怖い……で、いくらだったか？」

人さらいの男たちのほうへ向いた。

これは、うちお買い上げの方向？逃げる暇とかないじゃない。

と、思ってたなんとなく視線をそらすと多分シルエットにミケがこそこそと移動している。

あの子一人だけ逃げる気満々だ。

入口にも一人か二人いるけど、あのくらいならミケなら逃げられるのかもしれない。

「なんだ、思ったよりも安いな……おつと！」

「！」

一気に出口まで駆けだそうとしたミケの気配を感知したのか男は素早い動きで闇の中を動いていたミケの足を引っ掛け、倒れ込んだところで背中を踏みつけた。

「——ぐっ！！」

「ミケっ！」

「大丈夫？ミケちゃんっ！」

「あん？お前ら、ロゼリアの友達か？」

「そうだよ！だからミケを離してよ！……あれ？」

今、この男はうちの名前を言ったような……。

おじさんが教えたのだろうか？

ちょうど、ランプを持ってきた男が二人やってきて、部屋の中がやっつと見渡せるようになった。

「……あ」

ミケを踏みつけている男は、確かに知っている男だった。

赤毛に、オッドアイ。

「久しぶりだなあ、ロゼリア」

口角をあげてにいつと笑ったその男は……その男はってか、この男

の名前をロゼリアは知らない。

マリアが長いスカートに苦戦しながら、うちをかばうように前に立ちはだった。

けど、うちはこの男を思い出すにの苦戦中。

「あーえーと、ほら、あの人だよ、うん、うち大丈夫覚えてるよ」

「いいから、足をどけるよ」

足の下からミケが絞り出すような声を出した。

「ああ、思い出した。《雪山のイケメン》でしょ。そうでしょ。足のけて」

自称雪山のイケメンはあのころに比べてずいぶん体格もしっかりしてきて髪も伸びているが、えらそうな俺様オーラは変わっていないというか、悪い意味で成長しているように感じられる。

「そういえば、俺の名を聞かせてなかったな」

おお、うつかりという感じに頷いてから、やっと足をのけた。

自由になったとはいえ、結構の力で踏みつけられていたミケはすぐには起き上がれずによろよと身を起こした。

「大丈夫？」

なんとなく入口をみると、ナイフを持ってきたおじさんと目が合った。

が、おじさんは他に人がいることがわかったとナイフを懐にしまって引っ込んだ。

おじさんまじ役立たず！

「ボスさま、まだスか？そろそろ裏便でちやいますよ」

おじさんに入れ替わりに、染めているのか、真っ青な髪メガネがいかにも面倒くさそうに出てきた。

「あーわかった」

それにまた面倒くさそうに雪山のイケメンは返事した。

「また例の女探ですか、そんななりしてるくせに意外と純情なんスね」

「口を切りたいのか」

「僕、入口で待ってますね」

さつさと逃げた男を見送って、うちはなんとなく自称雪山のイケメンを見た。

「ボスって名前なの？」

「なわけないだろう。ボスにさまをつけて呼んでいるだけだ」

「それってなんか変じゃないの？」

「ロゼリアさま、変な人と喋ってはいけません」

「だれがだ」

「ふーん」

「それはどの返事に対してのふーんだ」

なんだか今までの空気が一気に緩まってユキさえも思わずあくびを漏らす。

「ダンナ、お買い上げなら早くしてもらえませんか。あとがつかえてるんで」

男が手をこねながら伺いを立てると、ボス様は少し考えてうちをみた。

「ロゼリア、こいつら全員知り合いか？」

「そだよ。おっさんたち以外」

あ、おじさんは知り合いか。いやでもうーん。裏切り者だし、他人！

「じゃあ、売人、ここの女全員もらおうか」

「え！」

一番反応したのはミケだ。

心なしが青ざめている。

「そりゃあ、こちらとしても願ったりで……お代の方は？」

「さっきの青だぬきが財布持っているからもらってこい」

「へえ、毎度あり……おい」

数人のおっさんが青だぬきのほうに金を取りに行った。それから残ったおっさんたちがうちを含め全員に猿ぐつわを噛ませた。

「んんっ！」

ユキがいよいよと抵抗する。

今持ってきている大きな箱に突っ込むつもりようだ。

コンテナのような箱だ。ちゃんと酸素穴はあるようだがとてもじゃないが快適とはいかないだろう。入りたいとは思えない。

「ああ、ロゼリアだけは別だ」

ボスさまはうちの肩をぐいっと抱くと猿ぐつわを外した。

「！」

マリアが怒ったようにまた暴れそうだったが、数人がかりで箱の中に入れられる。

ユキは不安げにうちを見ながら、ミケはもうこの世の終わりのような表情で入れられていった。

「……金もちなんだね」

「俺を誰だと思っている」

知らない。

ボス様は今にも鼻歌でも歌いそうなほどの上機嫌のまま歩きだした。人の腕をつかんだままだから、歩きにくい。

「いい加減、名前聞かせてくれないの？」

雪山のイケメンやらボス様やらいにくいつたらありやしない。

「知りたいか？」

面倒くさい。

けれどもまた持ち上げておかないと言いそうにもないので適当に頷いておく。

「うんうん、知りたいなー」

「そうかそうか俺はな……そうだなー高貴すぎてフルネームを教えるのはもつたいないから特別にエディさまと呼ばせてやろう」

「エディさまねーはいー」

うちはなんだか疲れておざなりに返事した。

外は白夜。ゆつくりと朝が舞い込んできている。

「ああ、ボス様。急いでくださいよーていうか、買いすぎっスよ。バカなの？」

船の入口で待機していたらしい、青だぬきがあくびしながら出迎え

た。

「死にたいのか」

「さあ、船に置いて行かれないように、母国へ帰りましょう！」
目線をそらしながら青だぬきと呼ばれる男が船に向かって指をさした。

この船に乗ったら、きっともう逃げるチャンスはない。

だけど、マリアたちが入れられたコンテナはどれかもわからない。
うちは、覚悟を決めて船に乗り込んだ。

25 ロゼリア、どうなる？（後書き）

次回、他国？のかな。

雪山のイケメン、覚えている人はいるでしょうか

26 ロゼリアと本の山（前書き）

他国にあります。

26 ロゼリアと本の山

前略、お父様お母様お元気ですか？……どっちの両親に当てはまるのだろうか。

「ふあ〜」

ロゼリアは手に持った竹箒をだらだらと動かしながら大きな欠伸をした。

雪山にいた自称イケメン改め、エディに買われたロゼリアたちは、いま、彼の出身国である土地の、首都にいる。

ちなみに、この国の名前は 旧ハルトカルド新バルドガルド大帝国だそうだ。

旧ハルトカルドはいらないんじゃないかと思うが、旧から帝国までが正式名称らしい。

長いにもほどがあるだろう。新と旧ほとんど変わってないし。略してハルガード帝国。このままでいいんじゃないだろうか。

そうそう、エディのあの傲慢な態度からしてすでに皆さんおわかりだろうが、彼はこの帝国の王子様らしい。

うちはなんとも王族と縁があるようだ。

兄弟は何人もいるらしいが、今のところ王位継承権第一位らしい。

そんな人がなんで他国で奴隷あさってるのかさっぱりだよ。

で、エディに連れてこられたうちらは、次の日からそれはもうこき使われている。

雑用から身の回りの世話まで。

「ん〜」

王族ってみんなお城で暮らしているのかと思ったが、それ相応の年齢になったらそれぞれ個人の城に移るらしい。

だから、ロゼリアたちがいるのはエディのお家というわけだ。

箒を足の間ではさみこみ、両手を天に向かって大きくのびをする。

朝から窓ふきだ草抜きだ、落ち葉ひろいで、ずーと働きづめでほ

とんど休んでいない。

エディに支給された作業着は、メイド服というよりは、ウェイトレスの服のようだ。

そついうとほとんど変わりがないように聞こえるけど、こちらの方が布が少なくて、フリルが多い。

でも、なぜか仕込み武器がセットでついてきているので重い。

「おーい、さぼってんなよう？」

庭の奥から出てきたのは、同じ制服に身を包んだミケだった。

水掃除でもしていたのか、手にはバケツとぞうきん。

「さぼってないよ？」

「別にいいけど、さぼってるのばれると痛い目みるよ」

「ふーん。そうなの？」

「そう」

ミケはなんとなくこの国のことをよく知っているようだ。

「もしかして、ミケってこの国出身？」

「そう」

先ほどと同じような声のトーンでミケは返事をした。

そして、バケツをもって水汲み場まで歩いていつてしまった。

「じゃあ、なんであんなに嫌そうだったんだろ。よっぽどいやな国なんだなあ」

なんとなくそう思うと余計に帰りたくなってきた。

ミケとロゼリアは同じ仕事エリア担当だけれど、ユキとマリアはどこだろう。

マリアは怪我は大丈夫だろうか。

「ロゼリア、さぼるな」

「！」

ついにーつとしていたら、ふいに後ろから声をかけられつい体が跳ねる。

「……って、なあーんだ、エディ……さまか」

ミケに脅されたばかりなので痛い目にあわされるのかと思った。

……いや、良く考えたらこの人物が一番偉い人なんだから一番見つかっちゃだめなんじゃないか？

「……」

「なあんだとは心外だな。サボるな、おまえが元貴族だろうが、ここでは奴隷だちゃんと働け」

元の元は田舎の貧乏人でしたけどね！

「はあい」

それ以上とくに咎められるようでもないので箒をもう一度ちゃんと動かす。

掃除は嫌いじゃないが、ここの掃除は嫌いだ。

ちょうどそういう時期なのか、背の高い木の枯れ枝が上からばきばきと際限なく落ちてくるのだ。きりが無いし、なによりたまにあたって痛い。

掃除を再開したうちを見てエディは満足そうにうなづいた。

「よしよし……」といっても、今日はその仕事はもういい」

「へ？」

じゃあ、次の仕事は何だろう。

めんどくさいことのように感じて思わず顔をしかめる。

「そんな顔をするな。おれさまについてこい」

「ついてこいつてどこに？」

「ついてくればわかる。黙ってついてこい」

そういつて踵を返したので、うちは慌てて引きとめた。

「まって！この途中の掃除どうしたらいい？」

うちが今まで苦勞して集めた枯れ枝たち。

イモでも焼くのに使ったらよく焼けそうだ。

「放っておけ」

どうでもよさそうにエディが言うので、その言葉通りに箒も足元に置いてから彼について行った。

正直に言えば、面倒くさそうなおいがするからあんまり行きたくないなあ。

いやいやついて行った先は、やっぱりというかなんとというか、お城。エディは勝手知ったるといふ風にずんずん進む。

もちろん、兵士たちはエディの顔を知っているのでだれも咎めたりなどしない。

歩くスピードが速い上に、もとの足の長さのリーチもある為にうちはエディについて行くのに必死だ。

お城の形は、リングベルのものに比べると、いささか質素というか、重圧的だ。

あまり建築のことは詳しくないが、作っている材料が違うのだろう。

壁とか床とか、なんかすごく固そう。いや当たり前だけれど。

そして、廊下が開放的なリングベルのものとは違って、まるで迷宮のように入り組んでいる。

というか、広いし長いし似たような廊下が多すぎて迷子になりそう。

だ。

「どこにいく……んですか？」
敬語を使うのは苦手だが、一応雇い主表面上だけでもそれらしく振舞う。

もちろん、いつか出て行ってやるけどね！

「ついてくればわかる」

そればかりだなあ。

この男は勿体付けるのが好きなようだ。

ミケも勿体付けて喋るのが好きだから、お国柄なのかもしれない。

「ここだ」

しばらくついて行くと、ちょうど、廊下の端にぽつんと扉が。

その扉の前には兵士もなく、ただ静かに佇んでいる。

エディは不躰にもばあんと勢いよく開ける……のかと思ったら、意外にもちゃんとノックをした。

扉についている、趣味がいいとは言えないデザインのライオンが噛

んでいるリングを持って扉に打ち付ける。

「エディです」

おお、ちゃんと名乗るのか。

「どうぞ」

中から返答が戻ってきたのを確認して、エディは扉を開け中に入っ
た。

「失礼します」

うちも挨拶をしてから同じく部屋に入った。

何というか、ごちゃごちゃした部屋だ。

さまざまな大きさの本が山積みになっており、少しでも振動を与え
たらすべて崩れそうだ。

そんな本の山の間には何かが書かれている紙が所狭し敷き詰められ
ているので、歩く場所がない。床も本のせいで数センチ本来の床よ
りも高くなっている。

エディは慣れた様子で靴を脱いで、本をよけながら書類と思われる
紙の上をなるべく傷つけないように歩く。

何その作法。まねしないとだめ？

うちもしぶしぶ靴を脱ぎながらエディの通った後を同じようについ
て行く。

これだけ広い部屋をよく埋め尽くすだけの本を持ってきたものだ。

先ほど返事したはずの人間が見えないのはなぜだろう。

「どちらにいらっしゃいますか？」

エディも見つけられなかったのか、大声で問うた。

「このあたりです」

あやふやだがすぐに返事が戻ってきて、エディが方向の目星をつけ
て再び歩きだす。

「おっと」

うちもだいぶふらふらしながら追う。

どうやら、声の主はあのひととき大きな山の向こうにいるらしい。

エディが遠回りしようとしたら「只今、搜索中ですのでしばらくじ

つとしてお待ちください」と声の主がそれをとめた。
搜索中。

何か大事な書類でもなくしたのだろうか。
なくすだろつなあ、ここまでぐつちゃぐちゃだったら。

エディがその声を聞いて止まったので、その間に近くに寄ろうと足を伸ばした。

ぐに。

「……？」

ぐにぐに。

なんだかここだけものすごくやわらかい。

と、下からにゅっと紙が出てきた。

何か字が書かれているが、ハルバート帝国の文字なのでうちには読めない。

だが、その紙には人間の手がついてきていたのですぐに事情を理解した。

「ご、ごめんなさい……！！」

本に埋まっていた誰かをふんづけたようだ。しかも、二回目はしっかりふんづけた。

飛ぶように後ずさる。

「ぬあっ！！」

そしてその拍子に書類で足が滑り、滑った書類とともにうちも本の海の中に沈み込んだ。

「ああ、そこにいらつしゃいましたか」

エディも気がついたのか、うちがふんづけたであろう人に声をかけている。

そのまま、本の隙間から手がにゅっと伸びてきてうちの両腕をつかんで引つ張り上げた。

「なにを遊んでいる？ここの本は高価なんだぞ」

引つ張り上げたのはエディだった。

だけど、心配しているのは本のこと。

「遊んでないっ……ませんっ！」

まだ足が本に埋まっているので引っこ抜いてから、手を離してもら
う。

あ。靴の片方がどこかに行ってしまった。

「……っどうわっ!!」

靴を探そうとあたりを見渡していて、急にそれが目に入ったから驚
いた。

小さな黒丸が二つ、Vの字が一つ書かれたお面をかぶった人がこち
らを見ている。

そのお面は頭全体をすっぽりと包みこんでいて、なんというか、す
ごくまるい。

服装はエディと同じ高価なものようだが、頭が。

「ああ、そちらにいらっしやいましたか。お探ししましたよマスタ
ー」

どうやら部屋の主は声の主じゃなかったらしい。

本の山を超えて声の主が登場した……そいつも頭をすっぽりと包み
こむお面をつけている。

ただし、四角い。そして顔も微妙に違う。

マスターと呼ばれた男は、また、紙を取り出し四角の方に見せてい
る。

「ええ、わかっているのならいいですけど、次から休息をとると
きはこの部屋の外でお取りくださいね」

なんなのだろう。

すごくシユールだ。

この部屋にいる人物はお面をかぶらなければいけないという法律で
もあるのだろうか。

「エディさま、良くいらっしやいました。奥の部屋へどうぞ。今お
茶をお出しします」

四角が指さした奥の部屋は、行くまでにまた本の山を越えなくてな
いけないようで、うちはうんざりした。

26 ロゼリアと本の山（後書き）

最近暑いですね。

皆さん日射病とかに注意してくださいね。

27 ロゼリアの昔（前書き）

久しぶりの更新です。

間あけてすいません（*|*；

ついでに話も久しぶりの人達です。

27 ロゼリアの昔

リンヴェル王国の城の一室でエドリック・ウエルセントは、腕をくみ怒りをたたえた瞳でその城の主――すなわち、国王であるシュバルツを睨みつけた。

「どういうことだ？」

静かに、低い声でエドは問うた。

「すまない」

「すまない？ すまないだと？ それで済むと思っているのか？」

とても、臣下が王に対して使う言葉ではない雰囲気ではない。いくら二人が親友のように仲が良かったとしても他の臣下に見咎められればウエルセント家とてただではすまない。

それでも。

それでも言わなければエドの気が済まなかった。いや、むしろまだ抑えているぐらいだ。

「ロゼリアが、ここから姿を消していることに今まで気がつかなかったということに、何か弁明でもあるのか？」

そう、ロゼリアが後宮から逃亡していることによやく知ったシュバルツは、ロゼリアの後盾であるウエルセント家の当主であるエドリックに知らせたのだ。

そして、ロゼリアがいけないことを知ったのはいつまでも主人が戻ってこないことに不安を感じたキャラメルがとうとうシュバルツに知らせたことであり、シュバルツが気づいたというわけではない。

「……キャラメルを、信頼しすぎていた」

「女官の話をしているわけじゃないんだ！ シュバルツ！」

王という立場からいえば、むしろ責められるべきはウエルセント家だ。

後宮の女が出ることは公式のことではない限り許されることではない。

後宮から逃げ出した、つまり王の命令に逆らったということでもウェルセント家に大きな罰を与えることもできる。

だが、シュバルツは友としてエドに謝った。

だから、エドも友としてシュバルツに憤怒し、絶望している。

「俺は、ロゼがお前となかなか会えずにさみしがっていたのを知っていた。自由に動くことすらできずただ閉じ込められて日々を過ごすことに悲しんでいるのも知っていた」

たまに会うつと、すごくうれしそうに話をする妹を思いエドはこぶしを握った。

おしゃべりが好きなのに、過ごすだけの日々楽しく喋るできこともないから、いつも過去の話。

「何度、連れ戻そうかと思った。ウェルセントの立場が悪くなったとしても、あまりにもあの子が不憫で」

それでも連れ戻さなかったのは、ロゼリアがシュバルツに愛とまではいかなくても幼いながらに恋心を抱いていたのを知っていたから。「我慢強いあのこが出ていくくらいだ！よほどつらかったのだろう。それほどのことをお前はしたのだ！自覚はあるのか？」

可愛い妹のことを思うと余計に怒りが膨れ上がる。

「すまない」

シュバルツはただ謝ることしかできない。

ここで殴れば、とエドは思う。

ここで殴ってくれば、とシュバルツは思う。

だが、二人の立場がそれを許してはくれない。

「……妹を軽視したということは、我がウェルセントも軽視したということになる。このことは先代である父、アンジェリ・ウェルセントにも伝えないといけない」

シュバルツは何も言わない。いや、言えなかった。

「この婚約は破棄されるかもしれない。だが、もう君には関係ないことだろう。もう即位した君にはな」

ロゼリアが、3歳でカシユー家に預けられたのには訳がある。それは、ロゼリアにしてみればなんとも迷惑な話なのだが。

先代、リンヴェルの王トオーベル・リンヴェルには二人の息子がいた。

一人は他国から嫁いできた妃が生んだ、ブリジエン

一人は自国出身の王妃が生んだ、シュバルツ

運の悪ことに二人は同じ年、同じ日に生まれてしまった。

どちらを次の王位につけるべきかトオーベルは悩んだ。

どちらも血統に文句もなく、能力も申し分ない。

しかも、どちらも王位に対して興味を持っている。

外の国とも少々やかいかいことが起きていたこの時代に、内輪もめができるのはできれば避けたい。

そして王は、王族に連なる大貴族のウエルセントの生まれたばかりの赤ん坊の女の子に目をつけた。

「この娘が懐き育ったのち、これを妻としたものを次代王とする」

戸惑ったのは王妃を含め王子たちで

困ったのは貴族をはじめロゼリアの父で

喜んだのはただ一人、娘を産んだマリエッタのみ。

「まあまあ！私の可愛い娘を王子様二人が取り合うなんて、なんて素敵なことでしょう！」

とはいっても3歳のときから人懐っこいロゼリアは、誰が行っても喜ぶし、誰にあっても懐いてしまう。

案の定二人に懐いたロゼリア。

これではまさに大人になるまで勝負がつかない。

しびれを切らした王さまはロゼリアをお城に呼び出して、王子二人の前に座らせました。

「おまえはどちらを好いている？どちらを選ぶ？」

ロゼリアは少し悩んでからにっこり笑って選びました。

そしてよたよたとねれない足取りでシュバルツに抱きついたのです。

次期国王を子どもに選ばせるなんて、王の戯れだろうとだれもが思いました。王はいたって本気でした。

「では、次期国王はシュバルツとする」

このことに異議を唱えたのはもちろん選ばれなかったブリジエンと、その後ろだてたち。そして、ウエルセント当主。

「幼い子に未来を託すなんて！」

しかし王の言葉は覆されることはなく、王は条件を揃えるシュバルツだとして決めてしまった。

さあ、これから大変なのはロゼリア本人です。

他の貴族からのやつかみや、ブリジエンの逆恨みで暗殺されてしまう可能性は十二分にあります。

ウエルセントで守るうにもいつ召使に暗殺者が忍び込んでくるかわかりません。

そこで、幼い長男は言いました。

「私が、妹をどこかで匿ってもらえるように一人でこっそりと連れていきましょう」

そうしてウエルセント家はなくなき可愛い一人娘を長男とともに送り出したのでした。

長男は誰に見つかることもなく、誰に頼ることもなく、ただ小さな小さな妹を連れて国の国境を超えるか越えないかというドがつくほどの田舎にたどり着きました。

ここなら貴族たちは気づかないだろうと確信した長男は、ロゼリアをその村に預け、自らはそのままウエルセントから姿を消したのでした。

そうして10年の月日を重ね、ロゼリアは再び王宮に戻ってきた。そしてすでに即位をしたシュバルツのもとへと嫁いだのだ。

3歳の時の、先代の王の約束を果たすために。

なかなか正妃が確定しなかったのは、もともと権力を十分に持っているウエルセント家にこれ以上の権力を与えるのは危険だという貴族の声が上がっていたから。

そして、いまだにその座を狙っているブリジエンの後ろだてたちが未だ反対しているから。

「ロゼリアはとりあえず見つけ出して一度連れ戻す。それから正式にどうするか決めよう」

まさか、他国に売られたとは思いもしない男たち。

「お前のために人生を振り回された妹がかわいそうだ」

ところ変わって旧ハルトカルド新バルドガルド大帝国。

略、ハルガード帝国

の、城の一室。

「えつきしっ！」

誰かが噂でもしているのかな？

丸と四角を目の前に、四角が出してくれたお茶をエディと一緒にする。

人の顔をまじまじ見るのは失礼だとは思うが、ロゼリアは二人の顔をまじまじと見つめた。

呼吸穴はどれで、どこでみているのだろうか。

丸の方の顔はなんだか可愛らしい。(・v・) ↑こんな感じだ。

四角の方はなんだろう。あんまり可愛くない。(・ト・) ↑こんな感じだ。

あの上は鼻のつもりなんだろうか。そうなんだろうか。

だとしたらvは鼻なのだろうか。

27 ロゼリアの昔（後書き）

（・v・）

（・t・）

イメージお部屋のCMのあの人たちの顔。

28 ロゼリアへの助力（前書き）

実は、この間ロゼリア1周年きましたー
10日に投稿したかったんですけど、執筆が追い付かないorz
もっと頻度を上げたい

28 ロゼリアへの助力

「それで……何かご用でしょうか」

と、四角の方がエディに尋ねた。

「ああ、長年探していたのがとうとう見つかったのだ。助力くださったリグロード様に一目見て頂こうと思って」

リグロードというのだろうか。丸の人が紙になにかさらさらと書くと、それをエディに見せた。

もちろん、うちは読めないがエディは頷いた。

「ええ、これです」

うちを指さして。

「え？うちですか？うちのこと探してたんですか？何故に？」

「黙ってる」

頭を目覚まし時計を止めるようにポンっと（いうよりはバシっと）押されたので黙る。

「では、その方がロゼリア・ウエルセントのですか？」

なんとなく四角の人の視線を感じて顔の部分をじっとみつめる。

うーん。全然顔が見えない。

リグロードがささっとまた紙に何かを書いて四角に見せる。

「かしこまりました」

頷いたのを確認して、その紙を續いてエディに見せる。

「は？別にここに置いておいても問題はないかと思いますが」

すでに予想済みの回答だったのか、ページをめくってエディに見せるとしぶしぶ頷いた。

「わかりました。それではそのようにしましょう。……俺はここに残るが、ロゼは先に屋敷に戻って休んでいていい」

「へ？」

また急だなあ。

何か内密な話でもするのだろうか。でもうちこの国の字が読めない

から密談（筆談）されても意味分かんないんだけどな。

「でも、うち戻り方知らないのですがー」

「私が案内しよう」

四角が立ち上がるとエディに一礼した。

「それではエディさま失礼します」

「すまないな」

四角はうちについてくるように促した。

「失礼いたします」

うちもマネのつもりで一礼してそそくさと四角を追いかける。

またあの本の山を越えなくてはいけないのかと思うとなんだか、面倒くさい。

もくもくと、今まで来た道に戻っていく。

結局、うちは挨拶だけのためにここまで連れてこられたのかな？

エディはうちのことを探していたといっていた。

何故だろう？

「ロゼリア」

「はい？」

ただもくもくと歩いていった四角がこちらに振り向きもせずによちの
名前を呼んだ。

ていうか、呼び捨て。

「おまえは、エディさまにお仕えしてどのくらいになる？」

「最近です。一週間もたつてないと思う」

かぶり物のせいでくぐもっていて少し聞き取りづらい。

やっとお城の敷地内から出た。広いと歩いて移動するのに大変だ。

「ここで生きていくつもりがあるのか？」

少しだけ、歩みを緩めて顔をこちらに向けている……と思う。

「いや、ありません」

「そうか……お前がそう望むのなら故郷に戻してやろう」

「え？本当に？！でもうちはエディ……様に雇われの身なのにそん

なことができるの？」

雇われの身っていうか、飼われてるって言うか。

なんだか急に不機嫌オーラを出し始めた四角。

「駄がなっていない。目上の者と話す時は言葉使いを正しなさい」

「う……ごめんなさい」

「卑屈なくらいでちょうどいい。この国で力ないよそ者が生きていくには謙虚さが必要」

再び前を向いてすたすたと歩き出す。

「個性など無用。ただそこにあるのが当たり前背景のようになりなさい。それが、常に他人を蹴落とし、利用し成りあがろうと考える者たちから逃れる唯一の手」

かぶり物かぶって個性主張している人に言われたくないような気もするけど、一応覚えておこう。

「はい、わかりました」

具体的に何をしたらいいのかさっぱりだけど。

「マスターはあなたを手放すようにエディさまに今では無いでしょうがいつか説得してくださるはずですよ」

「説得……聞くでしょうか？あのエディさまに？」

あの何様俺様わがままボーイが一度手にしたものを簡単に手放すだろうか。

……飽きたら簡単に捨てられそうだけど。

「マスターはエディさまの上の兄弟のおひとり。他の人よりもエディさまは説得に耳を傾けるでしょう。それが無理でも、マスターは故郷にあなたを返す手立てをいくつか考えておいでですよ」

「ふーん……何故リグロードさまはうちにそこまでしてくれるんですか？」

面識はなかったと思うんだけど……あつたとしてもあの丸お面じやわからないか。

「助けてもらう側なのだから黙って助けてもらいなさい」

「うう。はい」

この人なんか内に対してきついなあ。

「あの……えっと」

「エトでいいです。さあ、つきましたよ」

正しくはついたというか、やっと目視できるところまでたどり着いたというか。

「エトさん、ありがとうございます」

頭を下げてお礼を言う。

「あとはもうわかるだろう。私はここで」

とそっけなく四角改めエトはさっさと帰っていつてしまった。

うーん。後ろから見ると箱かぶってる変人にしか見えない。

いや、前から見ても変人には変わりないんだけど。

なんとなくエトさんがいなくなるのを眼で追ってから、うちはエディの屋敷に戻った。

で、門には門番がいるわけで。

使用人だし裏から入るべきだろうかって移動したけれども。でも裏にも門番がいるわけで。

うちはまだペーパーだから多分顔覚えられていないだろうなっと思うんだけど。

「何者だ、貴様」

案の定覚えられていないわけで。

「ここの使用人のものです」

といったものの怪しいなっで感じで見られる。

「お前みたいなのさそうなのか？」

「とろくてもそうなんです。ほら、ここの仕事着着ているでしょう？」

外見関係ないじゃないかー。自分だって筋肉だけが取り柄ですって顔してるじゃないかあ。

「確かにここの仕事着だが、それをどこかで入手したスパイかもしれないじゃないか」

あ。このおっさんニヤニヤしているから、きつとわざと意地悪しているんだ。

性格悪いぞ。顔も悪いけど。

「通してください。とろくさそうなのがスパイなわけじゃないですか」

「確かに。でもスパイや殺し屋は一見そう見えないやつが多いんだ」「ふーんそうなんだ」

なんだか豆知識。

「なにしてんスカー？あれ、君あれじゃん、お気に入り」

なんか聞いたことあるような、気の抜けるような口調。

後ろを振り返ると、エディについていたあの、えーとそうそう、青だぬき！

なんて言うわけにもいかないからとりあえずあいさつしておく。

「ロゼリアです。どうも久しぶりです」

「久しぶりっていうほどでもないかなー。てか、何してんスカ」

「ちよつとエディさまと出かけて一人で戻ってきたら門番さんが入れてくれなくて困っています」

「とてもわかり安い説明どうもツスー」

口をもぐもぐさせているなと思っていたらガムをぷうーとふくらませた。

「す、少しからかっていただけですよ、チュライイブ様」

門番が少しおびえたように言い繕う。あれ？この人意外と怖い人なの？

膨らませた風船がぱちんと割れてそれをまたもぐもぐする。

「くだらないことしてんなよー。通してやんな」

「は、はい。おい、さっさと通れ」

「はい。ちゅーらいぶー様、ありがとうございます」

「チュライイブね。ボス様のお気に入りにも借り作つといっても損しないっすからねー」

「お前、お気に入りならそう早く言えよっ！」

小声で門番さんがそう怒鳴る。

「しらねーよ」

なんで逆切れされなきゃいけないのさ！

「それで、チュライブさまはなぜ裏門に？」

「んー？あー……なんとなく？」

本当に深い意味はないのかまたガム風船を膨らませる。

「ボス様いないのなら帰るっすかねー……別に特に用事なかったッスけどー」

上下関係が厳しい国なのかそうでない国なのか、なんだかわからなくなってきた。

また、割れた風船ガムを今度は紙に包んで門番に渡した。

「捨てといてー」

そのままだ前を通っていただけですよーっという感じで去っていった。

「……あの人、ちょっと変わっているね」

「そうなんだよ。しかも気まぐれで残酷さが変わるんだよ」

冷や汗をぬぐいながら、門番はため息をついた。

……さっさと中に入ろう。

きつとマリアたちも休憩に入っているだろうから久々にゆっくりと話がしたいな。

28 ロゼリアへの助力（後書き）

丸も四角も狸も初めて名前が出た。

29 ロゼリアよりもタフ（前書き）

アンケートで貴重な意見ありがとうございます（*^ー^*）
とりあえずじんわりとお答えできるような感じを目指して……
少なくとも投稿はもう少し頻度を上げるように……

29 ロゼリアよりもタフ

ロゼリアたちが与えられた私室……というより休憩所は、もともとは一人部屋だったのだろうがそこにぎゅうぎゅうに二段ベットが二つも詰められた部屋だ。

窓は小さなものが部屋の奥にあるくらいで、しかも格子がついていて換気もきちんとできているか不安なものだ。

この部屋に、ロゼリア・ミケ、マリア・ユキが仲良く詰め込まれているわけだ。

いつもは仕事の時間帯がうまく合わなくて会えないユキたちもいる。とはいっても、マリアは男とばれないために時間をずらしてこっそり今入浴中だ。

「ユキ久しぶりだねー」

「本当に、もう一年もあつてなかったかのような気さえするわ」

少々オーバーなような気もするが、心底そう思っているのかため息をついた。

「私たちの仕事場、まさに奴隷って感じ」

「実際、買われてきた奴隷だろ。あたしたち」

小声で言っただつたろうが、この部屋は狭い。十分ユキにも届いたが、実際そのとおりなので何か言い返そうと口を開いたけれど何も言わず閉じた。

「部屋が暗いと空気も暗いねー」

うちが、月明かり以外灯りもない部屋を見渡しながら言うと

「空気は暗いつて言うか、重いんだけどね、誰かさんのせいで」とユキが言った。

それもそうか。

「まあまあ……でさ？ユキとマリアはいつたいなにしてるの？」

「洗濯、掃除と……なんちゃって接待かしらね」

「ふーん」

「洗濯は良いとして、掃除がねー」

ユキは思い出したのか、顔をしかめた。

「わかった、外のトイレ掃除だろ」

「よくわかったわね、ミケちゃん。門番とか雇われ兵士とかが使う簡易式のトイレがあるんだけどね、その排泄物を捨てに行く作業がもういやでいやで。馬小屋とかもあるでしょ？その掃除もさせられるし」

「ははは」

その光景を想像したのかミケが軽く笑った。

「笑い事じゃないわ！一番いやだったのが……一回しかなかったんだけど、一度刺客？っていうの？殺し屋が何人が来てね、それを片付けさせられたのよ！」

「死体を？」

興味があるのか、ミケが身を乗り出した……ような気配がした。うちはベットの上の段にいたのでよくわからないが。

「まさか！死体は男の人が。私たちは残った血を拭きとらされたわ

……もう、気分が悪くて」

「なあんだ。まだましだろ」

「人事だと思つて！」

ちよつとだけ、その光景を想像してみたが……よくわからない。

気分のいいものではないだろうが。

「そんなこと、ここでは頻繁にあることさあ。……それで？」

「それでつて？」

「接待つてなに？」

「ああ……セクハラとパワハラよ。全く腹が立つわ！」

それを聞いてうちはなんとなく数時間前に出会った門番さんを思い出した。

うん、しそうだ。

「ここで正規で雇われてる人たちにお茶とか持って行かされるでしょ？その時に胸とかおしりとか平気で触ってくるの！私にはちゃん

とした人がもっているのに！」

胸とかおしりとか――。

マリアは男ってばれないだろうか。

さすがに触ったらわかるんじゃないかな。

「マリアは？」

「マリアさん？彼、すごいわよ。笑顔でよけたり、しつこいやつには涙目で上目つかって「もう、やめてくださいっ」って私よりも可憐な感じで」

「彼？」

事情を知らないミケが首をかしげたが、ミケは口が軽そうなのでスル―。

それにしてもさすがマリア。いつか押し倒されないか本来の主人としては心配だよ。

「てかね、うちたちと違ってユキたちはだいぶ大変そうだね」

うちたちは普通の掃除とかしかしてないかな。

周交体制なのだろうか？

「そりゃそうだろ」

と思っただらミケがちよつと小馬鹿にした口調で笑った。

「なんで？」

「この国は他の国のやつらは下だと思っているからな、同じ奴隷でも扱いは違うさ」

ミケはこの国出身で、ユキとマリアは確かにこの国の人たちではない容姿をしている。

……？

「うちは？」

「おまえはさあ、ほら。飼主のお気に入りじゃん？」

「あー」

そういえばそんなことも、言われていたような？ないような？

「そういえば、そんな感じだったわね。……あの人、もしかしてロゼリアに惚れてるんじゃないの！？ああ、きつとそうよー！」

なんだか急にテンションあがり始めた。

「もしかしたら、マリアさんもあなたのこと好きかもしれないわね！ああ、それじゃあ三角関係！素敵！二人の男の情熱の間で揺れる乙女心！ねえ、恋の話で盛り上がりましょうよ！……あいたっ！」ひとり盛り上がりすぎたのか、下の段にいるにもかからわず立ち上がったので頭を打ったらしい。

ごつつと痛そうな音を幕引きにユキは黙り込んだ。

「いや、マリアだっけ？あの人がロゼ好きならレズじゃん」

事情を知らない——以下略。

「……楽しそうですね」

いつから入ってきたのか、マリアが小さなろうそくを持って入口に立っている。

ぎいと古めかしい音をたてて扉を閉めた。

この音が聞こえなかったんだからユキが騒いでるうちに入ってきたのだろう。

うーん。気まずい……のか？

「なあなあ、あんたさあ？レズなの？」

ミケが少し引き気味にマリアに直球で聞く。

マリアの表情はうす暗くて見えないがかすかに笑ったのがわかった。

「私がですか？まさか。私は普通に異性が好きですよ」

マリアはベットの upper 段に上ってからろうそくの火を消した。

何せ、懐中電灯とかあるというのにこの部屋に明かりはろうそくが2本しか支給されないのだ。

「うう、たんこぶができたかもしれないわ」

少し悲しそうにユキが布団に倒れ込んだ。

「明日も早いですし、もう寝ましょう。あまり騒いでいますと先輩方に目をつけられますよ」

とマリアも布団に入りこんだようだ。

「うー恋バナで盛り上がりたかった……」

「お前よくこんな状況下でそんな楽天的な考え方出来んなあ」

ミケが小馬鹿にしたように、っていうか鼻をふんつとならして小馬鹿にしている。

「いいじゃないのよう。こんな時だからこそ明るいことで気を紛らわしたいの！ああ、あの人助けに来てくれないかしら」

「寝言は寝てからいつてくれる？」

やっぱりミケとユキは気が合うのかもしれない。

二人の駆け引きがなんとなく面白い。

ミケの悪意がたまに感じられるけど。

「……もう寝る？」

なんとなくそういう流れのようなので、うちは控えめに聞いてみた。冷たい石壁を背に、ごわごわとしていて薄い布団を体に寄せる。

うーん。こういうときはちょっと後宮暮らしが懐かしく思うなあ。

「え？やっぱりロゼも恋の話したい？二人でしましうよ」

「ちがうよー」

ユキの想い人の話も面白そうだけれど、うちはうちでちょっと話があるって言うか。

「脱走しないの？って言いたいんだけど」

「あ」

諦めていたのか、抜けていたのか。

ミケとユキの声がかぶった。

「今までは、なかなか時間が合わなかったから今度会えたときに言おうと思っただけだーユキとマリア疲れているならまた今度にする？」

いや、ユキはまだ余力がありそうだが（ただし恋愛関係のみ）

「ごめんなさい。私ったら一人ではしゃいじゃって……そうよね。受け身じゃダメよね」

「本当に一人ではしゃいでたよねえ」

返す言葉もないのかユキは小さくぐうと唸った。

ユキは旅をしていただけのことはあって意外と適応能力が高いのかもしれない。

「そのことですが、今はまだこのことも、この周辺のこともよくわかりません。……もうしばらくお待ちください」

おお、さすがマリア。ちゃんといういろく考えていたのね！

うちも今までは掃除とか仕事を覚えるのに必死だったけどやっと慣れてきたし、そろそろ脱走とか考えて動き始めないとな！

「ま、別に告げ口とかしないけどさあ、もしできそうだったらあたしも入れて。ほんで無理そうだったらあたしは一切関与しないからそのつもりでよろしくー」

「ミケちゃんって本当薄情よね！」

助けを求めるのもいいかもしれないけど、うちはもう待つよりも動く方がいい。

何もしないでバ力を見るより、動いて馬鹿を見る方が得るもの大きいって知ったから。

たとえ、もっと悪くなったとしても。変化しないよりまだから。

29 ロゼリアよりもタフ（後書き）

駄弁る。

前回もだけど今回も駄弁る。

ガールズトークはとまらな—い

といっても桃色だったのは一瞬だったけれど。

30 ロゼリアとちびっこ(前書き)

2011/11/11に投稿したかったOrz
とてもじゃないけど遅刻しまくってるよ。

30 ロゼリアとちびっこ

「ロゼ」

高い梯子に登って窓の上の方を必至に拭いていると、下から声が聞こえた。

視線をやると、思った通りこの持ち主のエディだった。

「ちゃんと戻ったようだな。えらいえらい」

ちよつと小馬鹿にしたように口の端をにやりとあげている。

「四角……じゃなかった。エト様がちゃんと案内してくれたんで戻れました」

逃げなかったんだな、という確認だろうな、と思いつつ返事をする。一人で知らない土地を逃げ切る自信はないし、仲間を見捨てて逃げるのはうちの信条に反する。

「そうかそうか。ていうか、首が痛い。おれさまが話している間は手を休めて降りて来い」

梯子のおかげで今はうちの方が視線がだいぶ高い。

確かに身長の高いエディでも顎の角度を上げないと目も合わせれない。

うちは今している作業の手を休めてしぶしぶ下に降りた。

「今度はちびすぎるな」

「発展途上です」

多分。

今度は見下げられている。

エプロンで手を拭いて、改めて向き直る。

「で、なんかよう？」

「用じゃないと話かけちゃいけないのか」

まあ、いけなくはないけれど仕事だもの迷惑だ。

……雇い主が目の前の人だからいいんだろうけどね。

エディは少し不機嫌そうに眉をひそめたけれど、すぐにいつもの顔

に戻った。

「まあ、いい。出かけるぞ。着替えろ」

昨日の今日なのにまた出かけるの？

そんなに汚れていないのに、着替えないとだめなのだろうか。

それを伝えるとまた人を小馬鹿にした笑いを浮かべた。

「そんな小汚い恰好で」

うちの格好を指さした。

「この高貴なおれさまとデートするつもりか？」

「いやでもこれ、エディの趣味……え？」

デート？デートって言ったよね。この俺様。

別に照れもせずさも当然という雰囲気ですらっと言ってのけたけど。

「デ……デート？うちと、エディが？」

「他に誰かいるのか？抜けた顔のくせにおまえ意外と手が早いな」

「違うけども！」

ていうか、抜けた顔のくせには余計だよ！

「良いから、さっさと着替えろ」

何度も言わせるな、とうちの腕を掴んでずるずると適当な部屋に投げ込まれる。

「は？え？ええ？」

唐突。なんでデート？しかもエディと。

部屋の中には支度する体制に入った女官さんたちが4、5人。

そのうち年季の入った（というか、小太り）な女性がずいとうちの顔を見た。

「……では、お着替えをお手伝いさせていただきます」

「は、はい……！」

なんか妙な迫力があつて怖かった。

数分たつてからやっと解放され、玄関で先に待っているエディの前へと連れていかれた。

「ふぁ、すでに疲れたよ」

「なにを言っているんだ。まだなにもしてないじゃないか」

もともと誰かに着付けを手伝ってもらうのは得意じゃないんだ。

その上このひとたちはなんとなくまだ仲良くないし、ここの服ウエストぎゅーって絞られるしスカート丈が短くてふりふりしててなんだかスースーするし。

靴のかかどが細くて歩くのなんだか不安だし。

「ふーん」

エディはうちの服装を上から下まで見てから満足そうにうなづいた。
「なかなか似合うな」

「あ、そう？ありがとう」

大きな鏡で自分でも見たけど、ちよつと年よりも子供っぽく見えるかなっておもったんだけど。

「これから行くところにぴったりだな」

「どこに行くの？」

うちの手を取って車にのつてから、エディは悪人みたいに笑った。

「子供が好きなところだ」

それって遠まわしにうちがやっぱり子供っぽいってこと？

なんか引つかかるけど楽しそうなところみたいだし、よしとしようかな！

「ついたな」

そう言うときエディはサングラスを装着した。

「……それ、扮装のつもり？」

「そうだ。俺さまは人気だからな」

自信満々に胸を張る俺さま。

「ふーん」

まあ、エディはスルーしておいて。

外に出ると確かに、子どもが多い。

広場には保護者と、下は5歳くらいから上は12歳までの子どもたちも浮足立った様子でにぎわっている。

広場の真ん中には特設なのだろうか塔のように高い足場を上った大人たちが上で何か準備をしている。

「あれはなにをしているの？」

「準備中だ」

そんなことは見ていればわかる。

大人たちが何か叫ぶと塔の周りにいた13・4くらいの男女が昇っていく。

「さあさ、そろそろ始めますよー！」

恰幅の良いおとこが大きな声でそう叫ぶと周りにいる子どもたちが「わあっ！」と塔に近づいた。

「ほら、ロゼ。お前も行つて来い」

「へ？え？何で？」

ろくな説明もなくエディが背中を押すのでしぶしぶ小さな子供たちに交じる。

「ルーディの祝祭だよ！」

「ほら、みんなうまいこと取るんだよ！」

上にいるお姉さんやお兄さんたちが何かを小さな子たちに向けてやさしく投げている。

「それを一つ取ってこい」

遠くからエディがそう叫んだ。

「わあ！」

「やだあ。それ私のだよあ！」

どうやらそれは飴と一輪の花が詰め込まれた袋のようだ。

子どもたちは我先にと投げられたお菓子めがけてぴょんぴょんはねたり押したり引いたり。

右往左往。

それを見ている親は「そつちじゃないよ！」「ほら、今だ！ああ、トロイ子だねえ」「よく取ったな！」などと囁し立てている。

外からはのどかな雰囲気だが内に入るとすごい殺伐としている。

子どもたちに交じってとってくるのはなんだかとても恥ずかしかつ

たけど、エディの命令？だから従うしかないだろう。

しかし、子どもといっても侮れない。

ロゼリアの方が年上のために他の子よりも頭二つ分は飛びぬけているのに、腕を引っ張られるわ目の前でびよんびよん跳ねられて邪魔されるわでなかなか手に入らない。

「いたた、だ、誰？髪の手ひっぱってるの！」

さすが弱肉強食がモットーの国。

のどかなイベントもまるで大会のような必死さだ。

やっと一つ手に入れてふらふらしながらエディのもとに戻る。

……。

ものすごく笑うのを我慢している。

「……とってきたんですけど」

すでにくしゃくしゃになった髪をいつそのこと髪留めを外して整える。

「くくつ……御苦労。くくく」

猛烈に殴りたくなった。

でもぐつとこらえて必死になってとってきたお菓子の袋をエディの胸に押しつける。

「はいっどーぞ！お望みのものです！」

「ああ？いらん」

そのまま押し返される。

「はあっ！？」

「甘いもの、好きだろう？」

「好きだけど」

「あけてみる」

「？」

言われたとおり、小さなリボンをほどこして中をあけると飴玉が3つに赤い花が一輪、それと小さな紙切れ。

「……『ルーディの祝福をあなたに。立派な成長を願います』？」

「この祭りは子供の成長の節目を祝う祭りで、13から自分の進路

を決め親元から離れ修行する子どもたちがまだ親の庇護下にいる幼子たちへの餞別としてお菓子を配るんだ」

「子供が……子どもにお菓子を配る……」
って。

「うちもうそんな年齢じゃないんですけど……それってすごい場違いじゃない?！」

よく考えたらものすごく恥ずかしいことなんじゃないだろうか。

子供の祭りにいい年した女が乱入してお菓子かつさらっていくなんて。

「なんで?別にいいじゃねーか」

一つ小さな飴玉を取り出して、うちの口の中に入れる。

甘い、イチゴの味が口の中に広がる。

「おまえはそういうの体験してないんだろ?いろんなこと体験したりしてみたいつつたじゃねーか」

「そ、それはそうだけど」

うちのために連れてきてくれたってこと?

いや、エディこういうの興味なさそうだしそうなんだろうけど。

「もみくちやにされるだろうお前の姿が見たかったし。はあ、満足」
「……」

そっちが本命かつ!!

一瞬でもいいやつと見直したうちが馬鹿だった。

「ほら、髪直してやるから、そのベンチに座れ」

「え?直せるの?」

直すも何もすでにすべて外しているけど。

「俺さまは器用だからな」

すぐくよくわからない理屈だけと言われたとおりベンチに座る。

くしが無いからでぐしでうちの髪を整える。

「ちなみにあの祭りな、はじめのうちこそ真面目に配ってたらしいが」

喋りながら髪を均等に二つに分けてねじる。

「やっぱ世の中楽しんでただで手に入るものなんてねえっていうことで投げられたものを奪い合う形になったらしい」

それをくるくるとまいてお団子にして、髪留めで止める。

「……この国らしいね」

「だろ？さて。さーいこに」

袋から赤い一輪の花を取り出してうちの髪に差し込む。

「完成」

鏡がないからよくわからないけど、たぶん綺麗にできていると思う。

「ふーん。器用なんだね。自称するだけあつて」

「だろっ」

ふふんとふんぞり返ってうちに手を差し伸べてきた。

「ほら、ほかにも回るところがあるんだ、ぐずぐずしてないで行くぞ」

「うん」

差し出された手を取るべきか少し悩んだけど、むげにもできないかと思って手を取った。

周りで、お菓子を取得したり顔の子どもたちを連れた親がにやにやしなからこちらを見ていたのがものすごく恥ずかしかった。

30 ロゼリアとちびっこ（後書き）

またしばらく更新がゆっくりになるかもです（*|* ;
申し訳ない）

最低でも月一更新は守りますから

31 ロゼリア子守する(前書き)

もっとはやくうpする予定だったんだけどなー

31 ロゼリア子守する

「ロゼリア、出かけるぞ」

時間はまちまちだけどいつもタイミングの悪いエディ。

今は床を磨いていたうちはいつものテンションのエディを見上げた。磨いたばかりのところを歩かれるってなんとなくイラつくね。

「どこに？また着替えるの？」

あの着替え用？の人たち怖いんだけど。

めんどくさそうな顔で見たら鼻をふんつと鳴らした。

「着替えなぞ必要ない。またデートに行くとも思っているのか？」

この人が何をしたいのかわかんない。

「仕事だ」

具体的にどういう仕事なのか教えてほしい。

ていうかそういうのはうちじゃなくて正規に働いている人の方がいいんじゃないかなあって思うんだけど。

言ったってどうせ変わらないだろうから素直に頷く。

けど、一言。

「これも、仕事なんですけど？」

「仕事には優先順位があるだろう」

まあ、そうだけれど。

「このままじゃあ、誰か滑っちゃうかも」

床を磨いていたブラシと濡れた床を指さすと、少しまわりを見渡した。

「この程度でこけるような屑なんぞどうでもいいが、カビでも生えると面倒だな」

ちようど他の雑用を終えたミケが首を回しながら通りかかったのを、素早く声をかけた。

「お前、ここをしておけ」

「……はい。かしこまりました」

ものすごく一瞬「げえ、タイミングわりい」って顔をしたらけれどすぐに恭しく頭を下げた。

ミケ。ごめんね。

うちは近くで手を洗ってからエディの所へ向かった。

エディは車に乗っていた。

「おまえは運転手の隣に座れ」

「はい」

外向き用の態度なんだかよく分かんないけど、身分関係はつきりさせた状態で車での移動。

ついた先は結構大きなお屋敷。

立派というか重圧感を感じるたたずまい。

うちはもつと可愛い感じのお家に住みたいなあ。人形のハウスみたいな。

「いいか、ロゼリア。お前に任務を与える」

なぜか真面目な顔で。

「なに？」

なんとなく笑えるのは気のせいだろうか。

「ここは俺の叔父上の別荘だ。おれは叔父上と話があるからその間おまえはこのガキと仲良く遊べ。機嫌をとれ。以上」

ああ、確かにエディは子供が嫌いそうだ。

子供以上に子供っぽいというか大人げないし。

「かしこまりました」

うちは子供と遊ぶのは嫌いじゃないけど、あまり経験はない。

村にいた時は自分が最年少の類だったし。

恭しく頭を下げる執事について行くと、途中で小さな足音がぱたぱたと騒々しく近寄ってくる。

「兄上えゝ！！」

エディはその声に一瞬肩を揺らした。

「お久しぶりです、兄上！本日はどのようなご用件でしょうか！？」

年は10くらいだろうか、実に利口そうな少年だ。

頬を興奮でほんのりと赤く染めて、羨望のまなざしでエディをみている。

赤茶の髪に、紺色の瞳。涼しげな眼もと。

大人になつたら女の子たちが騒ぎそうな美少年。

「ああ、久しぶりだなアドレー。今日は叔父上に用があつてきたんだが連絡は行き届いているか？」

「はい、いつもの部屋で待っています」

「そうか、では待たせるのも悪いな。ロゼリア、アドレーの相手を頼む」

エディはこれらの会話をアドレー少年の方を少しも見ずに、手短におざなりとも言えそうな雰囲気で返すと執事にまた案内をさせてさつさとしてしまった。

……ていうか、いつさい説明なしにうちに丸投げですか！？

「……兄上」

ちょっと寂しそうにアドレーはエディの背中を眺めながらつぶやいた。

「えーと」

うちはどうしたらいいのかわからないからとりあえず頭をなでてあげてみた。

「っ！！」

そしたらもの凄い勢いでにられました。

ひゃあ、怖いや。

「お前、なんなんだ？」

「えっと、エディさまの侍女です」

「ただの、侍女か？」

他に何があるんだろう。

「えーと……奴隷あがりの侍女です」

これくらいか思いつかなくて言うと、ものすごい馬鹿にされた眼で溜息をつかれた。

その動作、ものすごくエディに似てたよ。

「そうじゃない、兄上のなんなんだ？と聞いている」

このこ、子どもなのにすごい態度でかいなあ。貴族らしいといえば
そうなのだろうか。

それともこの国の子どもは皆こうなのか。

それはものすごく嫌だ。

「うち……私はただの侍女だと思いますけど」

エディの何かと問われても。侍女だとしか言いようがないよ。

「本当だな？兄上の姫とかそんなのじゃないな？」

ああ

「ふーん。なんだやきもち焼いてたんですか。そうならそうといえ
ばわかりやすいのに」

「な！おまえ無礼だぞ！僕の侍女だったらすぐに折檻するところだ
！」

懐いているお兄ちゃんに彼女ができたのか心配だったのか。

可愛いところもあるんだねえ。

王族の彼女が侍女服着ているわけがないのにね。

「はあ、まあすいません」

「……まあいい。兄上にお前の世話を頼まれたからな。お前ついて
こい。僕の部屋に案内してやる」

お世話を頼まれたのはうちのような。

まあ、ここで反論してもあれだから素直に頷いておく。

「はい……えーと」

ここでなんと呼べばいいかわからずに言い淀む。

「僕か？僕はアドレールド。アドレー様と呼んでいい」
なんて無意味に長い名前だ。

エディのフルネームはまだ知らないが、ものすごく長そうだ。
覚えられない自信がある。

アドレーの部屋に行くと、さすがに年相応の子供らしさが垣間見え

る部屋だった。

家族の写真が壁にかけられているし、おもちゃもそこらに転がっている。

勉強の途中だったのか、机には開いたままのノートと転がされたペン。

「それで、おまえは何がしたいんだ？トランプか？ジェンガか？怪盗ごっこか？」

なるほど、さっそく遊びたいんだね。

うちは気づかれないように小さく笑って一番無難そうなトランプと答えた。

怪盗ごっこにも興味はあったけれど。

しばらくして、エディが部屋に戻ってきたころには、アドレーはデションあげすぎて疲れてうちの膝で眠っていた。

うちらも眠たくなってきていたからちようどよかった。

「……精神年齢が同じだから楽しんだようだな」

「それどういう意味？」

エディは少しアドレーに視線をやると「帰るぞ」と短く言っ出ていこうとした。

「ちよっ、まって」

膝に人が居るんだけど。

「アドレー様に一応挨拶しなくてもいいの？」

あんなにも懐いているのに。

「必要ない」

そうしていると「ん……」とアドレーが目を覚ました。

「あー！兄上！お話は済んだんですか？！」

「あ……ああ」

まるでおもちゃを目の前にしたような子犬の瞳でエディを一心に見つめる。

「僕、兄上に見てもらおうと剣の練習を必死に頑張ったんです！見てもらえませんか？！」

「う……」

黙って見ていると、珍しくエディが戸惑っている……？

「あ……。す、すいません。兄上はほかにきつとお仕事でお忙しいですね……」

するとなんとなく雰囲気気がついたのかアドレーがしょんぼりと肩を落とした。

その様子をみて、なにか悩んでいたようなエディはやがて諦めたようにため息をついた。

次いで、嫌みのない笑顔でアドレーの頭を撫でてやった。

「そんなことない。この間に比べてどれくらい成長したか見てやる」「本当ですか！僕、すぐに模造刀をとってきます！」

「少しだけが相手もしてやるから、おれの分ももっておいで」

「はいっ！！」

先ほどとは打って変わってご機嫌になったアドレーは急いで部屋から飛び出していった。

その様子をもうなんか実の子どもを見守るような眼で見送るエディ。それは子供嫌いというよりもむしろ

「……子供好き？」

「そんなわけないだろう」

といいつつも、ほんのり耳が赤い。

そういえばこの間連れていかれたところも子供の祭りだったとか、子どもがわんさかいたというか。

隣に立つてもう一度繰り返す。

「子供好きなんだ？」

「……」

黙って耳を引っ張られた。

「いででで！いいじゃない別に！子供が好きだからって悪いことないでしょ？」

「この国は恐怖政治しているところもある。次期トップになろうというやつが子供好きじゃ恰好がつかんだろう！」

この国はそういう国だったね！でも多分だけど、むしろ好感度アップだよ？ギャップが好きにな人にはたまらんことだよ！

「……正直にいうと」

「正直に言っと？」

ぼそぼそ言い始めたので耳を傾ける。

「子どもは好きだ。特にアドレーなんて実の兄のように慕ってくれるし」

「じゃあなんで始めあんな風につれなくしたの？」

「……べつに」

「体裁とか？あ、もしかしてあんまり楽しい時間過ぎすと別れがつかなくなるからとかだったたりして！」

「……」

無言で鼻をつままれ上下左右に引っ張られた。

「いただだあだ！」

もしかして、正解！？

「秘密だぞ！」

「ふあいふあい！とりあえず離して！」

スネてむっスーとした顔のエディだったけど「兄上！持ってきました！」と模造刀を二本抱えたアドレーを見て、またにこーっと笑った。

エディがこういう顔をするのがなんだか新鮮だ。

「よし、じゃあ外に行きましょう！」

満面の笑みのアドレーはうちにも手招きをした。

「ロゼリアにも僕の実力を見てもらわないとな」

「はい。では見学させていただきます」

子どもはやっぱりどの国でも元気だなあ。

エディの面白い一面も見えたし、こういう日もあってもいいな。

「ロゼリアは大きくなったら僕がもらってやるから安心していい

ぞ！」

「へ！？」

「なっ！」

こ、子どもは元気があって……はは。

31 ロゼリア子守する（後書き）

やっと時間的に余裕が生まれてきました。
それも年内限定ですけどね

32 ロゼリアのふるさと（前書き）

パソコン障害で投稿できずでしたOrz

32 ロゼリアのふるさと

少し時を戻して

リンヴェル王国の国境付近にあるドがつくほどの田舎。

ロゼリアがお世話になったピュール村。

そこに、キャラメルはいた。

シュバルツもエドリックも行きたいと行っていたが、国に使える身としてそう簡単にいかず、キャラメルは一人でここまで来た。

ロゼリア
主がいつも言っていたからか、不思議と初めて来た気がしない。

「ロゼリア様……」

ロゼリアが行っていたように何もない村だ。

あるのは自然と、小屋と間違えそうなほど小さくてところどころガタがきている家が点々とあるくらい。

何も知らずに初めて来た人がいれば、ただの廃村と思うかもしれない。

でもよく見れば家からは煙もでているし、家畜の鶏もいる（とはいえ今のところ2羽しか見ていない）

キャラメルも貧しい村の出身だったが、ここに比べるとだいぶマシだった。

よく生活できているな。と不思議にすら思う。

「だめよ、リーアン。それは食べられないわよ」

と、家の影から女性の声と、赤ん坊の「うーぶうー」という声が聞こえた。

この村にきてやっと人に出会った。

「もし？少しよろしいでしょうか？」

「はい？……あら？あなたもしかして……キャラメルさん？」

「狭くてごめんなさいね」

「いえ……なんの知らせもなく着てしまい申し訳ありません」

案内された家のなかには、ワンルームで壁や天井のところに穴が開いている。

ちゃぶ台のような小さな机の前に座る。

「クツシヨンもなくて……申し訳ないわ」

「いえ、お構いなく」

「ぶう」

男の子の赤ん坊が母親の腕の中で元気に動き回っている。

「妹がお世話になります。姉のマーリーです。このこはリーアン」

「リー」

母親の真似をして名前をつぶやく。

その姿に少し微笑んでから改めて自己紹介をした。

「キヤラメルといいます。ロゼリア様のお世話をさせていただいております」

「あのこが手紙で言っていたとおりね、すぐわかったわ。『おいしいそんな髪色で、お人形みたいにかわいくて優しい人』ね」

「そんなこと……あの、ほかの方はいらっしやらないのですか？」

「そうね、今は狩の時期だから父ちゃんも村の若い衆もみんな山にいるの。母ちゃんとか女たちはもう少し大きな村に出稼ぎに行っているわ」

「カシューさまのところへ行きたいのですが」

「この村はカシューとパーツ、ブルットの3つしか苗字がないからカシューで探すと6人はいるわよ……そろそろ帰ってくる頃だろうから待っていてくれないかしら」

「急ぎじゃなければね。と付け足してからマーリーは編み物をし始めた。

リーアンはころんとその辺で拾ってきたのであろう一枚の葉っぱで遊んでいる。

「よろしいでしょうか？」

「なに？」

「その……ウエルセント公爵家から報奨金が出ていると聞いたので

すが」

「ああ、その割にはぼろいって？」

「いえ、そういうわけではないのですが」

ウエルセント家は貴族の中の貴族。

軽くこの村を立て直すぐらいのお金を送っていると思うのだが、この家はとても手をつけたとは思えないくらいぼろい。

「まあねーすごい金額もらっちゃったわ。それこそこの村程度まるごと買えちゃうくらい。月に馬から牛から買えるような金額も送られてくるわ……たぶん、町の人よりもいまやお金あるんじゃないかしら」

編み物をしてながら苦笑いを浮かべた。

「もらったんなら使えって話なんだけどね、ロゼリアを売ったお金みたいでなんだか使いたくないのよ」

まったく使っていないわけじゃないけど、といって少し笑った。

「ロゼリアが帰ってきたら、あの子にあげるつもり……こんなところに帰ってくるわけないけどね最近手紙も来ないし」

「え……？」

自分の言葉に顔色を変えたキャラメルの顔を見る。

「ん？どうかしたの」

「ロゼリア様は……一度もお戻りになられていないのですか？」

「そつよ？」

てつきり一度は村に戻ってから後宮暮らしに愛想をつかしてどこかに言っただと思っていたのだが。

ロゼリアが家出を決意してからすでに3月はたっている。

いくらなんでも一度くらいは村に戻るはずだ。

「なに？……ロゼリアに何かあったの？」

震える手を何とか押さえつけてマリーに尋ねる。

「いえ……そんな……お父上も何も知らないのですか？」

「父ちゃんも知らないと思うわ、すぐ顔に出る人だし」

「そつ……ですか」

なにか事故でもあったのかもしれない。

いやな汗が流れる。

「ねえ、なにかあったの?」

「……申し訳ありません。許していただけとは思っていませんが……」

急に頭を下げるキャラメルに思わず手にしていた編み物を落とす。

「ど、どうしたのよ」

その様子に不安になってきたのかリーアンがマリーに抱きついた。

「実は……ロゼリア様は今は……居ないのです」

「どういうこと」

と、外からわいわいと数人の声が聞こえた。

狩に出かけていた男たちが戻ってきたようだ。

「まあいいじゃないかエデック。今日は大物が取れたことだし」

「いや、本当いいよ……わ、わしは本当」

「何を言っているんだ。この間から付き合いが悪いぞ?」

「そうですよ、どうぞ」

扉が開いて男が3人入ってきた。

「おかえり、父ちゃ、あなた。今ロゼリアのところからお客さんが来ているのよ」

一人は父親、一人は夫のようだ。

「ろ、ロゼのところから……?! ロゼは無事なのかい?!」

もう一人の……エデックと呼ばれていた男はキャラメルの肩を強くつかんだ。

「きゃっ……!」

「ちよ、ちよっとちよっとおじさん、やめなさいよ」

「おじさんどうしたんですか」

興奮するおじさんをひっぺがして落ち着かせる。

ちなみに父はすでに一人のんびりとくつろいでいる。

「ロゼは……無事に逃げ切れたのかい?」

落ち着いてきたのか、ぼつりとエデックはたずねた。

「それは……どういうことですか？」

「おじさん、何か知っているの？ロゼに何かあったの？」

「し……知らないのか？」

「なにをです？」

不安げに二人の顔を交互にみて、おじさんは真つ青な顔を勢いよく地面にこすり付けた。

「すまないっ！！わしが、わしが悪いんだっ」

マリーはリーアンをだんなに渡してから、一気にエデックの顔をはたいた。

ぱあんっ！ととても痛そうな音が響いた。

「だから、どういふことかさっさと説明しなさいよ！！」

おじさんから今までのことを聞いてみんな無言でおじさんをにらんでいる。

「そんなロゼリア様……どうかご無事で……！！」

「すまないっ！！わしも逃がそうと一応努力はしたんだ……まったく役に立てなかっただけで」

「お前昔から要領が悪いからなあ」

そういつていままでも無言だったロゼリアの父がそつとエデックの肩をたたく。

「ダルドー……っぶ！！」

そしてそのままロゼ父の右ストレートがエデックの顔にヒットした。どうやらマリーは父似のようだ。

「これでお前のことを許すよ」

「だ、ダルドー……すまない、本当にすまない」

「あの、それで、ロゼリア様はどちらに売られたのですか？！」

「確か……あの男たちが言うには……ハルガード行きとかいっていたような……」

口のはしが切れて血を流している。

「ハルガード……その、ロゼリア様を買ったという男になにか特徴は？」

「うーん……とても偉そうだったよ。あとは赤毛で……相当のお金持ちだろうね。なにせ他にも女の子3人もまとめて買ったんだからね」

「女の子を3人も……ロゼリアさまの貞操が危ない……っ！！こうしてはいられません」

キヤラメルは急いで立ち上がると、マリーたちに一礼した。

「急いでお城に戻り、ロゼリアさま救出に向かいますので失礼いたします」

女を何人もまとめて買うなんて、国内で売る目的か、ねっからの女好きか。

どちらにしてもロゼリア様の貞操の危機！

「急いで知らせなければ」

32 ロゼリアのふるさと（後書き）

ということで久しぶりの登場エディックおじさん。
みんなのかわりに父と姉が殴ったよ。
母がいたらさらに殴っていたと思われる
でも結局は許しちゃう一族

33 ロゼリア、知る（前書き）

そろそろサブタイ付けるのが難しくなってきた

33 ロゼリア、知る

「ああ、いたいた」

いつものように仕事をこなしていると後ろからそう声をかけられた。振り返るといつの間に来ていたのか青い頭が特徴的なチュライイブさんが笑顔で手を振っている。

「こんにちわ、チュライイブ様。何か御用ですか？」

「そうちよつとねー。いま大丈夫っスか？」

ちようど今日の最後の仕事を終えたところだったので「はい」と頷いた。

「じゃあ、来て」

まるで自宅のように我が物顔で歩くチュライイブ。

ほかの使用人ももう慣れているのか、驚くこともなく軽い礼をするだけだ。

「ここっス」

「ここですか」

ここは屋敷の中心部。

目の前にはほかの扉よりも上物を使っているような、精巧なつくりの扉だ。

うちたち奴隷出身の召使たちはいつも屋敷の外側を任されるのでここにきたのは初めてだが、ここがだれの部屋かはなんとなくわかった。

「誰の部屋でしょう？」

チュライイブはノックをする前にうちにそう聞いた。

「エディ様の部屋でしょう？」

「あれ？知ってたっスか？もしかしてすでに来たことあったり？」

「来たことはないですけど……見たらなんとなくわかります」

うちだってそこまで馬鹿じゃない。

「ま、そうっスね。で、君の任務はこれです」

扉を指差す。

「エディ様ですか」

エディがどうかしたのだろうか。

「いま、彼は拗ねてます」

「は？」

子供か。

「今日、朝から僕と一緒にお城にいったんスけどー……そこでどれかのご兄弟様に会われたようで」

エディの兄弟。

なんとなく想像ではみんなエディと同じ赤毛で傲慢な感じだ。

「そこで嫌味を言われたか言ったのか……それで不機嫌になっちゃって引きこもっちゃってるんスよー」

見た目と性格のわりにメンタルよっわ！！

顔に出ていたのかチャライプも頷いている。

「ということなんでー」

だんだんだんっと強く扉を鳴らす。

もちろん拗ねているらしいエディが扉を開けるどころか返事すらしない。

それを確認したうえで懷から小さな鍵をとりだして扉を開ける。

え？合鍵？

「明日も城に行かなきゃいけないっスけど、このままへそ曲げておいて明日行かないなんていわない程度にはご機嫌にしてほしいっスよー」

なんだか激しく面倒くさそうだ。やっぱり断ろう。

そう思って口を開く前に急にうちの腕をがっちりつかんで、扉の内側に乱暴に投げられる。

「うわっ」

「女にできることといえばひとつスよー健闘を祈る」

語尾に星でもつきそうな感じで最後に親指をぐっと立てて扉を閉め

た。

おまけに鍵も閉めた。

え？これってうち不法侵入だよね。

エディ絶対不機嫌なんだからただじゃすまないよね？

「むっ」

無理無理無理！

内側から扉を開けようと内鍵をひねっても回らない。

どうやら青狸が鍵をさしたまま抑えているらしい。

ばかー！！

大声出したらエディが出てきそうだから心の中で叫ぶ。

「誰かいるのか」

叫ばなくてもエディの声が聞こえた。

「えっとー、うちです」

怒っているようでもなかったので返事を返す。

「ああ、ロゼリアか」

声にいつもの威厳というか、俺様オーラがない。

よほどなにかひどいことでも言われたのだろうか。

「エディ？」

なんとなく心配になってエディのほうへと足を向ける。

エディはベッドルームのほうにいた。

ベッドにうつ伏せに倒れこんでいる。

……まるで泣いていたように見える。

「どうしたの？」

「それはこちらのセリフだ。俺様がいくら魅力的だからといって夜這いか？」

「そんなわけあるか」

昼とは言わないが、夜には少し早い時間だ。

エディは体を起こした。その顔はもちろん泣いてはいない。

「どうせ青狸に何か言われたんだろ？……ほら、こっちはいいよ」

ぼんぼんとベッドをたたいてうちを呼ぶ。

……うちだつて、花も恥らう乙女。異性の隣になんかいろいろ危ない状況で座れるほど天然じゃない。

ということで、首を振って否定する。

「来い」

なんか少しいらついたらしい口調だつたけど、無理なものは無理だ。首を振る。

「……っち」

思いつきり舌打ちしたよ。

「！」

腕を急に引つ張られたかと思うと強引にベッドに押し倒された。

「！？？」

しかもそのまま顔が近づいてきた

「ぎゃあああああ！！」

「なんだ、その色気のかけらもない悲鳴は」

うちは全力で顎を押し返す。

「慰めにきたんじゃないのか」

「なぐさめに来たっっちゃ来たけどこんなことしにきたんじゃないよ！！」

夜這い否定した時点でこんなこと望んでないのわかるでしょ？！

なに嬉しそうににやにやしてんの？変態！

「ハジメテだとは思っていたが」

「ハジメテだよ！悪い！」

というか、今経験する気すらないよ！！

顔が赤くなつていくのが自分でわかる。

それを自覚すると余計に恥ずかしくなってくる。

「こういうことに疎いタイプだと思っていたからちゃんとした反応が意外だな」

「い、一般知識としてはね……そういう教育受けたし一歩手前まで経験したんだから」

おっとー……余計なことまで言っちゃったかな。

エディの顔が不機嫌に変わる。

「一歩手前まで行ったのか？一歩手前ってどこだ？」

気にするところ、そこ？そこなの？

ていうか、下ねたを話すために来たわけじゃないよ。

まあ、なんか変な妄想されても嫌だから言うけど。

「……やる気満々だったうちが抱きついて、うちだけがベッドインしたところまでだよ」

よく考えたらキスすらしてない。

こうやって男女でそういう目的でベッドに入ったのもハジメテだ。

……いやうちにはそういうつもりないけどね！！っていうか馬鹿正直にやる気満々だったことまで言うんじゃないかった！！後から猛烈に恥ずかしい！

「……ちよつと、何笑ってるの」

口を押さえているが、思いつきり笑っている。

いや、確かに今のは笑いどころだとは思うけど。

だけどエディの笑いどころはそこじゃなかったらしい。

「いや、さすがくそまじめなシユバルツ・リンヴェル陛下だと思っただけだ」

くそまじめっていうか、へたれっていうか、うちに興味なかったと
いうか……。

……ん？

あれ、なんでバル君のこと知っているの？

いや、王子なんだから知っているのは当然か。

「うちの相手がバル君ってことをなぜ知っているの」

まさか、他国の側室全員のことまで調べているのか……ていうか、
うちのこと調べてたのかな！

「この変態！^{ストーリー}！」

「お前の思考が面白いくらい読めるぞ」

やっと興がそがれたのかうちから退いてくれた。

うちもさつさと身を起こす。

今度この部屋に来るときは武器を持参しよう。そうしよう。

「お前が正妃候補ということも、もちろん知っているぞ」

「へえ」

そういう設定をうち自身忘れていたよ。

正妃どころかバル君の本当のお嫁さんにすらなれないのだから。思い出したらへこんできた。

何を思ったのか、うちの髪の毛の端をつかんでいじる。

今はあんまり触ってほしくないな。

居づらさを感じながらもされるがままにする。

「前から思っていたんだが、お前もしかして知らないのか？」

「なにを？」

うちの顔をまじまじと見つめて「知らないのか」と呟いた。

「自分がなぜウエルセント家から出されていたのかとか」

「……知らない。……というか、それを知っているエディがきも」

言い終わらないうちに殴られた。

エディのは痛いからいやだ！！

「ブリジエンを知っているか」

「誰それ」

痛みで顔をしかめながら首を傾げる。

初めて聞いた名前だ。

なんか、あきれたという顔された。知らないものは知らないよ。

「シユバルツの兄弟だ。どちらが兄とも言えないがな」

「バル君兄弟居たの」

居てもぜんぜん不思議じゃないけどね。

「ブリジエンの母は俺の叔母にあたる、ブリジエン従兄弟から事の経緯を聞いた」

「へえ、うちそういえば正妃様たちに挨拶にいったことはあるけど、顔は見なかったなあ」

ずーと頭を下げてたから、首が痛くなっただけ。

そういえば片方の妃は他国出身と言っていたっけ。それがまさかの国とは、世界は狭いものだ。

「で、それとうちが何の関係があるの？」

「お前、政治の道具にされてたんだ」

「ふーん？」

ちよつと意味わかんないけど、まあ、貴族なら利用されるものじゃないの？ うれしくはないけど。

でも、心当たりがなくて首を傾げる。

エディはすこし考えたようにうちを見つめてから言った。

「……教えてやる」

33 ロゼリア、知る（後書き）

ということとでちょっと進みました。たぶん

技術不足で季節とかの描写を一切してなかったのだ

いまの季節がわからないと思います（作者もわからない）

春ごろに家出決行したのでたぶん夏の初めだと思います。

反省

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2282o/>

ロゼリア物語

2012年1月13日20時59分発行